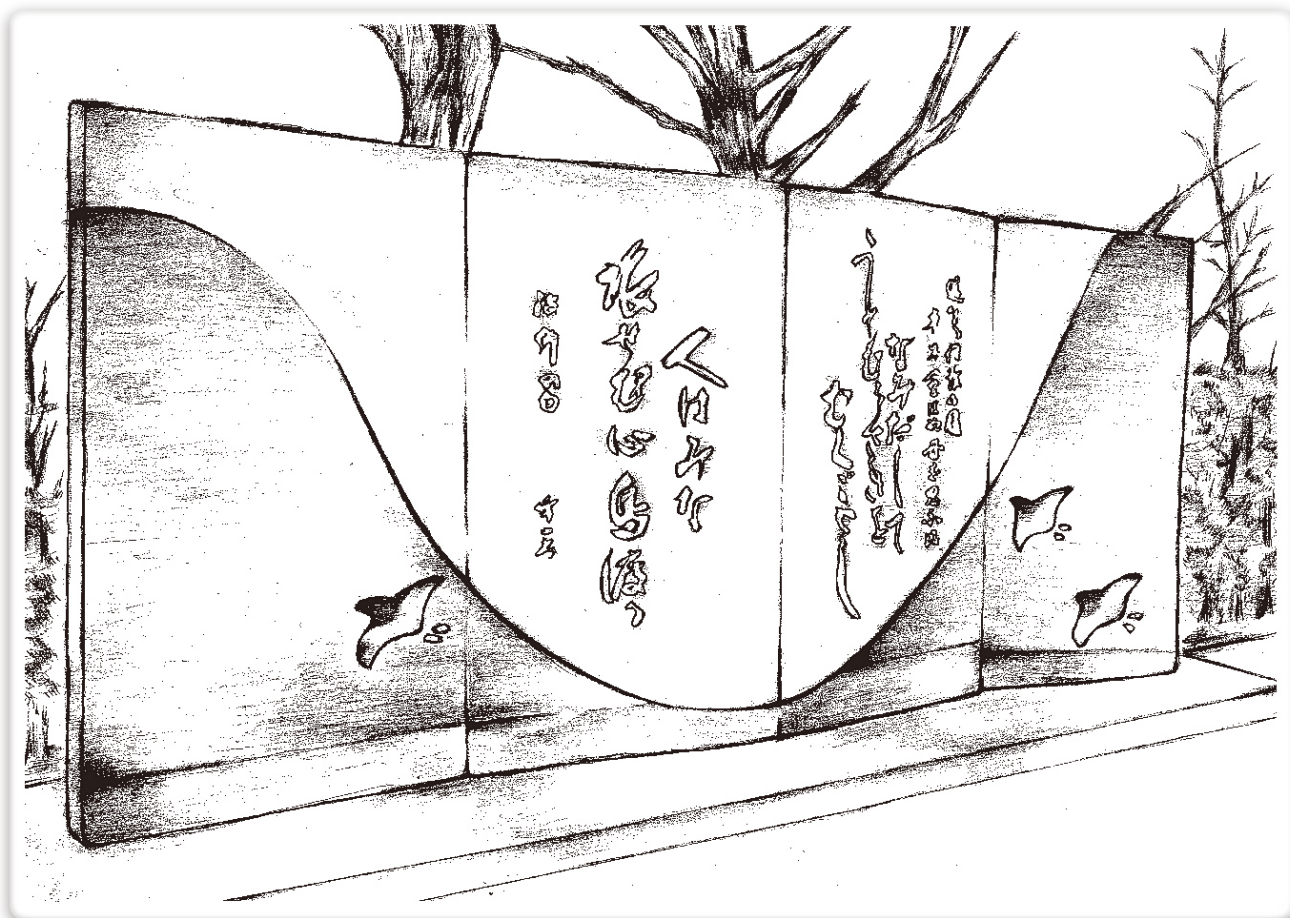


時代を切り拓いた先人たち



石田波郷句碑 (松山市持田一丁目・東部環状線沿い)

松山市

はじめに

「時代を切り拓いた先人たち」の発行に寄せて

あなたは、「このまちに住み続けたい」と思っていますか。「心地よい社会」と感じていますか。今、私たちが「当たり前」と思っていることは、本当に当たり前なのでしょうか？

今から約 150 年前「泰平の世」と呼ばれた江戸時代は、居住の自由も職業の自由も信仰の自由も制限された強固な身分制社会でした。人間の社会的な欲求を封じ込めることにより、変化を極力避け安定を求めた社会で、どんなに学問が出来ようと能力があろうと、いかに努力をしようと評価されることの少ない社会でした。

慶応大学創始者の福沢諭吉が「門閥制度（身分制度）は親の敵でござる」と封建の門閥制度を憤ったことは有名な話です。

この不条理な身分制社会は、江戸中期の安藤昌益の平等思想や幕末の農民の一揆と黒船の来航を機に崩壊しました。「すべての人は生まれながらにして平等である」という近代的人権思想が、西洋からもたらされたからです。

1868（明治元）年の明治維新で「四民平等」が打ち出されました。1871（明治 4）年にはいわゆる「解放令」と呼ばれる太政官布告が出され、それまで被差別身分におかれていた人々も「身分・職業とも平民と同様とする」とし、江戸時代の身分差別は法的にはなくなりました。

その後、自由民権運動や大正デモクラシーを経て今日の民主主義が確立されました。それを支えたのは有名無名を問わず多くの市民でした。

この松山にも既に高い評価を得、全国的に名の知られている多くの先人がいます。また、よく知られた業績とは別に改めて光を当てるべき功績もあります。一方、立派な足跡を残しながらも歴史という舞台に縁がなく、ただ記録の上にのみ書き留められた方や市井の人として地域の住民にしかその遺徳が語り継がれず、やがて時とともに忘れられつつある方も多くいます。

「人の世に熟あれ、人間に光あれ」ではじまる我が国の人権宣言ともいえる水平社宣言は、1922（大正 11）年 3 月 3 日全国水平社創立大会において朗読されました。1923（大正 12）年に愛媛県水平社が創立され、今年で 90 年を迎えます。私たちは、この機会に埋もれ風化しかけたこうした方々の功績や生き様といったものを再評価することで、私たちの社会の成り立ちをもう一度振り返り、今後の生き方の指針にしていきたいと思います。

こうした観点から、まとめあげた 21 人の先人の生き方に人権思想がどのように確立されてきたのかを辿っていただければ幸いです。

松山市長 野 志 克 仁

目次

はじめに「時代を切り拓いた先人たち」の発行に寄せて

1 「日本騎兵の父」	秋山好古…………… 1
2 「正直第一」（硬骨のリベラリスト）	安倍能成…………… 6
3 「百年先を考えろ」	伊佐庭如矢…………… 10
4 「私には俳句がある」	石田波郷…………… 13
5 「日照りとの闘い」	今村久兵衛…………… 19
6 「仏教改革者」	一遍上人…………… 21
7 「人権問題への取組と平和主義の実践」	加藤恒忠（拓川）…………… 26
8 「部落解放・労働運動の指導者」	小林 実…………… 30
9 「労研饅頭と夜学校奨学会」	竹内成一…………… 31
10 「塀のない刑務所」	坪内寿夫…………… 36
11 「愛媛県水平社の創立」	徳永参二…………… 45
12 「至誠の人」	新田長次郎…………… 48
13 「夜間中学校長」	西村清雄…………… 54
14 「松山藩最後のお殿様」	久松定謨…………… 57
15 「荊の道を乗り越えて」	福岡實一…………… 61
16 「俳句は文学である」	正岡子規…………… 69
17 「軍人の非戦・平和主義者」	水野広徳…………… 73
18 「一粒米」	森恒太郎（盲天外）…………… 78
19 「松山騒動の虚と実」	山内與右衛門…………… 84
20 「水との闘い」	安長九郎左衛門…………… 87
21 「太郎兵衛とお喜与さん」	…………… 89
22 「ロシア兵墓地の歴史」	…………… 92

「日本騎兵の父」

あきやま よしふる
秋山好古（1859～1930）



「日本騎兵の父」とも称される秋山好古は、福沢諭吉を尊敬しその志を大切にした人物であった。晩年は、郷里の松山で校長となり後進の育成に努めた。

新田長次郎や加藤恒忠らとも交流を深め、次代を担う若者の育成に力を注いだ。自らの功績をあえて語ろうとはせず、頼まれても断り、武勲を自慢することはなかったという。

1 弟思いの兄

1868（慶応4）年、秋山家は代々徒士侍という身分のため、暮らしは決して楽ではなかった。父母が、真之が生まれたとき「また子どもが増えて困る。せめて女の子であつたらよかったのに、男だから寺へやって坊さんにしようか。」と話しているのを聞いて、三男の好古が「お父さん、赤ん坊を寺へやってはいけない。わしが勉強してお金をこしらえるから。」と言うと、父母は好古の弟思いの真剣さに心を打たれ、赤ん坊を育てることにした。

この兄弟こそ、後に日本の運命を開く秋山兄弟である。日露戦争で世界最強といわれたロシア騎兵を破った秋山好古（兄）と当時無敵艦隊といわれたロシアバルチック艦隊を破った秋山^{さねゆき}真之（弟）である。

2 独力自立の信念

松山には「明教館」という藩校があり、7歳になった好古もここで学んだ。明治時代に入ると藩校は廃止され、6歳以上の男女すべてが、小学校教育を受けるようになったが、授業料が必要なため好古は学校には行かず、銭湯の釜焚きなどで家計を支えたと言われている。

16歳になり「無料で行ける学校はないものだろうか」と探して、大阪師範学校が、月謝がいらないことを聞き入学した。1877（明治10）年、教員として小学校で働いていた好古は、先輩から月謝も生活費もかからない、士官学校という軍人を養成する学校があることを聞き、見事に合格して、陸軍の騎兵を学ぶことになった。

3 兄と弟の生活

弟の真之（淳五郎）は、兄の必死の頼みによって寺にやられることもなく、秋山家ですくすくと育ち、小学校入学後 1879（明治 12）年松山中学校へと進んだ。

4 年生になったとき、真之は同級生の正岡常規（子規）^{つねのり}の家へ行き、常規が淳五郎に「中学をやめて東京で英語を学びたい。東京の大学予備門に行きたい。」と打ち明ける。真之は常規の話を聞いて「自分も東京へ行きたい」と思うようになる。

兄から手紙が届き、真之も上京することになった。好古（信三郎）の下宿に着いても、門外で兄を待っていた。遠くから馬に乗った兵隊がやって来るのが見えた。「淳か」と声をかけられ、大きくうなずいた。服装がとても立派だったので、一瞬兄だとはわからなかった。好古は 2 月、陸軍騎兵中尉になっていた。

軍服の立派さからは考えもつかないほど、兄の生活は質素であった。その夜久しぶりに兄弟でご飯を食べた。茶碗が一つしかない。兄に恐る恐る尋ねると「必要ない」と言う。この夜だけではなくずっと一つの茶碗で兄弟が交代でご飯を食べたとされている。また、好古はこの茶碗に酒をつぎ、一人で飲みながら騎兵についてよく話をした。

4 兄弟、それぞれの戦い

東京の生活が始まって間もなく、真之は先に上京していた正岡常規に「神田にある共立学校で学ぶと大学予備門に入りやすい」と言われ英語を学ぶことにした。

「お金のいない学校はないか」と考えた時、頭に浮かんだのは陸軍士官学校と海軍兵学校であった。真之は海軍兵学校に見事合格した。「伊予人で、お前が初めて日本海軍の士官になる」合格通知書を見た好古も嬉しくてたまらなかった。

真之はこの海軍兵学校の生活にすぐに慣れ、成績も優秀で 2 年目には一番になり 1889（明治 22）年 7 月に一番の成績で卒業した。

兄の好古はフランスの陸軍学校で学ぶことになり、以前にもまして必死に勉強した。1891（明治 24）年 12 月、好古は久しぶりに日本に戻り弟と再会する。今度は 1893（明治 26）年 6 月、海軍少尉になっていた真之が、イギリスから買った軍艦「吉野」を受け取りに行く役目でイギリスに行くよう命じられる。

1904（明治 37）年に始まった日露戦争は、当時満州と呼ばれていた中国東北地方が主な陸上の戦場となった。清国の一部であった満州の実権はロシアが握っていた。

ロシアは満州に鉄道を建設し、大量の軍隊を送り込んでいた。満州の次は朝鮮半島が危

ないと見た日本は、非常の手段としてロシアとの戦争を決意した。

好古は騎兵旅団の指揮官として、1904（明治 37）年 5 月遼東半島に上陸し他の部隊とともにほぼ満州の鉄道に沿って、激しい戦いを繰り返しながら北上し、決戦の場所、奉天を目指していた。好古は送り出した偵察隊の報告から、敵の動きに変化があることを察知し、ロシア軍の攻撃に備えていた。

戦場では不屈の将軍としてロシア軍からも恐れられ、日本人離れした体格と容貌をもった好古だが、子どものころは両親を悩ますほど体が弱かった。性格は穏和で、けんかや口論などめったにしないおとなしい少年であったが、学問には人一倍の思いがあり、家が貧しく学校に行けなかった間も自分で工面した書籍を読んで勉学を続けた。

何としてでも学問がしたかった好古は、17 歳のとき授業料のいらない師範学校に入学し、卒業して名古屋で小学校の教師の職に就くが、さらに高等の学問を修めたいという志を胸に秘めていた。

1877（明治 10）年、19 歳になった好古は、教師をやめて陸軍士官学校へ入学する。もともと軍人志望でなかった好古が陸軍士官学校に進む決意をしたのは、周囲の熱心な勧めや、家族に仕送りできる給金がもらえる事情によると言われている。

しかし、好古は士官学校の厳しい教育にもよく耐え、騎兵科を選択し、手に負えない評判の馬を、粘り強く調教して見事に乗りこなすなど、独特の技量も持ち合わせていた。以後好古は、陸軍において騎兵の道に専心することとなる。

陸軍士官学校に続いて陸軍大学校を卒業した好古は、1887（明治 20）年騎兵研究のためフランスに留学する。ここで、好古は騎兵の戦術や用法はもとより、馬の飼育や品種改良に関することから、戦闘に適した鞍や鎧などの馬具^{くら あぶみ}にいたるまで、騎兵につながるあらゆることについて熱心に研究した。

中でも好古が注意を払ったのが、斥候^{せつこう}（偵察任務の将兵）としての騎兵の役割であった。戦場を駆け巡って、華々しくぶつかり合う騎兵の姿は陸上戦闘の花形として勇壮であるが、騎兵には敵地の奥深くまで進入し、命がけで敵情を探ってくる偵察の役割も求められていた。敵の情報の正確で素早い把握こそ、今後の戦闘で勝敗を決める、重要な要素となることを好古はこのヨーロッパ留学で強く認識したのであった。

帰国した好古は、38 歳の若さで陸軍乗馬学校の校長となり、留学中の研究に基づいて、若い士官の教育に心血を注いだ。特に偵察や戦術に関する授業は、好古校長自らが教壇に立つこともあった。好古は騎兵将校の心得として、地形の観察から敵戦力の正確な把握のみならず、戦況を大所高所からの的確に判断する洞察力を持っていないといけない、騎兵将校は常に軍司令官の考えに沿って、自分で観察したことをもとに、作戦を進言する力がな

いと務まらないと、戦場における情報収集と分析力の大切さを力説した。

5 秋山好古の満州での功績

好古の騎兵が斥候として、最初に成果をあげたのは日露戦争の旅順攻撃であった。好古は騎兵大隊長として日露戦争に従軍し、部下を斥候に出して旅順要塞を詳細に調べさせ、これらをまとめて司令部へ提出した。

この意見書は、日本軍の総攻撃に大いに役立ち、これによって日本軍の犠牲は最小限に抑えることができた。日本軍の中には育成に時間と金のかかる騎兵を無用と考える者さえいたが、好古の活躍はこうした騎兵に対する考え方を改めさせた。

日露戦争でも、好古は、騎兵をさかんに斥候に送り出し、敵の情報収集に努めた。両軍が黒溝台で冬を迎え、戦闘が一時的に収まった後も、好古は絶えず斥候を出して、ロシア軍の動きに気を配った。敵地深く忍び込む斥候は、命をかけた危険な任務である。中には敵に見つかって捕虜になったり、命を落としたりする将兵も少なくなかった。

好古は部下が帰ってくると、自分のもとに呼んで心からその労をねぎらい、また命がけで収集した情報を大切にした。斥候の報告や捕らえた捕虜の話から、ロシア軍の動きに変化があることをいち早く知ることができ、ロシア軍の攻撃に警戒せよという情報を日本軍の総司令部に伝えていた。

しかし、好古に与えられた任務は、世界最強のコサック騎兵を破れという、破天荒な難題であった。同じ時、好古の弟であり連合艦隊参謀の秋山真之には、ロシア最強のバルチック艦隊を倒せという、これまたとんでもない使命が託されていた。

明治の日本政府は、国家の存亡のかかったロシアとの戦争で、陸・海軍におけるもっとも難しい課題を、二人の兄弟の肩に背負わせたということになる。

6 私立北豫中学の校長として

好古は 1924（大正 13）年、松山にある私立北豫中学の校長になった。当時弟の真之は亡くなっており、弟とともに過ごした松山に対して深い思い入れがあったのだろう。

日本の騎兵を育て、日露戦争では無敵といわれたロシア・コサック騎兵隊を撃退して「日本騎兵の父」とまで言われた人物が、郷里とはいえ地方の私立中学校の校長になったというニュースは、全国の人々をびっくりさせた。

好古校長は、妻と子どもを東京に残して、単身で松山市中歩行町の生家に戻ってきた。



秋山好古騎馬像
(歩行町 2 丁目・秋山兄弟生誕地内)

藁葺き屋根の質素な家で、そこから 20 分程度歩いて、北豫中学へ通っていた。陸軍の現役を退いた後、65 歳から 71 歳までの約 6 年間校長を務めたが、その間一日も休んだことがなく、一分の遅刻をしたこともなかった。

校長室は南東から日が差し込み、夏は大変暑い部屋であったが、一度も暑いと言ったことがなく、洋服のボタン一つ外れていたことがなかった。人を訪ねて部屋に入るとき、必ず室外で汗を拭い室内へ入っていた。

このように「時間を守る」「身だしなみを整える」

「整理整頓をする」といった生活習慣を、自らの身をもって示していた。

その姿を見て、学校内では先生や生徒の欠席がたいへん減り、授業料の滞納も次第になくなった。また、地域の会合などでも、特に時間厳守の習慣が植えつけられていった。このように好古校長が周りに与えた影響は大きかった。

軍隊で鍛え、自分に厳しい校長ではあったが、校長の怒った顔を見た人や、叱られた生徒は一人もいなかった。毎日優しく温かい表情で、始終にこにこと笑みを浮かべながら、学校の中・外を見回っていた。

好古は、家族や周りの者に、日露戦争のことを聞かれると「おれは満州では負けてばかりであった」と言い、手柄めいたことを語ることはなかった。

また、日露戦争で功績のあった多くの将官が、戦後爵位を得て、優雅な生活を送っているのとは対照的に、好古は質素な生活を貫いた。これは一つには戦争で命を落としていった、多くの部下を思っの好古なりの供養の行為であったと言われている。

1930（昭和 5）年、好古は惜しまれながら校長を辞めた。その年の 11 月 4 日 72 歳の人生に幕を閉じた。

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会（2011 年）

「正直第一」（硬骨のリベラリスト）



あべ よししげ
安倍能成（1883～1966）

哲学者であった安倍能成^{よししげ}は、人はいかに生きるべきかを追求した。教育者としても、常に「正直であり、ひたむきに自分の人生を切り拓いていける、頼もしい若者であれ。」と言いつづけた。

1 正直第一

能成は、西法寺の北隣の家で生まれた。この人の記憶力は抜群だったという話はよく聞く。酒席で「汽笛一声」の『鉄道唱歌』を1番から36番まで続けて歌った。本人は「記憶力という能力は、上等の範囲に入らぬ」と主張していたそう。

ともあれ、その記憶力を大いに発揮した彼の本がある。自叙伝「我が生ひ立ち」は、幼年時代から終戦直後までの思い出をまとめたもので、やはり彼の著である「戦後の自叙伝」と対をなす。

「我が生ひ立ち」の半分ほどは、第一高等学校（大学予備門の後身、東京大学教養学部的前身）に進学するまでの、松山での幼・少年時代について書かれているから、明治中期から後期にかけての、大街道（小唐人町）を中心とする松山のありさまがよくわかる。向こう三軒両隣の生活、小学校、友人、子どもの時の歌など、思いつくままに書かれている。

何しろ正直を旨とした人のことだから、全然作意がない。それがたまらぬ魅力となっている。隣の西法寺で梟^{ふくろう}が鳴いたと、この本に書いている。大街道の古老の話にも梟が出てくる。「フルツクが鳴いたけん、もういの（帰ろ）や」と、子どもたちは遊びをやめて家に帰って行った。

京城帝国大学（現ソウル大学）の教師から、第一高等学校の校長となった能成は、憲兵隊に呼ばれ厳しい口調でいわれた。「校長、あなたの教育は間違っている。一高生を甘やかしすぎだ。」しかし、能成は臆することなく言い返した。「わたしは年をとったので、生徒を甘やかしているところがあるかもしれん。しかし、一番嫌いなところは『面従腹背』である。表面的なことよりも、生徒の中身をよく見てほしい。」当時の憲兵隊は鬼よりも怖いと恐れられていたので、このような発言を、憲兵隊に対してする人はいなかった。

能成は、日本の敗戦が濃厚となった時、第一高等学校に留学していた中国人生徒43人を山形に疎開させた。それは憲兵隊に留学生が見張られていたこともあったが、何よりも

中国人に対する国民感情が悪化し、日本の生徒からも快く思われなくなっていたからであった。

この時期の日本は、朝鮮半島や中国の一部を占領下においていたため、多くの日本人に大国意識が生まれ、アジア諸国に対する優越感が強まっていた。

能成は朝鮮半島に住んでいたことから、現地の人々と平等に接していたため、このような大国意識はもつべきではないと考え、生徒にもそのことを教えていた。

能成は晩年、愛媛に帰郷すると、頼まれて書画を書くことが多くあった。特に好んで書いたのは「正直第一」この言葉を選んで書くのには理由があった。

能成が小学生のとき、算数のそろばんの時間のときであった。先生が足し算を読み上げ、答えを言って正解した人に手を挙げさせると、能成だけが手を挙げることもあり、その答えはいつも合っていた。

ある時、能成は答えが合っていないのに手を挙げた。先生は能成のうそを見破り、放課後、職員室に呼ばれ「なんであんなうそをつくんだ。それでは君の値打ちがなくなってしまふ。」と言われた。能成は、この言葉をずっと忘れなかった。

後に学習院の院長になったとき、生徒たちによくこの時の気持ちを次のように話している。

『何より大事なのは正直ということです。ごまかしてはだめです。ごまかしは、また次のごまかしを生んで、いつまでも本当のものは生まれません。わたしは、あの時から自分にうそをつくまいと決心しました。』

2 文部大臣 安倍能成

1945（昭和20）年、日本は太平洋戦争に敗れた。都市のほとんどは空襲で焼かれ、人々も将来に対して、明るい展望が持てない時代であった。

そんなある日、東京大学の田中耕太郎と竹山道雄が、日本の将来について語る機会があり、竹山は田中に「日本は戦争に負けて大変な時期です。こんな時こそ、安倍さんに文部大臣になってほしいですね。戦争中に軍艦なんか造るより、学校を一つでも二つでもつくった方がいい、と言った人ですから。」という、田中は「あの人は優れた学者だから、政治にかかわるような人ではないと僕は思う。もし、安倍さんが文部大臣になったら、安倍さんを支える人が必要だ。でもそうなれば日本の教育をよくしてくれるだろう。」やがて、この二人の会話は現実となり、翌年幣原喜重郎^{しではら}内閣で文部大臣に就任した。

これまで、政治にかかわることのなかった安倍の名前は、他の大臣に知られていなかった

た。そんな中、国民の期待を背負って、文部大臣として活躍することになる。

戦後、日本を占領した連合国軍総司令部は、日本を民主化しようと意気込んでいた。日本国民の多くが将来に不安をもち、教育についても先の見通せない時代であった。そんなとき、アメリカ合衆国の教育使節団が、日本にやってくるようになった。使節団と話をするのは文部大臣の役目である。

使節団の前で、能成は、静かに英語で話し始めた。

「日本は、あなた方の国に戦争で負けました。この結果は残念ですが、このことによって多くのアメリカ人が、日本に来ることとなりました。戦争によって両国は一層近づくことができたといえるでしょう。」堂々たる演説であった。

思いがけない言葉に使節団は驚き、次の言葉を待った。

「日本には『勝てば官軍、負ければ賊軍』という言葉があります。敗れたもののすることは、何も受け入れられない『力は正義である』という考え方です。しかし、あなた方にはこのような考えにならず、ぜひとも、よき戦勝国となっていきたい。我々は、敗戦国として卑屈になることはありません。弱点を克服し、この災いを福としていきたいのです。わたしたちはアメリカの文化について、深く理解することができていませんでした。ぜひ教育によって、お互いを正しく理解し、われわれ日本人が、民主的で国際的な国民となることを希望します。改革すべきことは、大胆に改めたいと思います。お願いしたいことは、無理にアメリカ的なことを押し付けないでほしいということです。この訪問が両国にとって、世界平和と人類の福祉への貢献になることを願っています。」この演説が終わった瞬間、使節団からも大きな拍手がおきた。

残念ながら、就任わずか3カ月で、幣原内閣の解散とともに大臣の職を辞した。しかし、この後、教育行政に携わった経験を活かして、多くの仕事をしていくことになる。

3 新しい時代に向けて

1946（昭和21）年8月、能成は帝国博物館（東京国立博物館）の館長に就任した。戦争中、東京は空襲が頻繁にあり、戦争の被害を避けるため多くの資料が地方に送られていた。これらの資料をもとに戻すために力を尽くした。また、資料の保存に対しても、物資調達が困難を極める中、修復に向けて指揮をした。

中でも、まだ戦争の爪あとが残る1947（昭和22）年に正倉院展を行い、全国から15万人もの人々を集めた。ちょうどこのころ、社会科という新しい教科が作られ、多くの子どもたちが博物館を訪れ、日本文化に触れることができた。



また、能成は1946（昭和21）年の4月、学習院の院長も引き受ける。学習院はもともと華族のための学校であった。連合国軍総司令部の命令で廃校予定であったが、能成は私立高校として存続させた。当然補助金は打ち切られており、経済的に苦しい運営を迫られていたが、能成は寄付金を集めバザーを行い経営を立て直していった。

愛媛にもたびたび帰郷し、生徒募集を呼びかけた。亡くなるまでの20年間、学習院院長として、正直に行動することの大切さを、語り続けたことは言うまでもない。

学習院の院歌には、能成の熱意と熱い思いが残されている。

『二つな ^うけし我命 おのがじし 育て^{きた}鍛へて
もろともに 世にぞ捧げん ^{とこ}常照らせ 真理と平和』（学習院歌より）

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会（2011年）

「百年先を考えると」

い さ にわ ゆき や

伊佐庭如矢（1828～1907）



伊佐庭如矢胸像
(道後湯ノ町・道後温泉本館北側)

伊佐庭如矢は本姓を成川と言ひ、明治維新後、愛媛県吏員や高松中学の校長、金刀比羅宮禰宜に就いた。その後初代道後湯之町町長となり、温泉の町営及び三層楼本館の改築、日本唯一の皇室専用浴室である又新殿の増築や道後鉄道設立などに尽力した。

また、如矢が県の書記係をしている時、政府によって松山城の廃城が命じられた。彼は急遽嘆願書を作り、松山市民のお城に対する敬愛心を強調し、松山城の公園化を申し出た。この適切な措置が政府を動かし、1874（明治7）年松山城

の存続が決定した。

如矢は祖父の時代に、土佐から道後に移住して来た。道後で町医者をしていた父・成川国雄と母・マキの間に、三男として1828（文政11）年に生まれた。

少年期から学問をよく好み、松山藩の学者三上是庵に師事し、儒学や国学を学んだ。大いに研修し師匠の資格を得た。通称斧右衛門といい、震庵、禿毫庵碧梧桐と号した。

28歳から45歳くらいまでの17年間、松山市御宝町に老媒下塾を開き、子弟の教育をした。塾からは社会の多様な分野に進出し、大いに活躍した人物が多い。

1868（明治元）年、長男に家督を継がせ、別籍して伊佐庭を名乗った。愛媛県吏員や高松中学校校長、また金毘羅宮禰宜を務めた。如矢は頭脳明晰で、博学多才の誉れが高く、人からの信望も厚かった。

金毘羅宮に務めていたとき突然、道後湯之町の町長就任を依頼された。その理由は、湯之町の再構築であった。道後は文字通り温泉町であり、霊泉として世に知られていた。江戸時代ははじめより湯量が少ないため、70軒あまりある旅館には内湯がなく、町の中央にある一の湯、二の湯、三の湯をもつ本館と、その南に接する養生湯の二棟の建物でこの町を支えてきた。

養生湯は、江戸時代1834（天保5）年に改築されたもので、老朽化が著しいだけでなく危険な建造物であった。1888（明治21）年には市町村制が施行され、温泉の経営は湯之町が、直接経営することとなった。養生湯は周辺の人々、遍路、行商人でにぎわったが、入浴料は無料であったために、改築費などの備蓄は皆無であった。

1890（明治23）年2月、如矢は62歳になった。多くの人々に懇願され、町会議員による投票の結果、満場一致をもって町長に当選した。如矢は無報酬を条件に、道後湯之町の初代町長に就任した。そこで温泉経営を町民2名議員2名で、温泉常設委員会を組織し担当させた。

如矢はまず、養生湯の改築案を提示し、町の将来を考え養生湯は有料とした。養生湯は、お遍路さんや周辺部の人々が無料で利用し、生活の一部となっていたため、反対運動が起きた。如矢は相手の話をしっかり聞いて、取り入れるべきところは取り入れた。しかし、ゆずれないところは、一切の妥協をしなかった。危険な状況になることもあったが、旧養生湯の廃材を利用して入浴料を稼ぎ、建設費にするよう説得を重ねた。

約1年たった1891（明治24）年2月、養生湯の改築が町議会で正式に議決され、反対していた人々も松の湯、西の湯の建築を条件に、入浴料徴収に賛成した。

湯釜は香川県の庵治石、浴場は愛媛県の大島石を使用した。設計者は大工棟梁坂本八郎、石工は石井源兵衛が担当した。入浴料は8厘とした。

如矢は、町長に就任したときから、温泉を中心にした新しい湯之町の構想を練っていた。1893（明治36）年、道後鉄道を設立し、道後から三津口間の鉄道を開通させ、高浜や三津浜を訪れる人々の、道後への交通路を開いた。また荒廃していた湯築城跡を回遊式庭園に改修し、道後公園として町民の憩いの場とした。

養生湯の完成するころ、温泉本館の建設を考えていた。本館は道後温泉の中心となるもので、他に類を見ないような建造物を設計した。「まさに驚天動地的なものになるだろう。ほとんどの町民は反対するだろう。どのようなことが起ころうとも、道後の発展には成し遂げねばならない。」と如矢は決意した。

1892（明治25）年、年明け早々町議会を招集し、如矢は温泉本館計画の規模を発表した。養生湯に接する浴室を支配する総3階建の、温泉本館の建設計画を発表した。

建設資金は13万円（現在の13億円）であることも報告した。

町議会で発表された建物の規模と、その建設資金についての内容が、すぐさま町民の間に広まっていった。町民は温泉本館の建設は町財政を困窮させ、住民サービスの低下や、増税されるのではないかと心配しはじめた。

やがて反対を表明する人々が、計画を中止するよう直接町長に訴え、対決するようになった。反対派は個人から集団化し、自宅に押しかけたり、通勤途上待ち伏せして、暴力に訴えようとした。

さらに反対派数百人が、道後の宝厳寺に結集していることが伝わって来た。如矢は町長辞任を決意した。如矢の計画に賛同する人々が宝厳寺に駆けつけ、時間をかけて説得した。

反対派との話し合いの中で、如矢は「建設は私がしなければならないことではない。道後の発展のために、必要と考えるようになったら、そのときでよい。」と訴えた。

「この金額を聞いて、驚かん者はいないだろう。何をばかな、と思う人もいるだろう。確かに湯之町にとっては、気の遠くなるような大金だ。しかし、この町の将来のため、百年先のため、わしは命をかけても、やらないやいかんと思っとる。大変じゃということは、だれよりもわしが一番わかっつるつもりじゃ。道後は神代以来、日本一の名湯じゃ、どうしてもそれにふさわしいものを建てんと、せっかくの値打ちが下がってしまうだろう。」その場にいた人々に、如矢の言葉は心に響いた。

しかし、ことはそう簡単な問題ではない、何せ金額が大きすぎる。また、注ぎ込んだ金額に見合う集客が得られ、資金が回収できるのか、みんなそこがわからなくて、疑心暗鬼になっていったのである。

話し合う中、賛成派や反対派も、道後温泉が道後の繁栄のための中軸であること、全国で道後にしかないものとし、多くの集客を得て、町民が潤うものとするこで、一致した。町民全員が苦難をわかち合う決意もした。

1892（明治 25）年、神の湯新館で起工式を行い、如矢や町民の念願であった、道後温泉本館新築工事が始まった。多くの人々から、善意の資金の提供があった。総工費 13 万 5 千円（現在で 13 億 5 千万円）であった。

1894（明治 27）年、和風建築物の建築構造に、西洋建築独特のトラスト工法を用いた、現在まで伝わる道後温泉本館が完成した。1899（明治 32）年、すべての計画が完成した。

2012（平成 24）年、道後温泉本館完成から 120 年を迎える。



道後温泉

参考文献

「道後の夜明け―伊佐庭翁ものがたり」 加藤恵一（著） 道後温泉旅館協同組合 （1988 年）

「私には俳句がある」

いし だ は きょう

石田波郷（1913～1969）



石田^{てつお}哲大は、1913（大正 2）年、温泉郡垣生村の農家、父・石田惣五郎、母・ユウの二男として生まれる。1919（大正 8）年 4 月、温泉郡垣生尋常小学校に入学した哲大は、小学校を卒業する頃には、学年で一番の優秀な成績を修めるが、家が貧しいために進学をあきらめ、どうしたらよいものかと思案に暮れる日々が続いていた。

小学校の卒業まじかに、区長の新山磯五郎が哲大の家を訪ね、父親に哲大を中学校へ進学させるよう勧める。父親は「あれ（哲大）の兄（和弘）は、小学校だけですから、哲大だけを中学校へはやれんので」「あれの祖父と母親とも、相談してみますがな、わしとこの暮らしむきでは…」と話を断った。

父の惣五郎は、実は婿養子で、大事なことは祖父と相談なしには決定できないようだった。その夜、区長が訪ねて来て惣五郎と何か話している様子を、仕事場で見ていた祖父は「区長さんの用事は、なにじゃった」と問うた。惣五郎は「哲大を中学にやっつてはどうかと、勧めてくれまして」と言った。

「そのことか」「金さえ工面できれば、やってもええ思ってるのか」「そりゃ。でも家には、そんな余裕はどこにもないで」「ほんじゃけん、あればやっつてやる、つもりはあるのかと、聞いとるんじゃがな」「和弘の気持ちも、考えてやらんと」「和弘には、わしからよう、話して聞かせるで。とにかくこれを使つて、県中受けさせてやれ」祖父が、ふところから、巾着をだした。中から取り出したのは、祖父の虎の子。しわくちやの 1 円と、10 円紙幣の交じった束だった。

大工をしていた祖父の配慮により、進学をあきらめていた哲大は、兄も賛成してくれて飛び上がるほどよろこんだ。そして、県立松山中学校に合格した。入ったとき A 組の副級長になった。

同級生には中富正三（俳優・大友柳太郎）、洲之内徹（作家・美術評論家）、森元四郎（京大文学部卒業後、母校松山中学の教諭、高等学校長で退職）等がいた。

1928（昭和 3）年哲大は中学 4 年生のとき、中富の勧めで山眠と号して句作を始める。

余戸駅をでて、哲大は振り返った。同級生だった辰夫が、まだ駅からでてこないからだ。辰夫は、「ちょっとも変わってんな」といい、また駅舎を振り返った。辰夫は小学校を卒業と同時に、神戸へ働きにでた。きょうは数入りで、久しぶりに戻ってきたのだ。

高浜港で、汽船を降りた辰夫は、伊予鉄道の電車で松山市駅まできて、乗り換えの軽便鉄道を待っていたのだ。哲大を見つけた辰夫は、なつかしそうに顔をほころばせて、哲大に近寄って来た。

「哲ちゃん、もうじき中学卒業やろ」「うん」「卒業すると、どうするんや」「うん、まあ」「哲ちゃんは、優等生か知らんが、そんなことやと、都会では生きていけんぞ」「どうして」「そんな、もの言わずでは、話にならんじゃろ」「話すことないけん」「なかっても、べんちゃらの一つも言わな、相手にされんぞ」「そうかな」「哲ちゃんは、その性格を直さんと、生きていけんぞ」

「哲ちゃん、都会の人は冷たいぞ。俺らの村の者は、汚いもののようにいわれるんやぞ」辰夫は、声を落として言った。「貧乏のせいかな」「哲ちゃんは、まだ知らんのか」辰夫は声を、さらにひそめて、「村のこと、まだ知らんのか」といい、あきれた表情をした。「なに？　なんのこと」哲大には、思いあたることなく、なんのことか判らなかった。辰夫は、それっきり押し黙り、別れぎわにも、会釈するだけで、家への枝道へ曲がっていった。

放課後、哲大は洲之内に逢いにいった。図画教室でデッサンをやっているはずだった。彼は、美術学校の受験を控え、その実技試験のために、毎日図画教室に居残っているのだ。

人の気配に手をとめて、洲之内は振りかえった。

「石田か、なにか用か」「うん、いつかの『破戒』を、もういっぺん貸してほしいのや」「ああ、あした持ってきてやるよ」

洲之内はまた哲大をみた。そして、「なんで、もういっぺん読むのや」といった。「ちょっと、な」「ちょっとか。きみはあいかわらず曖昧やな。無口なだけ思いが深いわけやろな」彼は、石膏のビーナスを、みつめては鉛筆を動かす。

「なんでおれに『破戒』を勧めてくれた」と言う哲大に、洲之内は手を止めて「そら、ええ小説や、思ったからや。それにきみは読んでいると思ってたのに、読んでないというから、それだけや」「それだけ？」「ああ、それだけや」洲之内は、机のうえにスケッチブックをおくと、哲大に体を向けた。哲大も椅子にかけた。

「おれのこと、おれの村のこと、知ってたんやろ」「知ってたよ。いったことはないけど」「差別されている村なんやろ」「差別されている村？　哲ちゃん、きみ知らなかったのか」彼の反問は、哲大のもっとも知りたいことに、答えた形になっていた。「知らなかった」「そ

うか、知っているものとばかり思ってたな。そういえばこの前、特殊部落ということばも知らなかったな」「うん」「どうして知ったんかい。なにかあったのか」「霽月さんとの句会で」「そうか。なにかいわれたのかい」「うん、普通は穢多は座敷にあげないのを、きみはあげてもらってるって」「らっしもないことを」洲之内は、かなしげな表情をした。彼は、時にかなしげな表情を見せるが、今日はいまにも泣きだしそうにみえた。「殴ってやったかい。…きみの性格では、むりか」

「元気出せよ。負けたらだめだよ」「うん」洲之内の友情は、ありがたく、胸にしみた。

哲大が、中矢秋葉に連れられて、南山房（五十崎古郷は自宅をこう呼んだ）を訪ねたのは、古郷 35 歳の折りである。古郷は 39 歳 9 か月でこの世を去っている。哲大は 2 年後には、東京へでる。哲大と古郷との触れあいの時間は、わずかなものといえる。しかし、哲大は大きな影響を、古郷からうけた。

「哲大くん、人間の値打ちは、なにで決まると思う」そういう古郷の頬骨のでた、まじめな顔つきをみて、哲大は顔をふった。「じゃあ、どういう人間が、賤しい人だと思う」「賤しい人間というのは、いないと思いますが」哲大は前方をみつめていたが、風景は眼にはいっていなかった。「お釈迦さんは、たくさんの賤しい人間をあげておられるが、とくにこう、おっしゃっている。『尊敬されるに値しない人が、尊敬を受けているのは、盗人であり、かれこそ最も賤しい人である』と。だから賤しい人はいるんだよ。ただし賤民という制度、その地域に生まれただけで、賤しい人間だとするのは、もちろん誤りだよ」「はい」哲大は、そう答えながら、古郷が哲大たちの村のことを、いつていると、すぐ判った。そうか、制度なのか。ということは、人為ということなんだな。と哲大はそう思った。

余土村の有志を中心に組織された、俳句の会「南川会」が、森緑葉さんの家で開かれた。緑葉さんは、本名豊一。1902（明治 35）年生まれ、28 歳。有望な青年俳人であった。

「きみが石田くんかい。毎日、20 句 30 句と、つくるのかいね」そうたずねる緑葉に、哲大はてれくさく、うなづくばかりだった。

その晩、哲大は、山眠という俳号を変えようと考えていた。できるなら、古郷さんの郷の一字をもらい、いい俳号をつくりたい、そう思っていた。

古い新聞紙に「華郷」と筆で書いた。ついでに「水郷」「山郷」「海郷」「波郷」と書き並べた。「葉郷」もいいなあ、中矢秋葉さんの葉の字をもらって、などと熱中していると、五十崎民彌くんが現れた。「哲ちゃん、なにやっとなる」「ああ、民ちゃんか。俳号を考えよる」「それはええ、だいたい山眠じゃのいうのは、いかんよ。眠っとなんは、いかんもん」

「うん」哲大は、新聞紙に眼をおとした。「古郷さんに、一字もらいたいが、どうしたらええかい」「頼んでみいな。おれも、一緒に頼んでみちやる」「哲ちゃんの、ところは、漁港もあって、海のそばやからして、波がええぞ、波郷が」といった。

石田哲大の俳号が「波郷」となったのは、それから2～3日経った後のことである。



古郷が、哲大を東京へ送り出そうと考えたのは、もちろん哲大の才能、その可能性を、見抜いたことによるだろう。しかし、同時に哲大を松山から、できる限り遠くへ離したいという、考えが秘められてもいただろう。

1871（明治4）年にいわゆる『身分解放令』が出されたが、明治政府が差別をなくする事業・教育をしなかったために、人びとの意識から、賤視観念は拭われなかった。

小説『破戒』の主人公は、生まれた村のことを隠して、師範学校で学び、教師になっていたが、秘密が暴露され、学校を追われるという小説である。

生まれた村を隠すというのは、被差別部落に生まれ育った者が、社会へでていく方法として選ばれ、それは今日もなおつづいているだろう。

古郷が、哲大に東京へ出るよう、勧めている理由に、この考えがなかったとは、いえないだろう。松山で哲大が、著名な俳句作家となったとしても、心ない人びとの陰口を、阻むことは不可能だろうからである。

東京という新天地で、哲大を知らない人たちの、渦のなかで、存分に活躍させたいというのが、古郷の考えであった。

古郷が秋桜子を選ぶに至った経緯には、極めて運命的な挿話がある。五十崎古郷は当時世評の高かった『ホトトギス』4Sの一人、水原秋桜子の句に強く惹かれ、その指導を受けたいと思い立った。たまたま主治医の今川七郎が東大で秋桜子の2年先輩にあたることを知り、国内留学で東大医学部に行っている今川七郎に、同じ医学部研究室にいた秋桜子への紹介を頼んだ。

4Sとは、昭和初期のホトトギス黄金時代を代表する水原秋桜子・山口誓子・阿波野青畝・高野素十の4人、秋桜子・誓子・青畝・素十のイニシャルSをまとめている。

古郷は、哲大が『馬酔木』2月号で、秋桜子選「新樹集」の巻頭に選ばれたことで、秋桜子へ依頼の手紙を書くチャンスだと考えた。

「波郷が家業にも精出しせず、勤めにも出ず、ぶらぶらと定まった方向もなく無為の日を過ごしているのは、この土地に長くいたくないという気持ちではないかと、五十崎古郷は推量した。それが如何なる理由からであるか、それを知るのは、五十崎古郷と今川七郎だけであろう。あるいは、水原秋桜子も二人から知らされていたかも知れぬ。」ということである。

「五十崎古郷は、東京の秋桜子に対し、便箋29枚にわたる手紙を書いて、縷々と波郷受け入れを懇請し、哀願した。五十崎古郷は『涙を流しもって書いた』と妻のキシエに述懐したくらいである。しかし『涙を流しもって書』かれた内容が何であったか、それは書いた人と、その手紙を受け取った人以外に、知る人はない。」

「中矢秋葉の語るところによると、波郷上京に陰の力になって努力した人が一人いる。それは先にも述べた松山日本赤十字病院の院長で、五十崎古郷の主治医でもあった今川七郎である。」

波郷は1932（昭和7）年上京して「馬酔木」発行所の事務手伝いをしながら、秋桜子の庇護をうけ、中央俳壇で活躍の基礎を築く。1933（昭和8）年秋桜子は勇断をもって俳句の世界で最初に同人制を敷いた。つまり同人は無鑑査で俳句を発表できる制度であり、当時としては画期的なことであった。

そして軽部鳥頭子、百合山羽公、滝春一、篠田春蟬、塚原夜潮、佐野まもる、窓秋、竹秋子、五十崎古郷、相生垣瓜人、佐々木稜華、波郷の12人が同人に選ばれた。

波郷は満20歳で最年少であった。秋桜子の期待の大きさが想像される。

「波郷の句」

柿食ふや	松山人の	顔黙り	1939（昭和 14 年）
年越しや	几の上に	母の銭	1945（昭和 20 年）
柿食ふや	遠くかなしき	母の顔	1947（昭和 22 年）
満天星に	隠りし母を	いつ見むや	1948（昭和 23 年）
遠く病めば	銀河は長し	清瀬村	1949（昭和 24 年）
秋いくとせ	石鎚山を見ず	母を見ず	1953（昭和 28 年）
柿食ふや	命あまず	生きよの語	1955（昭和 30 年）
梅檀の	実の垂るる日の	城見たし	1956（昭和 31 年）
柿食ふや	膝あつきまで	南の日	1956（昭和 31 年）
柿食へり	食るに似しを	ゆめを食う	1957（昭和 32 年）

参考文献 「小説 石田波郷」 土方鐵（著） 解放出版社 （2001 年）

「日照りとの闘い」

いまむらきゅうべえ
今村久兵衛（～1630）



現在の古川町に久米郡片平村という村があった。片平村は水の便があまりよくなく、土地は乾燥するところであったが、重信川の氾濫を恐れて、村人たちはここに住んでいた。

1629（寛永 6）年の夏は、今までにないひどい干ばつで、雨が一切降らず、田の多くは表面に亀裂が走るほど、乾ききっていた。「今年の米は大丈夫だろうか」当時、片平村の庄屋だった今村久兵衛は、心配そうに毎日空を眺めていた。

しかし、ほとんどの田は壊滅状態で、一粒の年貢米を納める見込みもなく、農民たちは途方に暮れるばかりであった。

久兵衛は、代官に田の様子を見て、年貢を減らしてもらうよう頼んだ。ところが、田の様子を見てもらうこともかなわず、今までどおりの年貢を納めるよう命令された。

久兵衛が村に帰って、そのことを村人に伝え、みんながつくり肩を落とし、頭をかかえていたが、そのうちやり場のない気持ちは、不平不満に変わり、いらだちがくすぶりはじめた。「お役人は、われわれに死ねというのか」悔しい思いは、久兵衛とて同じであった。

ところが、日照りに追い討ちをかけるように、稲の病害虫（ウンカ）が、古川一帯に大発生してしまったのである。このままにしておいては、他の村にも、被害が広がる恐れがある。枯れた稲を焼いてしまうしか、方法がなかった。

しかし、代官は相変わらず田の様子を見ることもせず、ウンカの害に侵された稲を焼くことも許さず、年貢を納めるよう命令したのであった。

村人たちの我慢が限界に達した時、西風が強く吹き荒れた日に、稲に火を放った者がおり、田畑はたちまち焼け野原になってしまった。

このことを知った代官は「天災に見せかけ、年貢から逃れようと企んだものだ。」と激怒して、多数の農民を捕らえた。一人ひとり厳しく問いただしたが、農民たちは、口を堅く閉ざし、誰ひとり話す者はいなかった。

代官も口を割らせようと農民を何日も家に帰さず、厳しい取り調べを続けた。村では、夫が帰らず、妻と子どもの食べるものもなく、苦しい生活が続いた。

この様子を見ていた久兵衛は、決意して代官所へ名のり出た。「放火は自分の一存でやったことです。農民たちの知ることはありません。どうか農民たちを釈放してください。」

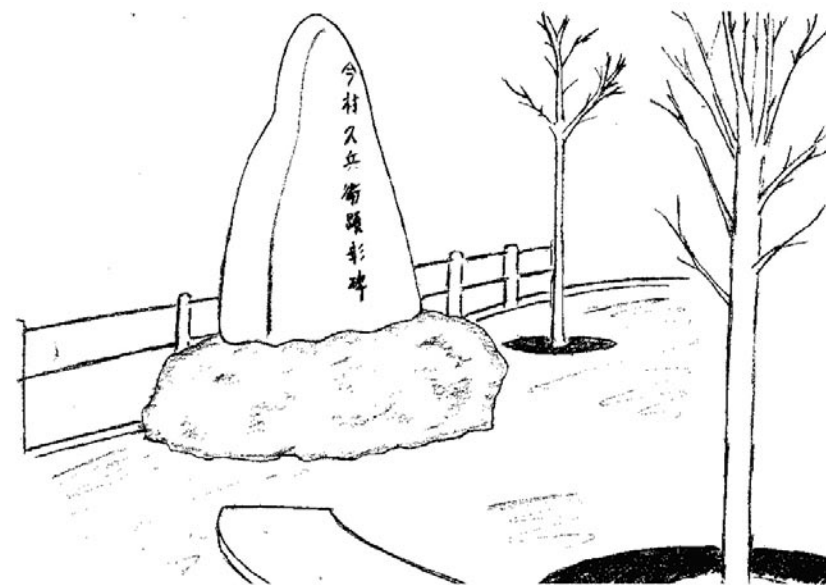
と願い出たのである。

これを受け代官は「殿様に年貢米を差し上げたくないために、庄屋久兵衛が入れ知恵して、稲を焼かせたものだ。」と藩主に言いつけた。藩主はひどく怒り「久兵衛を打ち首にせよ。」との厳しい命令を出した。

翌年、今村久兵衛は朝生田原ではりつけにされた。その日村人たちは、だれが先導したわけでもなく静かに刑場に集まった。みな拳を握り締め、柵が倒れるのではないかと思うくらい近づき、久兵衛の姿を目に焼き付けようとした。

村人たちは自分たちの身代わりとして、自らの命を投げ出した庄屋、今村久兵衛のことを忘れまいと心に誓った。

久兵衛の死後、人々は、長徳寺の境内に墓標を建て、また、若宮社を建て、百年祭を盛大に行ったと伝えられている。昭和に入り「正覚院」という院号も与えられ、今でも8月25日には、地元の人々による供養が行われている。



今村久兵衛顕彰碑
(古川北2丁目・はなみずき通り)

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会 (2011 年)

「仏教改革者」

いつ ぺんしょうにん
一遍上人 (1239~1289)



鎌倉時代末期、巨大な幕府権力、既成宗教の横暴に敢然と立ち向かった乞食僧^{こつじき}が、「一遍上人」である。「一遍上人」は悩める民衆救済のため、「人は貴賤によって差別されない。血穢^{けつえ}などといって、女性は差別されない。」と「踊り念仏」を唱えて、全国を16年間歩き続けた。

鎌倉時代の日本は、武士が台頭し武力が重視される時代となり、国のいたるところで争いがあり、毎年のように各地には洪水や地震などの天災が起り、食べ物がなかったり、流行病にかかったりして、多くの人が命を落としていた。

もう明日の生活もどうなるかわからない、生きる望みもない。そんな人々が当時の日本にはたくさんいた。そのような時、各地を旅して人々に教えを説いて回った一遍上人の周りは、平和を願う人々でいつもにぎわっていた。

宝厳寺には、国の重要文化財に指定されている「木造一遍上人立像」がある。この木造は寄木造りで、像の高さが114 cm、一遍上人自作ともいわれているが、はっきりしたことはわからない。

一遍上人の横顔は、太く秀でた眉や意志の強さを示す唇に、その特徴が見られる。合掌の姿に慎ましやか、謙虚さがにじんでいる。立像の法衣から出た、素足の姿に「捨て聖^{すてひじり}」の気持ちが刻まれている。

仏の道へ

一遍上人は、1239（延応元）年、伊予の豪族、河野通広の二男として宝厳寺の奥谷で生まれた。幼名を松寿丸と言い、いつも笑みをたたえた母は情け深く、とても優しい人で「松寿丸や、あなたは弱い人の味方になりなさい。強い人は人に優しくなければいけません。」と、まだ小さな松寿丸の手を取りながら教えていた。松寿丸が10歳のとき、大好きだった母は亡くなった。

1248（宝治2）年、松寿丸は出家する。こんな苦しく乱れた時代に、国内を旅して回り、「仏の『なむあみだぶつ』で救われなさい。」と説いて回ったのが一遍上人である。

当時、位の高い人やお金持ちの人しか、近づけなかった仏の教（旧仏教）を、だれにで

も平等で、だれもが仏に救われることを、広く伝えて歩き続けた。

「みなさん、心配しなくてもよろしいのです。安心なさい。『なむあみだぶつ』と口で唱えてごらんなさい。これで救われるのです。さあみなさん一緒に唱えましょう。」一遍上人はみんなと『なむあみだぶつ』を唱える。いえ、唱えるというより歌う。みんなで合唱する。みんなの『なむあみだぶつ』の大合唱は、一遍上人の歩いたあとからあとからわきあがった。平和を願うみんなの祈りであった。この大行列は、のちに「おどり念仏」と呼ばれるようになる。

なむあみだぶつ

大宰府での修行を経て、松寿丸は名を智真^{ちしん}と改めた。智真は信州の善光寺にお参りした。ここでは、生きているものすべてに、平和への静かな願いが感じられた。当時の人々は、ここへお参りするものは、必ず極楽浄土へ行けるものと信じていた。

なぜならこの善光寺には、仏教の国インドから中国を経て日本に渡ったとされる、日本最初に伝来の阿弥陀様が祭られていたからである。

智真は、そこで大勢の人々が「なむあみだぶつ」を唱えてお参りする姿を見て、これこそ本当の念仏の姿であると思った。

修 行

ふるさとに帰った智真は、その年の秋から、世間をさけて静かな修行に入る。智真は松山市窪野町の、窪寺の小さなお堂で念仏し、久万高原町の岩屋寺のほら穴では座禅を組んだ。それから、幼い従兄弟の通定を伴って、山中深く分け入り苦行を続ける。通定は、一遍上人の一生をえがいた、国宝「一遍^{ひじりえ}聖^{しょうかい}絵」の絵巻物を制作した、聖戒上人となる人物である。

松山市窪野町に、歴史学者、研究家、地元郷土史家の長年の調査研究により、この地が『窪寺閑室跡』と指定されている。700年の昔、一遍上人がこの閑室跡で3か年修行した。石碑の横を音を立てて、清らかな水が流れている。

一遍上人の「なむあみだぶつ」という、永遠の声が静かに流れているように思える。確かに、ここは一遍上人修行の聖域である。

窪野の里の中間あたりに中組がある。道端に祈りの石があった。梵^{ぼんじ}字の下に「南無遍照金剛」と丁寧^{ていねい}に書かれていた。1784（天明4）年という文字が見える。

ここで暮らすのですか

従兄弟の通定は驚いた。智真はうなずきただけで、黙って座禅を組む。通定もただ黙々と山に登り、枯れ枝を拾い、谷の岩清水をくみ、智真の行を助けた。

「さあ決心したぞ。いっさいを捨てる、何もかもだ。」「えっ、いっさいを捨てるって。」「私がお慕いもうしておる空也上人というお方が『捨ててこそ』と言った。いい言葉ではないか。この言葉を私は実行する。私は今日このときから一切を捨てよう、身も心も。死にながら生きるのだ。」「えっ、死にながら生きるって。」「いっさいのものを捨てて『なむあみだぶつ』の中に溶けこむのだ。無一文になるのだ。そして外に出よう。争いの絶えない、武士や貴族の世の中は、本当ではない。民衆の中に飛びこんでいこう。旅から旅へ、体の続く限り、この念仏を国中にすすめるのだ。」「

35歳の智真は、黒衣を風になびかせ、はるかな道へ力をこめて歩き出し、生涯にわたる旅に踏み出したのであった。

おふだ配り

智真は伊予を出て、天王寺、高野山、さらに熊野へと向かった。行く先々で、智真は、にこにこ顔で声をはりあげる。『なむあみだぶつ』と唱えて、このおふだを受けてください。門の前は人でいっぱいになった。

おふだを受けた人たちの念仏の声が、どんどん大きくなっていく「これだ。このおふだを配ること、人たちに『なむあみだぶつ』に出会ってもらうこと。これが私の修行なのだ。」「

しかし、全てがうまくいったわけではない。あるとき、智真は一人のお坊様に出会う。智真はさっそく張り切って、おふだをお坊様の前に差し出す。

『なむあみだぶつ』と唱えて、このおふだをお受けください。」「いえ、私は今『なむあみだぶつ』を信じてはいませんから、おふだを受けるわけにはいきません。」お坊様はおふだを手にしようとしない。「信ずる心が起こらなくても、お受けなさい。」語気を強めて言うなり、そのお坊様に無理におふだをおしつけ、渡してしまった。

「本当にあれで良かったのか『なむあみだぶつ』を信じない人にも、おふだを配っているものだろうか。」この出来事を機に、智真は再び修行に入った。

悩み続け、考えぬいた。そんなある日のこと一筋の光が智真を照らし、白髪の老人が山ぶしの姿で現れ語り始めた。「人間はだれでも、仏になれると決まっている。あなたがすすめるから、その人が仏になれるのではない。人はみな平等である。信じる人も信じない

人にも『なむあみだぶつ』は大切であるから、安心してだれにでも、おふだを配りなさい。」この声が、智真の体の中にしみとおった瞬間、目の前がぱっと明るくなり、智真は思わず大地に、すくっと立ち上がった。智真はこの日を境に一遍上人を名乗ることになる。

旅から旅へ

一遍上人は、身も心も軽々と捨て身の一人旅をした。食べるものもあつたりなかったり、衣もすり切れ、山道で日が暮れると野宿し、川の音に目を覚まし、起きて歩き出すという旅であった。

そんな旅の途中、ある武士の奥さんが、一遍上人のお話に感銘し出家したいと、尼さんになってしまった。怒った武士は、今まさに、一遍上人に切りかかろうとする。「なんの用じゃ」と右手の人差し指で武士を指し、するどい威厳のある声を投げつけた。その声とすさまじい気迫に、武士は手が震えてどうすることもできず、しかも、武士は一遍上人に従って、出家してしまったという。

おどり念仏

一遍上人の仲間はどうどん膨らんでいく。念仏を繰り返して唱えているうち、胸から何かがわき上がり、自然に手が動きだし、体全体が跳ね上がった。我を忘れておどりだす。これが一遍上人のおどり念仏の、始まりであった。

おどり念仏を始めた一行は、それからも旅を続け、幕府のある鎌倉へ入ろうとした。「今日は北条時宗様が、この道を通られますから、この道を通ってはいけない。」と、忠告してくれる人がいたが、一遍上人はおかまいなしに、道の真ん中を歩いて行った。しばらく行くと案の定、北条時宗の行列と出会ってしまった。

馬上の時宗と一遍上人のにらみあいが始まる。棒を持った武士が一遍上人を2回たたいたが、一遍上人は岩のようにびくともしない。一遍上人の姿に恐れをなしたのか、時宗の一行は、そっと行ってしまった。

「私は権力を振り回す者の味方ではない。今はっきりと私は民衆の一人として、民衆の側に立ったのだ。民衆の念仏よ、全国にわきおこれ。」

その夜、一遍上人の一行が、鎌倉近くの道ばたで念仏を唱えていると、昼の出来事を伝え聞いたたくさんの人たちが、続々と集まってきて、一緒に念仏を唱えた。この素晴らしい大きな念仏は、風に乗って鎌倉の町に一晩中聞こえたと言われている。

このころから、一遍上人の人気は爆発的なものになった。一遍上人は讃岐に入り、弘法大師誕生の地の善通寺、また大師ゆかりの曼荼羅寺などを巡礼し阿波へ移る。

しかし、一遍上人はここで大きな病気にかかってしまった。「私の命はあといくらもないであろう。別れるときが近づいてきたようだ。」と死に近いことを悟るけれど、病気など気にかけず、やはり前と同じように、みんなに話をして、おふだを配る。

「おふだを渡した、たくさんの人たちの顔、顔。歩いてきた果てしない白い道。一生かかって私の説いてきた、お釈迦様の教えは『なむあみだぶつ』の中に、すっぽりとおさまってしまった。」8月23日、大勢の人たちと一緒に、朝のお経を読み終わった一遍上人は、もうすでに安らかに息を引きとっていた。

富もない、権力もない最下層の人たちから敬われ、とりわけ社会外の人たちとして、蔑まれてきた賤民をこそ、救済してきた宗教者としての一遍。こんな素晴らしい人が、松山に誕生していることを、私たちはもっともっと、顕彰しなければならないと思う。



一遍上人歌碑
(道後湯月町・宝厳寺内)

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会 (2011 年)

「人権問題への取組と平和主義の実践」

か　とう　つね　ただ　　たく　せん
加藤恒忠（拓川）（1859～1923）



加藤恒忠（たくせん拓川）は、衆議院議員や貴族院議員になって、政治の舞台で活躍した人物である。16歳のとき父親である大原観山が死去すると、遺言どおり東京に向かった。

当時の東京で、もっとも大きな塾の一つに入学する。しかし、ここの学問に物足りなさを感じた恒忠は、退学して法律学校に進み、はらたかし　くがかつなん原敬、陸羯南らと学ぶ。ここでも理由があつて、退学せざるを得なくなってしまう。

苦しい時代を過ごした恒忠だが、親友である原敬の勧めで外交官となりヨーロッパを中心に活躍した。彼は、日本がもっと世界に目を開き、諸外国の文化を知るべきであると説いている。後に外交官としては、身を引くことになるが、それでもこの経験が政治家となって外交面でいかされることになった。

加藤恒忠（拓川）は、正岡子規の8歳上の叔父（母親八重の弟）で、松山では竹馬の友であった秋山好古と並んで秀才の誉れが高く、幼少の子規にとって、畏敬の対象となる存在であった。外交官として渡欧する恒忠に、子規は　“春惜しむ　宿や日本の　豆腐汁”の句を贈っている。

恒忠は、自由民権運動で有名な中江兆民の弟子で、外交官としてベルギー特命全権大使や、シベリア特命全権大使などで活躍した。また衆議院議員や貴族院議員としても活躍した。そして食道がんに苦しみながらも、第五代松山市長に就任し、松山商業高等学校（現松山大学）や、国際連盟協会愛媛支部の設立に奔走した。また、松山城の払い下げ問題や、部落改善事業などにも尽力した。

息を引き取る3か月前、市議会で市長恒忠（拓川）は、絶対安静の衰弱しきった体で答弁に立ち「財産のない者に便利を与えるのが、社会政策の大本だから、恵まれない労働者向けの住宅を建てたいと言うのは、市長就任当時からの願いであつた。ひと月でも早く実現したいと思う…」と語ったが、採択の結果、この計画は否決された。

その後、1923（大正12）年3月26日午後10時50分、拓川は65歳の生涯を閉じた。「水平社運動のため、自分は多少力を尽くしたいと思っていたが、それができずして、死ぬのは残念である。せめて水平社ゆかりの寺に行きたい。」と遺書を残し、その希望どおり墓がつくられ、今も大切にされている。この経緯は1923(大正12年)3月29日付「愛

媛新報」でも報道されている。

全国水平社が結成されたのが一年前の3月、愛媛県から大阪の全国大会にはじめて委員を派遣したのが3月2日だった。

日銀副総裁・深井英五が、墓前で『エガリテー、ブラッテルニテー　心意気　気骨に留めて　世に伝えなん』と詠んでいる。「エガリテー、ブラッテルニテー」は「平等・同胞」の意味であるという。

また『墓前には中央の名士から贈られた活花に、春の草花が咲いていた。殊に面白いのは加藤氏が、生前酒が好きであつたというので、小さなカップに酒が盛られてあつたが、部落の人たちは、加藤氏がこの寺に遺骨を埋めることにしたことを非常に喜び、墓前で毎日小さな酒宴が開かれているということである。位牌の前のカップには、何時も酒が絶えないそうである』と1923（大正12）年4月2日付の「海南新聞」は報じている。

四国水平社大会の参加者は、この拓川の墓の前に集合して、ここから会場の松山市三番町の寿座に向かつて、差別撤廃を訴えながら行進した。

拓川の人柄を知ることのできる逸話が多数残されている。

衆議院議員に当選し東京へ出発する日、高浜港で見送りの人々に「代議士は全国の代表者として、一県一市の代表にあらざるゆえ、今後の自分はどこにおいて、何人に選ばれたかを忘れるつもりであるから、自分の言動が選挙民諸君の意志や利益と、全く相反するかも知れない。」と語った。

また、1923（大正12）年、加藤市長が亡くなる年、松山市議会の議場は静まり返り、はりつめた空気に包まれていた。市長は病気のために食道がふさがり、食事がのどを通らない。やっとの思いで市議会に臨み、残されたわずかな時間を無駄にすまいと自分の命をふるい立たせ、どうしても訴えたいことがあつた。その提案は、通らないであろうことを知っていながら、自らの考えを述べずには、いられなかった。

市長はゆっくりと椅子に腰を下ろした。その後、立ち上がって話し始めると、病気であることを忘れたように、堂々と議場内にひびきわたる声で、意見を述べた。その姿を見て、会場は水を打ったように静まり返った。

「在郷軍人会への補助金に反対する。在郷軍人会が入・退営の時などは、旗などを立てて送迎する。これも仲間の仕事としては至極よろしいことであろうが、市としては必要ないことである。その組織を見ると、はなはだ官僚的である。会長は陸軍大臣とか、地方で顧問とかいうのが知事、内務部長とかで、かかる事業に対し市民が租税を出して補助するということは、どうしても私にはわからないのである。」と、市長としての意見を述べている。

また日本の歩む道を予感するかのように「帝国主義、軍国主義はことごとく、打破されているのが、今日の世界の大勢である。軍人の精神教育が、青年に感染するのは、はなはだ危険千万といわねばならぬ。」と述べている。

前々から、加藤恒忠は、ふるさとの青少年のために、役立ちたいと思っていた。何よりも若い人々の教育が大切だと考えて、学校を創ることに力を入れた。世界を渡り歩いた恒忠だからこそ、日本の国の将来に向けて、教育こそ大切だと信じていた。

恒忠が設立に関わった学校が、松山高等商業学校（現松山大学）である。松山で高等商業学校を創りたいという話は前々から出ていたが、多額の資金が必要なので、話は前に進まなかった。「この話をぜひ実現したいものだ。」と強く願うようになった。

恒忠は、北予中学の加藤彰廉^{あきかど}校長に、学校を創る計画を頼んだ。その計画をもって大阪の皮革王と呼ばれた新田長次郎を訪ねた。「松山市を、四国の中でも教育の盛んな所にしたい。学校を創って多くの人々に勉強してほしいのです。そのために、資金をお願いしたい。残りは県や市で協力してもらいますから。」と言うと、「わたしは今、大阪で職人になる学校を持っていますが、それを大阪市が引き受けてくれることになったので、ゆずる予定です。そのお金を役立てよう。」と、長次郎は言ってくれた。

ところが、県も市もその当時、金の余裕がほとんどなかった。市長になっていた恒忠も、結局、長次郎の所へ行って依頼するしかなかった。「わかりました。不足分も出しましょう。」長次郎は、またも市長に協力してくれた。長次郎の広い心がなかったら、松山高等商業学校はできなかった。

3月3日、松山高等商業学校の開校のための会議で、5人の代表が選ばれた。その代表の一人である恒忠は、加藤彰廉を校長に決める提案をした。その後3月26日、恒忠は病との闘いを終えた。

恒忠の死後一か月ほど後、松山高等商業学校は開校し、新入生が入学してきた。第一回入学式の校長のあいさつで、恒忠の功績をたたえる言葉が述べられた。学校設立に尽力した、加藤恒忠という人物に思いをはせ、みな涙したといわれている。

1974(昭和49)年、松山商科大学は50周年をむかえ『松山商科大学50年史』を発行し、その中に学校を創った3人の名が載っている。新田長次郎・加藤恒忠・加藤彰廉である。この3人の銅像が校庭に今も建っている。

私立松山大学は、松山・愛媛の教育に大きな影響を与えてきた。何千、何万の卒業生たちが、全国各地、世界の各地で活躍している。

恒忠が松山市長になった期間は、一年足らずの大変短いものであった。しかも病气と闘いながら、市長の仕事を務めることは、大変苦しいことだったと思う。職業紹介所の開設、

市設無料診療所の設置など、市民救済の社会事業に力を入れたこと、松山高等商業学校を創設して、教育が盛んになるように努力したことは、松山を愛し市民のために尽くしたい心の恒忠にとって、今でも誇りに思えることであろう。

『坂の上の雲』の著者でもある司馬^{しば}遼^{りょう}太郎は「加藤拓川という人は、もう少し欲があったら、総理大臣になっていたかもしれませんね、少なくともそのまま官界にいたら、外務大臣にはなっていたでしょう。次は拓川について書きたいと思っています。」と語っている。

親しかった人々として 山県有朋 西園寺公望 近衛文麿 渋沢栄一 中江兆民 徳富蘇峰 陸羯南 原敬 犬養毅 高橋是清 ……など多数の有名人がいる。

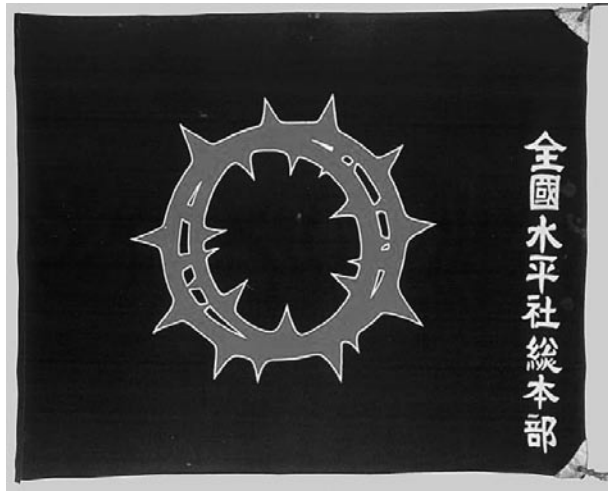


加藤拓川胸像
(文京町・松山大学内)

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会 (2011年)

「部落解放・労働運動の指導者」

こ ばやし みのる
小林 実 (1904～1992)



荊冠旗

1904（明治 37）年 5 月 7 日、松山市道後に生まれる。14 歳の時、勉学を志して上京し、鉄工所の見習い工となり、そこで労働運動の影響を受ける。日本最初のメーデー（1920 年）に参加し、拘束されて鉄工所を解雇される。また 1922（大正 11）年の京都岡崎公会堂で開催された全国水平社創立大会に参加する。

その後、1928（昭和 3）年松山に帰り、労働運動、農民組合、全国水平社の活動に

寝食を忘れて没頭する。この頃の政府は大衆運動を規制、弾圧するための法律（治安維持法）を制定。運動の指導者や活動家を逮捕し拘束した。そんな中にあって、1932（昭和 7）年におきた伊予郡中村（伊予市）村長の差別事件や翌年の高松差別裁判では、指導的役割を果たし、大きな成果を上げる。

特に、高松差別裁判では、当時運動の指導者・活動家が拘束され、大衆団体は解散させられている中にあって、地域における地道な働きかけを行い、事件の真相を知らせる。しかし、警察の知るところとなり、小林は逮捕されるが、それを知った農民が警察に押しかけ、厳重に抗議し釈放される。1933（昭和 8）年 11 月、北吉井村西の岡（東温市）松本説教所で周辺の村々から、千余名の農民が集まり、抗議の集会が開かれた。小林の座右の銘である「大衆に信頼され大衆とともに大衆の中にいる」はこの中で生まれた。

また、1945（昭和 20）年 7 月、松山市は戦争でアメリカの空襲を受け、壊滅的な被害を受けたが、戦争終結の翌年、小林は松山戦災者同盟を組織。当時の占領軍と話して配給物資の分配の公平と市の所有地への仮設住宅の建設を実現させる。

戦後も、第 1 回のメーデーを組織するなど、一貫して部落解放運動をはじめとする労働運動、住民運動に生涯を捧げた。1992 年 8 月（88 歳）死去。

著書に「えひめ解放戦士の面影を追って」他

参考文献 「夜明けの証言・小林実回顧録」 小林実（著） 小林実回顧録刊行委員会編 （1985 年）

「ろうけんまんとう 労研饅頭と夜学校奨学会」

たけうち せい いち
竹内成一 (1892～1954)



竹内成一は 1923（大正 12）年に数学の教師になった。陸軍砲兵大尉でもあったので、体格も立派であった。厳しさの中にもやさしさがあり、どんなことにも集中し、精魂こめてするので信頼されていた。

昼間は松山女学校でも教えていたが、1931（昭和 6）年 7 月に退職し、その 8 月 11 日から、ろうけんまんとう 研饅頭製造視察のため岡山へ出かけた。その当時倉敷労働科学研究所長のてるおか ぎ とう 暉峻義等博士は、満州の人たちが主食としていたものを取り入れ、日本人の食べ物になるように研究をしていた。

竹内は暉峻博士に会い、新しい食べ物である饅頭についての話を聞き、製造の方法を見学した。帰松するとすぐ竹内はみんなに、夜学校奨学会を組織することを呼びかけ、松山夜学校奨学会を結成して、その組織を「まんとうだん 満樺団」と名付けた。

そして、その一事業として、労研饅頭を製造販売してはどうかと提案した。これは一人でも多くの青年に、教育を受ける機会を与えることになるので、反対する者はいなかったが、誰がその製造主任になるかが問題であった。松山教会青年会に属していた村瀬宝一に、奨学金の事業のために、岡山へ行って饅頭製造の技術を、習得してきてもらうことになった。彼はもともと菓子製造をしていたことがあったので、趣旨に共鳴二つ返事で承諾した。

1931（昭和 6）年 10 月初旬に製造は開始された。珍しいのとおいしいのとで評判はよかった。市内の各中等学校でも、奨学事業への協力として、昼食用に販売することができるようになっていった。4 個が一包みになっていて 5 銭であったから一般市民の人気も増していった。

1971（昭和 46）年 10 月 18 日の創立 40 周年記念式典のとき、来賓一同にこの労研饅頭を披露したことは今も語り草となっている。

1932（昭和 7）年には、この満樺団の菓子部が「夜学校カステーラ」を製造し始めた。その宣伝がとてもおもしろいのでそのまま引用してみよう。

『夜学校のカステーラ労研饅頭がカステーラに化けるのではありません。

満禱団の菓子部で新に作り始めたものであります。材料の精選は勿論腕に覚えのある技師が脾肉の嘆の思ひつき、云はゞ一種の芸術品として生れたものであります。

松山人評　なるほどこれなら安い　　長崎人評　本場はだした

京都人評　東京中村家のよりも旨かった

御召上り用は箱なしで如か様にも御届け、御託送用は荷造りもいたします』

労研饅頭研究部では、林源十郎のもとで研究した。村瀬は実に熱心に努力したので、技術習得に長い期間を必要とはしなかった。彼は饅頭製造に慣れた中国人の林樹宝を伴って帰松した。

竹内が総責任者、村瀬が製造主任、石垣五十子が、事務担当、従業員として生徒9名で松山夜学校奨学会が組織された。

満禱団は、籐細工工場を設け、籐椅子や衝立なども製造販売した。また校舎近くの畑を借りて、農園で野菜も栽培した。寄宿舍があつたので自給自足の感もあつたが、余分の野菜は販売した。豚舎をつくり養豚業もした。

このように事業を拡大したので収益も上がった。学資が乏しい生徒が、可能な限り集められ、文字通り「働きながら学ぶ」ことができた。そして、それは1937（昭和12）年まで続いた。その後、社会情勢と経済的行き詰りのため、夜学校奨学会は解散することになった。

しかし、この事業は竹内が個人的に引き継ぎ、労研饅頭は(株)たけうちで今日も製造されている。日本において労研饅頭という名前と、昔ながらの酵母菌を使った味が残されているのは、竹内成一の労研饅頭をおいて他にないと言われている。

労研饅頭創業　三周年記念　感謝割引

神様の御守りのうちに、わが事業部も満2か年を経過いたしました。その感謝のしるしに10月中の労賃を神に捧げ大包の6銭売りの分を5銭に割引して、市民の方々に提供いたします

籐工部新設案内

マントウ製造の傍ら籐工作業に従事することになりました。東京より聘した指導者を中心に籐椅子類を造っています、御入用の節は御興勘の意味で数多く御注文下さいませ、製品は何時でも御覧に入れます

聖書讃美歌の写真アルバム販売

松山市夜学校内

奨学会事業

満禱團生活要領

一、一切を神に捧げて奉仕す

二、黙して働き、身を以て祈る

三、必要なるだけは必ず興へらる

右生活要領に共鳴され、この生活を共にされたき方は、一鷹御相談下さいませ

松山夜學校内　　**満禱團**

労研饅頭は、小麦粉と酵母、少量の砂糖からつくられる、蒸しパンのような饅頭。パンより安価で、ほっこりとした食感と、素朴な味に特徴がある。当時の値段は一食分、4個5銭。安くて腹持ちがよいと、市内の中等学校や歩兵第22連隊の売店などで人気を呼んだ。

1935（昭和10）年、事業は竹内氏の個人経営に移るが、戦争のため小麦粉は統制品となり、1943（昭和18）年、ついに製造を休止。

1945（昭和20）年7月26日、米軍による深夜の松山大空襲で、死者・行方不明259人、2万4千戸が焼失し、全人口の53%が被害にあった。

竹内成一は、戦時中も労研饅頭の酵母菌を保存していたことから、1945（昭和20）年戦後の復興まもなく、松山空襲にもかかわらず焼け残った勝山町の店で、労研饅頭づくりを再開した。1952（昭和27）年には大街道に支店を出し、岡山で誕生した労研饅頭は、松山の地で発展していった。

黒大豆、うずら豆、よもぎ、つぶ、かぼちゃ、さつまいもあんなど14種類。無添加で自然の甘さをいかした労研饅頭は脚光を浴び、全国各地から注文が相ついだ。永六輔や早坂暁もこの店のファンといわれている。

はじめて食べる人も、懐かしさを感じる手作りの素朴な味わい。地元にも全国にもファ

ンが多いのは、このあたりに秘密がありそうである。

研究所指定の製法により、その酵母を使用・監督を受けて製造している店は、一地方 1 軒とし、1936 年当時では、北は札幌から南は福岡まで、また植民地だった朝鮮半島にも 3 軒あり、合わせて 37 軒が記録されている。

愛媛県では新居浜の別子堂（責任者・一色幸）と松山の竹内商店（責任者・竹内成一）である。朝鮮半島を除いて、現在も存続しているか調べたが全て閉店していた。

労研饅頭（酵母菌の保存）はなぜ松山だけに残ったのか

（1）竹内成一の奮闘

戦時中、原料と成る小麦粉はなかなか手に入らなかったので、大変苦労したと思う。いつか平和な時代がきて、製造・販売できることを、クリスチャンとして願っていたのではないだろうか。

（2）夜学生への学資援助

利潤追求でなく、向学心のある青年の学習権の確保という清冽な動機が、取り巻く人たちの共感を呼んだ。

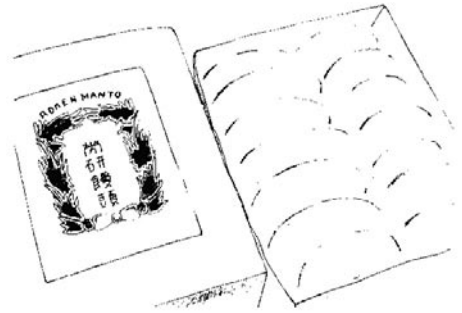
（3）松山の文化力

正岡子規等を生んだ、松山の高水準の文化力があったから、労研饅頭は現在も受け継がれている。

おわりに

室町時代の 1349 年に、中国人の林浮因が初めて饅頭を日本に伝えた。奈良市にその林浮因を祀る林神社があり、その例大祭が盛大に 2009（平成 21）年 4 月にあった。室町時代より現在も製造・販売している、老舗の塩瀬総本家会長の川島英子氏は、この日に献供した、松山から取り寄せた労研饅頭について、興味を持たれていた。

林浮因氏と林樹宝氏、時代が違っていても同じ中国人の二人が、それぞれ饅頭を日本に伝えた。戦前の一時期日本と中国は、不幸な時代があった。二度と再び悲惨な歴史を繰り返してはならない。労研饅頭から見てくるもの、それは日中の絆といえる。



参考文献 「労研饅頭と共に 60 年」 株式会社たけうち （1991 年）

「労働科学研究 第 7 巻 1 号」 暉峻義等（著） 労働科学研究所 （1930 年）

「塀のない刑務所」

つばうちひさお
坪内寿夫（1914～1999）

「塀のない刑務所」は受刑者の心にできた塀を取り除き、その心を社会に解き放った



坪内寿夫による造船所経営は勿論、奥道後温泉の掘削・ホテル経営のために道路用地を確保し、元松山刑務所に奥道後温泉の引湯をし、この道路を合わせて寄付したことなど、地域に大きな貢献をした。

しかし、どうしても外せないのが「松山刑務所大井造船作業所」いわゆる「塀のない刑務所」である。坪内は公益のために、多額の私財を投じた人を称える紺綬褒章を31回も受章した。

その功績を象徴するのが「塀のない刑務所」であり、誕生の経緯については、私も坪内から何度か聞かされた。

「塀のない刑務所」が産声^{うぶこえ}を上げた1964（昭和39）年当時、坪内は松山更生保護会副会長として、罪を犯した受刑者の更生事業にも携わっていた。

当然、松山刑務所の後藤信雄所長とも面識があった。単なる知り合いというだけではない。立場は異なったが、受刑者の更生に心を砕くという点で、二人は相通ずるものがあった。

坪内は極寒のシベリア、後藤所長は熱帯の南方と、共に収容所での苛酷な生活を体験している。捕虜の辛さが身にしみているだけに、受刑者への思い入れも、人一倍だったことは想像に難くない。

そんな二人だったが故に「受刑者を造船所で働かせてほしい。」という後藤所長の要請を坪内は快諾した。

松山刑務所は早速、800名余りの受刑者の中から、刑期の三分の一以上を終え、仮釈放の資格を持った真面目な者、22名を第一期生として選抜した。1964（昭和39）年9月、工場建設の槌音が響く来島船渠(株)大西工場に更生施設を作り、彼らを受け入れた。翌年以降、第2陣、第3陣と受刑者が送り込まれ、1968（昭和43）年10月には、総事業費1億3千万円、鉄筋コンクリート3階建ての立派な宿舍「友愛寮」が完成した。

この当時、大井造船作業所のような更生施設は、全国でも千葉県と山形県にしかなく、いずれも人里離れた山間僻地だった。

こちらは人の往来が絶えない、町中の造船工場への設置である。しかも、受刑者は一般

の工員に交じって、区別なく一緒に働き、夜は塀のない宿舍に寝泊まりする。

これには地元住民も当初、反対の声が強かったが、坪内は「受刑者があなたの家族だったらどうしますか。」と住民を口説いて回った。そして、額に汗して一生懸命に働き、手に職をつけて社会復帰しようとする受刑者の真剣な姿は、住民の心を打ち「塀のない刑務所」は次第に地域に溶け込んでいった。

その様子については、愛媛新聞2000（平成12）年2月13日付でも、次のように紹介されている。「本当に塀はなく、孤独な独房もない。4人部屋ではおしゃべりが楽しめ、食事に使う米はササニシキ。風呂は大理石。寮は自治で運営された。」

「刑務所らしからぬ刑務所。なおかつ、人間が人間として扱われる場所。この施設には、坪内のシベリアでの捕虜経験が反映されていた。悲惨な収容所生活は刑務所暮らしのつらさにも通じる。受刑者の気持ちが痛いほどわかっていたに違いない。」

坪内は常々「罪を犯した人を罰するのは更生事業ではない。働く喜びを教えて真人間になってもらうのが、刑務所の仕事。」と話していた。

実際、受刑者らは、積極的に清掃奉仕等のボランティア活動に参加し、地元住民と交流を深める一方、夜は国家資格の取得を目指して猛勉強した。

その結果、受刑者の更生率は90%以上という驚異的な数字に上り、その大半が電気溶接士やクレーン運転士、危険物取扱主任者、二級ボイラー技士、高圧ガス販売主任者などの国家試験に合格した。

こうなると世間は放っておかない。高松高検検事長ら司法関係者はもちろんのこと、1969（昭和44）年9月25日には、高松宮殿下御一行をお迎えするという栄誉にも浴した。

そして「塀のない刑務所」は国際的にも注目されるようになり、国連や諸外国の犯罪抑止、矯正担当の幹部らが次々と視察に訪れ、画期的な更生システムと、群を抜く更生実績に驚嘆の声を上げた。

1970（昭和45）年に、京都で開かれた「犯罪の防止及び犯罪者の処遇に関する第4回国際会議」（70か国参加）でも紹介され、会議参加者らが実際に、大井造船作業所を見学した。この視察団の反応について、読売新聞（1970年8月31日付）では『非常に感銘した。世界のあちこちに開放処遇をしている刑務所があるが、町の中で、しかも一般の人といっしょに作業している点がすばらしいと語っていた。』と報じている。

このように「塀のない刑務所」は、世界的にも類を見ないような試みであり、受刑者の更生という点でも大変な成果を残した。それ故に、視察で訪れた国連幹部のヒュー・ケニオン氏も「世界のモデルケースになる。」と称賛したわけだ。

しかしながら、私は施設そのものの素晴らしさもさることながら、そうした施設を考え

出した坪内の精神性、換言するならば、人間に向けられた眼差しの優しさを強調しておきたい。坪内は生前、私によくこう語っていた。

「罪は憎んでも人は憎まずじゃ。根っからの悪人など、ほんのひと握りじゃ。ほとんどの受刑者は犯した罪を悔い、心の底ではやり直したいと願うとる。それを懲らしめるだけでは、更生の芽を摘むだけじゃ。人間らしゅう扱い、働く喜びを教えれば、きっと真人間になる。それを刑務所はもちろん、社会全体でやるのが本当の更生事業じゃ。」坪内は、単にコンクリートの塀のない刑務所を作ったのではない。受刑者の心にできた塀を取り除き、その心を社会に解き放とうとしたのである。

坪内はその後、愛媛県更生保護会の理事長となり、親交のあった作詞家の星野哲郎に「更生保護会の歌」を作ってほしいと要請した。星野が快諾して完成した歌「愛をみんなで」は、坪内の生き様を歌にしたクラウンレコードの「来島海峡」と一緒に吹き込まれた。この歌には坪内の思いが凝縮されており、私も聴く度に熱いものが胸にこみ上げるのを禁じ得ない。一番の歌詞だけ紹介させていただく。

ひとは誰でも　しあわせを　求め探して　旅をする
だけどどこかで　道にはぐれて　奈落におちる　人がいる
愛は余って　いませんか　情は余って　いませんか
分け合いましょう　足りない人と　この世は一つ　世界は一つ

不肖、私が愛媛県更生保護会副理事長の大役を引き受けたのも、更生事業に労を惜しまぬ坪内の思いが、痛いほどわかっていたからである。

「更生事業は派手さのない地道な仕事じゃ。金があっても、やりたがる政財界人が少ない。じゃが、誰かがそれをやらんと、世の中は良くならん。」が口癖だった。その思いを託すかのように「世のため、人のためになる大切な仕事じゃ。佐伯君も取り組みなさい。」とそう背中を押されて20年余り。とても坪内には及びもつかないが、今もその遺志を継ぐ気持ちで、更生事業に携わらせていただいている。

そして、坪内が「塀のない刑務所」による更生事業に尽力していた時期、もう一つの巨大プロジェクトが進みつつあった。それは今も坪内の“遺産”として守り抜かれている奥道後の開発である。(ここまで佐伯正夫氏資料引用)

利益を生まない“火中の栗”をなぜ拾うのか

坪内は、人のやりたがらないことをやりたがる男である。第三者はもとより身内から見てさえも、火中の栗を拾うとしか思えない拳に出ることがよくある。考えてみれば、ボロ会社の再建引き受けという、彼の事業家人生そのものが火中の栗を拾うことの連続だったといえるかもしれない。それは成功すれば利を生むという正の行為である。困難であればあるほど、ファイトを燃やすのが事業家魂というものであろう。

しかし、成功しても利は皆無、失敗すれば大変な社会的責任が生じるという、負の行為をも坪内はやりたがり、現にもう24年間も続けている。受刑者の開放処遇がそれである。大ざっぱに言えば、本来刑務所に収容されているはずの受刑者に「塀のない宿舎」と「一般工員と同等の仕事」を与え、さらに食・勉強・娯楽面の援助をするというもの。

その宿舎を友愛寮という。来島ドック大西工場大井造船作業所内にある鉄筋3階建ての同寮を私が訪ねたとき、中庭で新入寮者の訓練が行われていた。白い帽子に白い作業衣姿の若者が10人。リーダーの号令に従ってキビキビと駆け足、急停止、整列などの動作をくり返していた。動作の区切りごとに「ハイ」という鋭い気合が発せられる。表情といい体格といい高校の運動部員を連想させる。この訓練を20日間やった後、造船作業所の現場に出す。

塀こそないが、ここは松山刑務所の一支所だ。勤務する職員が12名、そして収容者が60名。場長・法務事務官の太田慎介は語る。

「私はここに来て1年ちょっとなんですが、職務はこちらのほうがむずかしいですね。この仕事は受刑者を信頼しないとできないのですが、そうはいっても基本的には疑いを持っています。いってみれば不信感との戦いですよ。幸い事故はほとんどありません。過去24年間に逃亡した例は何件かありますが、逃亡者が新たな罪を犯したという例は一件もありません。今では地域住民の方にもすっきりご理解いただき、受刑者の運動会に参加してくれる人もいっぱいいます。」

同作業所は、来島ドック大西工場を新設した1961（昭和36）年に受刑者の労務提供と開放処遇を目的として設置された。

当時の松山刑務所長・後藤信雄の熱意が坪内の心を動かしたのである。

金銭的なことをいえば、国や県から一銭も出たわけではない。坪内が私費を投じて友愛寮を建て刑務所に提供したのだ。総面積2千520平方 m 、1室面積24平方 m で定員4名。室内には二段ベッド、机、椅子、ロッカーが備え付けられている。

友愛寮は、収容者の「自治」によって運営されている。自治会長、副会長、議長、寮長、

室長、編集、衛生、購買、体育の各委員は収容者の選挙によって決める。

刑務所側の運営方針は次のとおり

- ① 収容者の人格を尊重し、自覚と信頼を処遇の基調に置きその社会化を図っている。
(収容者を「作業員」と呼んでいる)
- ② 逃走防止のための物的・人的措置はとられていない。寮舎を囲む障壁はもちろん、居室には鉄格子も錠もなく、他の居室への訪問は自由である。
- ③ 作業内容は特殊専門部門を除き、造船工程全域にわたっており、しかも一般工員との協同作業である。
- ③ 作業・寮生活の全般にわたって、収容者の自治が大幅に認められ、そのために、自治会組織がある。
- ④ 職員の勤務はガードにとどまることなく収容者の労務管理、職業訓練および安全作業の徹底指導と生活指導に重点が置かれている。見張り、検身、捜検等は実施していない。

上のような処遇をしてくれるのなら、入寮希望者が続出するはずだが、むろん希望すれば入れるというものではない。次の条件を満たす受刑者の中から選ばれる。

- ① 暴力団関係者または麻薬関係犯罪者でない者
- ② 残刑期がおおむね1年4か月以上の者
- ③ 年齢45歳以下で、かつ重労働に耐え得る者
- ④ 知能指数が普通以上の者
- ⑤ 顕著な入れ墨のない者

受刑者の作業時間は朝8時から夕方5時まで。夕食、入浴、クラブ活動を6時半までにすませ、その後9時に就寝するまでは、受験生並みの勉強をする者が多い。

電気溶接技能士、クレーン運転士、危険物取扱主任者、商業簿記、ガス溶接士などの検定試験に挑むためだ。

仕事の喜びを教えたら必ず更生できる

刑務所といえば、われわれは高倉健主演の東映映画「網走番外地」シリーズを思い浮かべる。高倉と坪内は十数年来昵懇の間柄である。映画の撮影が終わると、フラリと奥道後

にやって来て、コーヒーをうまそうに飲むという。両者を結びつけたのが実はこの友愛寮なのだ。

「高倉健さん自身が『ぜひ映画のモデルとして使わせてください。』と松山まで頼みに来たんです。何かで友愛寮のことを知って感激したんでしょうね。『網走番外地』だから当然、最後は罪を犯してまた網走刑務所に帰るという筋書きだ。法務省や刑務所はそんな映画のモデルになるのは望ましくない、と文句をいったけど、私は文句いうのはおかしいんじゃないか。』と言うてやりました。作家がフィクションで書くものにどうのこうのいってもしようがない。

ある役人が、私が友愛寮をモデルに提供して、金でももらったようなことを言うんで、『一銭ももろうとりゃせん、出してもおらんが、もろうてもおらん。』と。向こうが、ドックを撮影の舞台に使いたいというから使わしたまでで、こちらは内容など知りゃせん。企業イメージがダウンするなんて、そんなことまで考えなかった。神経が鈍くできとるけんね。大体、イメージを心配するぐらいなら、最初から受刑者を働かせたりしませんよ。友愛寮をつくるに当たっては、社内はもちろん地元の婦人会からも猛反対されましたよ。

私は、誰もなり手のない、四国の更生保護会の委員をやっていた関係もあって、これを引き受け、何もかもこちらで持って、仕事を教えて社会復帰させたいと思っているのに『坪内は安い労賃で受刑者を使いたいのだろう。』とか、バカなことをいう奴までいた。

私はそれまでに刑務所を回って、受刑者にいろいろ聞いていたから、彼らの気持ちはわかっていた。みんな『仕事がつらい。面白くない。』というんです。刑務所というところは、罪の償いにつらい仕事をさせて、反省させるところなんでしょうが、それより考えなけりゃいかんのは、どうして悪人になったのかということです。それは仕事が嫌いだからです。仕事が面白かったら、もう少し仕事に熱中するんです。だから仕事に興味を持たせるようにすれば更生できる。

造船所は汚い仕事だけれども、物を造るという楽しみがある。進水式という行事がある。これには誰でも感激する。船主も造る人も感激して仕事が面白くなる。一度その味を味わうと忘れられるもんじゃない。受刑者にもそういう魅力のある仕事をさせたらどうか、きっと熱心にやと思うたわけです。だけど、刑務所の中で大きな船を造ることはできない。どうするか、それなら造船所に連れて来てやったらええじゃないか。」「私はシベリアで捕虜になった時、開放処遇がいちばんうれしかった。鉄砲持って（見張り）番をしているソ連兵がいなくなって、自由にジャガイモを掘れとか、自由にどこそこへ行けとか、開放されたら、うれしくて逃げるもんじゃない。信頼を裏切っちゃいかんという気になるもんで

すよ。」

私はその体験から、受刑者を住宅地の中の工場で、一般工員と変わりなく働かせることができると思った。ただ違うのは酒、タバコが駄目なことぐらい。もちろん工場外へ出ることは許されませんが、塀があるわけじゃない、鉄格子があるわけじゃない、逃げようと思えば逃げられるわけだ。刑務所内でオイコラとやらされるのとは全然違う。作業の監督も看守さんがやったのでは反感を買うから、受刑者自身に選挙で自治会長を選ばせ、自治をやらせる。看守は遠くのほうで眺めているだけです。人数も普通の刑務所の三分の一ぐらいです。自衛隊が見学に来て、どうしてこう見事に規律が保てるのか、と感心していた。

連れて来るのは模範囚ですが、中には殺人を犯したのもいるし、強盗もいる、婦女暴行犯もいる。そういうのが塀のないところで、自治を営んでいる。町の婦人会は、うちの娘が……と心配する。『強姦されたらどう弁償してくれるんだ』と言うた人がおった。68歳のお婆さんがそういうんだからね。そうしたら隣にいた男の人が『婆さん、何をいいよらんか、あんたなんかになんぼ飢えてても手を出すもんか、鏡を見てから言え』と助け舟を出してくれた。みんながワーツと笑って一件落着、ということもあった。

また、火事が起きた時、消防車が来ないので、受刑者を全員出して、消火作業をさせたら、家が燃えているのに、何か盗られると怒るんですよ。いろいろあったが、町の人もだんだん理解してくれて、今は慰問に来てくれる人も多くなった。

悪いことをする奴は、頭は悪くないんです。生まれ変わったら、本当はいい人間なんですよ。人間の性は善なりと私は信じる。世の中の人が自分たちの社会復帰を望んでいるとわかると、ヒガミがなくなって朗らかになる。本当に短期間で見違えるようになりますよ。でも、最初の頃は正直いって、事故でも起こされるんじゃないかと、心配しました。だから徹底的に教育しました。

『あなたたちがもし逃げたら、私は大変なことになる。あなたたちを真人間にしよう、仕事の喜びを教えよう、と私は考えている。もう一度刑務所に入って、物笑いになるのか、真人間になって、私が保証する人物になるのか、どちらが幸せかよく考えてごらんなさい。』みんな涙を流して『逃げません。』と約束してくれた。『約束を破ったら生かしておかんぞ。』と笑いながら言えるようになるまでに、そう長い時間はかかりませんでした。」

青い囚人服を白い作業衣に

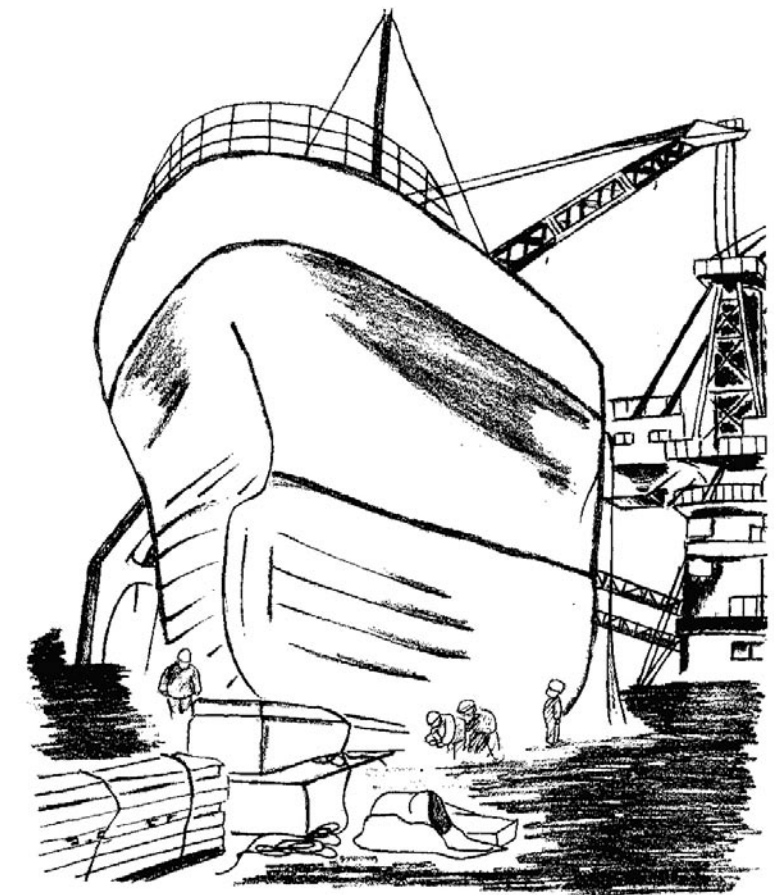
一口に「受刑者の開放処遇」というが、それがいかに大変なことか。世にいわゆる篤志家の慈善事業は珍しくないが、その多くはわが身に危険のない行為である。坪内が友愛寮

を24年間続けてきたということは、24年間危険を抱き続けてきたことを意味する。善意だけでできる行為ではない。

森本辰雄（来島グループ協同技術研究所専務）は、坪内と法務省との駆け引きについてこう言う。「法務省は当初、友愛寮の受刑者に、青い囚人服を着せようとしたんですが、それではせっかく、差別を少なくしようとするねらいが生かせない、と坪内は反対した。次に法務省は、青い囚人服が駄目なら、白い作業衣の背中に大きく、番号を入れるという案を出した。これにも坪内は『野球の選手と間違えられたら困りまんがな』とやんわり拒否。結局、一般工員と違うのは青いヘルメットだけ、ということで法務省を納得させたんです。

受刑者の誕生日祝いをするようになった時、食べたい物の希望を聞くと、卵というのが多かった。しかし、刑務所では卵のような、精のつく食べ物は禁止されている。それでも坪内は何とかして卵を食べさせてやりたいと考えた。そこで一計を案じて、ツルのタマゴという卵型の菓子を職員に見せた。これならいいでしょうというわけです。実際に出したのはツルのタマゴの箱に入れた、本物の卵だったんです。職員も苦笑して黙認せざるを得ない。坪内という人はそんな細かいことにまで、神経を使うんですよ。」

受刑者の生の声を聞くことはできなかったが、それに代わるものとして次のような手紙を見ることができた。



来島ドック

拝啓 この度はひとかたならぬ御高配にあずかり、誠に有り難く、御礼の言葉もございません。本来受刑者である私たちは、罪の償いをするために、より厳しい収容生活を送らなければならない立場であるにもかかわらず、毎年春と秋の2回このような一級集団散歩を催していただき、御厚情のほど大変嬉しく、感謝致しております。

さてかねてより奥道後のお話しは、当場の諸先輩方々より聞き、大変楽しみにしておりましたが、幸い当日は秋晴れの好天に恵まれ、恒例となっている大菊花展の菊もみごとに咲き誇り、又少しずつ変わり行く、山肌の紅葉と相まって、大変美しいコントラストを描いておりました。

行楽日和りということもあり、当日は大変な賑わいでしたが、仲の良い二人連れや楽しそうな親子連れの光景をみると、胸に熱いものがこみ上げてきたりしました。私たちも一日も早く社会復帰し、立派な社会人となって再起するために、この想を忘れることなく、更生への道を着実に歩いて行く所存です。本当に有り難うございました。

敬具

昭和 58 年 11 月 13 日

株式会社来島ドック社長

坪内寿夫様

受刑者と造船作業と奥道後散歩！この三題噺を語れる人間は坪内をおいて他にない。そしてこの三者を繋ぐ靱帯はたぶん「俠気」であろう。

参考文献 「再生への道標」 佐伯正夫（著）（株）愛媛ジャーナル （2010 年）

「愛媛県水平社の創立」

とく ながさん じ

徳永参二（1883～1935）



徳永参二の墓（西法寺）

1923（大正 12）年 4 月 18 日に結成された愛媛県水平社を語る
とき、避けて通ることができないのが、松浪彦四郎と徳永参二の二
人である。

松浪彦四郎は愛媛県水平社立ち上げの中心人物であり、愛媛県水
平社の理論的支柱として重きをなした。徳永参二は、松浪彦四郎と
共に、愛媛県水平社の緒戦で華々しい活躍を繰り広げ、愛媛県水平
社執行委員長・四国水平社執行委員長などを務めた人物である。

徳永参二は、1883（明治 16）年に兵庫県で誕生、地元の中学校を卒業し大阪医専に
進学する。大阪での学生時代は、堺利彦や幸徳秋水らの書物にひかれていたといわれ、こ
の時期に社会運動に対する目が開かれていったものと思われる。

参二は、大阪の女学校で学んでいた松山市出身の女性と知り合い、学生結婚した。参二
の父は、地元屈指の地主であり、中国との貿易にも手を広げるなど、なかなか意欲的な人
物であった。しかし中国地方を襲った大水害のため、所有する田畑は洪水のため一変、ま
た中国との貿易に使っていた船を失うなどの、不運にみまわれて家運は大きく傾いてし
まった。実家の没落が大きな影響を及ぼしたものであろう。

やがて参二は大阪医専を中退し、ラムネの製造販売を手広く商っていた妻の実家を頼り、
松山市に移住した。参二は妻の実家が営む商店に番頭格として勤務し、平穏な生活を送り、
二男一女をもうけたが、その生活は 1920 年代になって激変する。

参二は、平凡なサラリーマン生活と訣別し、いつの間にか「香具師の親分」へと一大変
身をして姿を現すのである。参二は露店商の親分的な立場で、大勢の人々の面倒をみなが
ら、無産階級の解放運動に突き進んでいった。そして、松山地方における無産同盟の中心
的人物へと、変貌を遂げていったのである。

1923 年（大正 12）年、労働者・農民・水平社の提携、いわゆる三角同盟による解放
運動推進の勢いに乗って、参二は、松浪彦四郎らの呼びかけに応じ、愛媛県水平社の創立
に参画することになる。当時参二らは愛媛県初のメーデーを松山市で開催しようと準備中
であり、愛媛新報には『現在の資本家と労働者の懸隔^{かけへだて}の甚だしいのを緩和し、併せて、8
時間労働の徹底的实施を期する。』という彼のことが紹介されている。

このように、参二はもともと労働運動の闘士であったが、同年 4 月 18 日の全国水平社

拝志村支部発足を期に、水平運動に没入していった。

このことは愛媛新報の『徳永参二君は、後、水平運動に没頭するため、これ迄やりきった社会運動とは、一切手を切って』という記事からも明らかである。

この拝志村支部の発会式で、参二は『同情的差別撤廃を廃せよ』と題する演説を行ったが、この模様を愛媛新報は『水平運動に対する、幾多の実証的差別に対して涙を揮って糾弾し、釈尊の平等主義に依り徹底的に団結の力に依って汚辱を糺し、同情的差別感を排除して、絞首台のうえに立ってもかまわない、と生々しい反逆の氣勢を上げた』と伝えている。

それ以後の参二の活躍は目覚ましい。このときすでに 40 歳。周囲の水平運動家の中では、年長ということもあったであろうし、また、これまでの労働運動の闘士としての、実績を買われたのもであろう。衆望を一身に担って、愛媛県水平社の執行委員長に就任し、松浪彦四郎と共に、県内各地のオルグに、相次ぐ差別事件の糾弾闘争に、東奔西走する毎日がはじまった。

参二の演説については、愛媛新報紙上にたびたび紹介されているが、たとえば、『徳永参二君は、政府其他民間有志家達の現在執りつつある内容空虚の恩惠的、侮辱的、同情的改善乃至は救済やゴマかし政策の非を鳴らし、残虐の苦しみを受くる者の解放は、結局、惨虐の苦しみを知る者の、大同団結集団を起し、其力を以て、自らの解放を図る外、策なき旨を論破して熱弁を揮い（後略）』とあるように、数多くの聴衆の心をつかむ巧みなものであったことが伺える。

『正義と酒を愛し、口を開けば忽ち万人を魅了する彼の弁舌は、いまだに古い四国の人たちの語り草になっている』と記したものもあるほど、参二の人柄やその語り口は魅力的であったのだろう。参二は、実に魅力あふれる人間であった。清濁併せ飲むというか、あらゆる思想や立場を乗り越えて、他者とのつながりを結ぶ才能において抜きん出たものをもっていた。しかし、夫として父としての彼の姿は、けっして褒められたものではなかったようである。家庭を顧みず水平運動に没頭する参二のために、妻や子が耐え忍ばねばならなかった経済的・精神的な苦労は、並大抵のものではなかったであろう。

ここに興味深い新聞記事がある。『松山の或る裏町に、娘を集めて裁縫を教えて居たお針屋がある。そこには 30 余名のお針娘が毎日通うていた、その中に一人淋しい女の子が、外の娘達にはどういうものか、あまり口を開かなかった。其のうちに誰云うとなく「松山の南から来る人」という噂が立った。これを耳にした彼女はハッと耳の根元を赤くして胸を躍らし、そして熱い涙を膝の上に落した。こうした日が幾日か繰返されて、其のうちにお針屋の娘達は一人減り二人減りして、其娘もお針屋から姿を消した』この記事が伝える「お針屋」の師匠こそ、実は参二の留守を懸命に守って、生活を支える参二夫人のことで

あらうと思われる。

1925(大正 14) 年になって、参二と常に二人三脚で歩んできた松浪彦四郎が愛媛を離れ、参二の肩にかかる責任の重さは、さらに増していく。同年 5 月大阪市中之島公会堂で開催された第 4 回全国水平社大会において、全国水平社本部に中央委員会等の機関を置くことが決められ、このとき参二は、松本治一郎ほか 9 人の一人として、中央委員に就任。活動範囲はますます広がっていったのである。

その後も参二は、全国水平社執行委員として、また愛媛県水平社執行委員長として、中央・地方の両方で目まぐるしく活動を続けていく。

ただ 1931（昭和 6）年 12 月、奈良県桜井町で開催された全国水平社第 10 回全国大会の地方情勢報告において、参二は「運動は萎縮している。その原因は従来の水平主義式運動より、階級的な運動に質的发展を遂げたためである。」という発言をしていることが気にかかる。この言葉の真意はどこにあるのだろうか。階級的闘争へと質的に発展したのだから、一時的に停滞・衰退と見える状況があることも、やむを得ない。」と言っているのであろうか。それとも「階級的闘争への転換が誤りであった。」という考えを述べているのであろうか。

しかし、この大会で出された水平社解消論に対して、特高資料『社会運動の状況』によれば、参二率いる愛媛県水平社は、全国水平社解消派に属すると目されていたようであるから、このあたりのことを考えれば、前掲の彼の発言は「階級的闘争への転換が誤りであったとする考えを述べたものではない」ということになるだろう。

しかし、どうにも割り切れないのは、その後プツリと参二の名前が、愛媛県水平社の活動を記録したものに、現れなくなってしまうことである。ひょっとすると、やはり参二には、このあたりで大きな思想的「揺れ」があったのではないのか。そして個人的な思いと、自らがこれまで牽引してきた愛媛県水平社の、もう止められなくなってしまった大きな流れの前で、彼は身動きできなくなってしまったのではあるまいか。その後、彼は忽然と水平運動から身を消し、1935（昭和 10）年 9 月、宇和島で 52 年の短い生涯を終える。33 年後の 1968（昭和 43）年、彼の妻もまた世を去った。

彼女は、死ぬまでただの一度も、けっしてよき夫・よき父ではなかった参二のことを悪く言ったことがなかったという。参二の妻は、参二の強さももろさも、すべてを受け入れ、すべてを許し、すべてを愛した女性であったに違いない。

参考文献 「全国水平社を支えた人びと」 水平社博物館（編） 解放出版社 （2002 年）

「至誠の人」

につ た ちょう じ ろう
新田長次郎 (1857~1936)



松山で生まれ育った新田長次郎は、20 歳のとき大阪に出て製革所に勤める。熱心に仕事に励み、技術^{みか}を研ぐことにより、周囲からも認められるようになった。

その後独立して工業用ベルトを中心とする製革業や、それに関連する事業を起こして大成功を収めた。

大阪で勤労少年のため小学校を私費で設立したり、生まれ故郷に高等商業学校（現松山大学）を設立したりと、教育の分野にも資金を提供する。

現・松山大学同窓会は、長次郎が「温山」と号したことから「温山会」と呼ばれている。

同郷の秋山好古と意気投合し、無二の親友となり、日本の近代化をさらにおし進めていった。また海外視察中には、後に松山市長となる加藤恒忠と知り合い、その後、交友を深め郷土の発展に尽力した。

長次郎は、幕末の動乱期、1857（安政 4）年、父・喜惣次、母・ウタの次男として、温泉郡味生村の里庄と呼ばれる庄屋格の自作農家に生まれた。両親や兄・利平、姉・タカたちと幸せな生活を送っていた。

長次郎 5 歳のとき、父が亡くなり、9 歳のとき三津浜の寺子屋に入るが、入門時に保護者と一緒に包み金を持参することができず、一人で包み金を持参し、師匠に会ってあいさつした。他の人からは「しっかりしている子だ。幼いのによく頑張っている。」と言われたが、彼はとても寂しかった。

長次郎は 11 歳まで寺子屋に通ったが、農耕の手助けや牛の世話と多忙な日々であったため 12 歳で寺子屋をやめた。しかし、近所の仲良しの友達と夜集まり、寺子屋で学んだことを復習しながら勉学に励んだ。

また、少年の頃から工作を好み、何でも自分で作りたいと思い、作り方を考え、思うように出来上がれば満足した。同じ物は作らず、新しい物を試作することを好んだ。

製作意欲が旺盛で、人に教わることなく、独創的に製作することを何よりも楽しみにした。このような少年期の素地が、後に大成し事業を成功させた所以であろう。

長次郎は家庭の事情を考え、「家を出て働きたい」と母に相談した。母は「20 歳になったらどこへでも好きなところへ行ったらええ。それまでは母のもとにおってくれ。」と長次郎を諭したのであった。

いよいよ 20 歳。誕生日の前夜、書置きを残して長次郎は、家族に無断で家を出た。、細い紙に長々と書かれた文章には「必ず身を立て家名を挙げ、親兄弟の誉れを得るため努め、さらには郷土の恩に報いる覚悟です。私の身のことは心配しないで、安心して日々をお過ごしください。しばらくお暇乞いをいたします。母上様をはじめ皆様のご壮健を、心より祈っております。」と書かれてあった。

大阪でいろいろな仕事に就いたが長続きせず、ある皮革職人から「仕事をさがしているなら、藤田組製革所が職人を募集しているよ。」と声をかけられた。

そのころ日本は、文明開化の真っ只中で、明治政府は産業を盛んにするため、先進国から新しい技術を貪欲に取り入れていた。その一つに和歌山市に設立した陸軍御用製革伝習所があった。製革は作業が難しく、忍耐も必要であったため、職工は長続きせず、入所後数日で辞めていく者が多かった。

長次郎は、藤田組が雇ったドイツ人技師ハイトケンペルの講演を聞く機会に恵まれた。ドイツ人技師は、近代化の歩みを阻害する日本の風土を、ずばりと指摘した。

『日本では製革に関係することを、好まない風習がある。しかし、西洋では製革事業は製鉄事業とともに、もっとも文明的な事業として、各国としのぎを削っている。

日本はこれで文明国と言えるのか。これから世の中が進んでいけば、各方面から歓迎されることは必然で、この事業は有望なのである。』この話を聞いた長次郎は、将来有望であるならば、どんな困難も乗り越えてやっていこうと、洋式製革術を習得する決心をし、1877（明治 10）年藤田組に入社した。

長次郎は、どんなに苦しくとも我慢し、必死に働いた。石灰を扱うために、両手の手袋に多数の穴が開き、吹き出る血が手袋を染めても、決して嫌がらずに作業を進めた。それを見つけた職長は、しばらく石灰を扱う仕事から長次郎を外した。「長次郎のように熱心に仕事をし、辛抱強さを模範にしてほしい。」と、職工たちに話すこともあった。

そのうち、教えなくても難しい作業をこなすことができると認められ、経験豊かな職人だけができる仕事を任されるようになっていった。

1882（明治 15）年、新しく製革工場を設立した大倉組から、長次郎に熱心な勧誘があった。長次郎は、確かな技量や知見をもつ人物が多く集まるところでさらに学ぶことができると考え、大倉組に入所し、めきめきと頭角を現すことになる。

ところが、尊敬する技術顧問から「この製品は厚すぎて、靴の皮として使うには不便である。皮を薄くするように。」と指示があった。そこで薄い皮を開発したところ、その技術顧問をよく思わない専務から「だれが薄くしろと言った。こんな指示を出すやつは誰だ。」と、問い詰められた。

長次郎は、すぐに専務が技術顧問を辞めさせようとしていることに気付き、「自分が責任を取るから、技術顧問を守ることに協力して欲しい。」と同僚たちに協力を呼びかけた。

専務が問い詰めようとしたとき「だれの命令でもありません。自分が薄い方がよいと考えて造ったのです。指示があったわけではありません。」ときっぱりと答えた。

専務から責め続けられても、変わらない態度で長次郎は、最後まで専務が期待する答えを出さなかった。

この一年後、長次郎は大倉組を辞めて、自分で事業を始めた。藤田組も大倉組も、陸軍の製革を請け負っていたので、長次郎は民間向けの皮革の製造技術を習得した。

研鑽を重ね 1885（明治 18）年に、彼が造った革を市場に出した。「これは日本一、いや東洋一の優等品である。」と絶賛された。非常に喜び、これからの自分の仕事に大きな自信をもった長次郎であった。

その後、外国製品に負けない皮革製品を次々と発表し好評を得た。特に、機械に使用するベルトは貴重であった。何より品切れや故障が起こったとき、輸入する場合は数か月かかるが、長次郎の工場で作った製品は、国内で生産するため納期が短く、たいへん便利だと歓迎された。こうして長次郎の工場はどんどん大きくなっていった。

立派に身を立てた長次郎であったが、故郷に残した母や家族のことも忘れたわけではなかった。成功して会社が大きくなればなるほど、家族を気遣う長次郎であった。

松山に住む母が、調子を崩して病床に就くことがあった。翌年の春、長次郎は外国に行く予定があり、その報告と見舞いを兼ねて松山へ帰省した。思いのほか、母親の容態が良くないため、回復するまで海外への出発を遅らせようかと考えた。

そのとき母が「外国へ行ったら、どんないいことがあるんか。」とたずねた。長次郎は「外国の革製品を見れば、今後の事業を発展させるために大いに役立つ」ことを話した。病気で臥せていた母は「そがいに有益な視察なら、必ず行かないかん。わしは病気じゃが、お前が海外におる 6 カ月くらい、死にゃあせん。神に誓って一生懸命養生するけん、お前が帰国するまで、生き永らえるけん、わしのことは心配せんでええ。外国を見て来て、お前の事業を発展させなさい。」と、長次郎を励ました。長次郎は、母の親心に感謝し、渡航を決意するのであった。

彼の渡航は、その後の彼の生き方にも、大きな変革をもたらしたと思われる。旅先では様々な出会いや出来事があり、出迎えてくれるはずの事務員が来なくて困った時、「縁もゆかりもない外国人が、自分に対して懇切な世話をしてくれ、人類相互愛の観念を遺憾なく発揮してくれた。」と述べている。

またシカゴのある新聞は「日本からはるばる博覧会を見るために渡米し、自己の専門に

属する皮革部門のみを調査して、他を顧みずに帰国した熱心な者がいた。」と伝えている。

ヨーロッパでは、加藤恒忠や秋山好古と交流しており、もう一つの「坂の上の雲」といわれている。

この後、彼は教育の世界でも、近代日本の建設に大きく貢献するのである。「今や我が国は、徳川幕府の封建制度から解放されて、明治維新となり、四民平等の恩恵をうけ、世界各国との交通が開けたため、大いに学問に励み、文化の進歩を図らなければならない」これは長次郎が 16 歳のときに影響を受けた、福沢諭吉の『学問ノススメ』の一節である。晩年、学校経営という道に進む長次郎ではあるが、その要因の一つとして、この一冊の本との出会いがあげられる。

秋山好古との交友

長次郎が松山出身者の中で、意気投合し無二の親友として、30 年あまり遠慮なく、そして楽しく交際を続けたのが、秋山好古であった。

あるとき「新田君。君は実業家だから、事業をさらに発展させ、利益を上げて国益を図ってほしい。僕は軍人だから、一生懸命人を創って国家に尽くす。私たち二人は自分の職業に向かって、互いに競争しながら、出来る限り努力しよう。」と好古から言われた。

長次郎は、創業のときから、世界一の皮革業者になる理想を抱いていたため、好古のこの提言にすぐに同意し「出来る限りの努力をして、国益の増進に力をつくしたい。」と答えた。また「君の工場を見学させてほしい。」と言って、好古が訪問してきたことがあった。長次郎は「せっかく来ていただいたのですから、職工のみんなに講演をしてください。」とお願いしたところ、好古はすぐに快諾してくれた。

「我々軍人は国家のため、日本の帆柱となり、鉄砲の弾丸の的となって、弾丸を受けて満足するものである。職工諸君にも、国家のために、機械と生命を共にする覚悟で働かなければ、国民としての資格を、声高く唱えることはできない。」と、大きな声で自分の思いを語った。職工たちは大いに感動した。

好古は、長次郎の事業に対して、陰となり日向となって応援した。東京出張店に訪れて、店員を激励することもあった。また、1923（大正 12）年の関東大震災で、店員が日比谷公園に避難したとき、邸内の空き家を利用して、店員たちを保護した。

松山高等商業学校の設立に向けて

松山では、松山高等商業学校の設立に向け、北豫中学校長加藤彰廉^{あきかど}が、市長加藤恒忠に持ちかけ、加藤恒忠は秋山好古の協力もあって、長次郎に相談した。

恒忠からは、「県民は実業専門教育機関として、高等商業学校の設置を熱望している。後日、最高学府である大学を設置することになれば、高等学校と高等商業学校のある松山が、大学設置の場として有利なので、松山市に高等商業学校を設立したい。」との相談があった。

長次郎にとって、松山は自らの出身地である。それだけに、特別な思いがあった。また、郷土の人材育成に力を注ぎたいという思いを強くもっていたこともあり、迷う話ではなかった。当時としては破格の資金を出し、金は出すが管理運営には口出ししない。会社へは卒業生は雇用しない。それは卒業イコール入社では、学生は勉強しないとの思いからである。

文部省からの提示の金額、愛媛県の負担金、市の応分の資金等について、長次郎は、二つ返事で全ての面倒をみた。

1923（大正 12）年文部大臣の許可を得て学校は設立された。我が国で 3 番目の私立高等商業学校であった。全国各地から校名を慕って入学を希望する者が、年を経るごとに増え、卒業生は社会の各方面で活躍することとなった。現在は松山大学となり、法学部設立時から、卒業生を入社させている。

この学校の設立に至るまで、長次郎の献身的な支援は、相当大きなものがあった。国の資金難により、何度も頓挫した計画であったが、松山市長加藤恒忠の前向きな思いと地域住民の熱望によって完成した経緯があるだけに、長次郎にとって感慨深いものがあった。設立に感謝する気持ちとして、卒業生と在校生などが自発的に新田長次郎と加藤恒忠・加藤彰廉の胸像を造り、現在でも校庭に設置されている。

新田長次郎は、新田皮革製造所を発展させ、大阪から東京や北海道に、皮革業から乳製品やベニア板の製造にまで広げた。実業家としての彼の成功から「東洋のベルト王」とか「皮革産業界のエジソン」と呼ばれた、また、彼の社会貢献を讃える人々から「至誠の人」「篤志家」と呼ばれている。数々のすぐれた実績を残し、崇高な生き方を貫いた長次郎は、1936（昭和 11）年に、多くの友人に惜しまれながら、その生涯を終えた。



松山大学西宮温山記念会館

参考文献 「明治の空 - 至誠の人 新田長次郎」 青山淳平（著） 燃焼社 （2009 年）

「夜間中学校長」

にしむらすがお
西村清雄（1871～1964）



西村清雄は、幕末から明治にかけて、松山の歌人であり指導者であった西村清臣の孫にあたる。教育に情熱を注ぎ、晩年には松山名誉市民第1号となった。

1871（明治4）年、現在の三番町で生まれる。1885（明治18）年、愛媛県第一中学校（現在の松山東高）に入学する。1889（明治22）年、大阪でキリスト教の洗礼を受ける。

1892（明治25）年、普通夜学会（現在の城南高校）の校長となる。1897（明治30）年、金藤ハマノと結婚する。1903（明治36）年、讃美歌「山路こえて」の詞を創作する。

松山城南高校の前身である「松山夜学校」を創立したのは、宣教師コーネリア・ジャドソンである。彼女は1890（明治23）年、四国最初の女学校、松山女学院に教師として、新潟の女学校から転勤して来た。

ジャドソンは義務教育がまだ施行されていなかった頃、通勤途中で、学校にいる時間なのに道端で遊んでいる子ども、子守りをしている子ども、掃除をしている子どもがたくさんいることに気づいた。最初は不思議に思っていたが、この子どもたちは家が貧しくて、学校へ行くことができないことがわかった。

ジャドソンは、女学校の校長であり松山教会の牧師でもあった二宮邦次郎に、この子どもたちが勉強できる場所を作ることができないだろうかと相談した。邦次郎はジャドソンの話を聞いて感動し協力を約束した。

いつも熱心に祈りを捧げている3人の青年を呼びとめ、ジャドソンの学校構想を話し、協力を求めた。彼らは「わたしたちは報酬はいりません。その代わりに英語を教えてください。だけののなら、喜んで協力します。」と言ってくれた。この3人の青年の一人が西村清雄であった。

こうして1891（明治24）年、四国で初めてのキリスト教教育による夜学校「普通夜学会」が誕生することになった。

三番町の彼女の家が教室となって、夜学校は生徒25人で開校された。しかし危機はすぐにやってきた。新しい宣教師館ができジャドソンがそこへ移ったため、夜学会は休校になってしまった。

ジャドソンは、南八坂町の売家を私費で購入し、校舎として使用できるように改造させ

た。授業再開から数か月過ぎたころ、清雄は「昼間はわたしの日本語教師に、夜は夜学校の校長になってもらえませんか。」とジャドソンから依頼された。

清雄は、昼間は吉藤尋常小学校の教員をしていた。このまま公立学校の教師を続けるか、不就学児童のための夜学の教師になるべきか、伝道師としての道を歩みたいという気持ちもわずかながら残っていた。

清雄は2か月間、悩み考えた末ジャドソンの夜学校にかける熱意に動かされ、吉藤小学校を辞職した。貧しい子どもたちに教育を受ける機会を与えて、よりよい人間形成へと導くことこそ大切であると考えたのであった。こうして1892（明治25）年、清雄は21歳の若さで夜学校の校長になった。

松山夜学校へ

1893（明治26）年、清雄は、夜学校を小学校に準じる各種学校として認可してほしいと申請した。翌年再度の申請で「早急に校舎を新築すること」を条件に認可された。この難題解決に力を貸してくれたのは、ジャドソンであった。

ジャドソンは、日頃からとても儉約な生活を送っていた。蓄えたお金で、永木町の7百坪の土地を購入した。土地代と校舎建築費の合計は1千円だったそうだ。

清雄は永木町に新校舎を建設した。1895（明治28）年11月校舎完成、名称も「私立松山夜学校」とした。

生徒も教師も新しい校舎建築を喜び、暇を見つけては工事を見にいった。新校舎には「私立夜学校」の看板が掲げられ、落成式は1895（明治28）年11月10日に行われた。この永木町の校舎は、やがて寄宿舎や幼稚園として使われるが、1982（昭和57）年まで、87年間の歴史を刻むことになる。

新しい校舎での教育は軌道にのってきた。キリスト教精神によって作られた「夜学校」だから、授業は夜2時間行われ、礼拝や聖書を学ぶ時間もあった。

しかし、昼間の仕事の疲れで学ぶ意欲が低下したり退学したりする者もいた。そこで学校内に織物機械を取り付け、働きながら学べるよう寄宿制度も取り入れた。清雄は寄宿生と共に働き、生活費を稼いだ。その頃清雄は、1897（明治30）年、金藤ハナノと結婚する。

松山夜学校に転機が訪れる。1900（明治33）年から、小学校の授業料が全廃されることになり、小学校未就学児童の教育にあたっていた私立夜学校の存在理由がなくなった。そこで、同校は教育程度を高め、中学程度の教育を施すことに踏み切った。

1906（明治39）年、中学と同程度の本科、高等小学校程度の予科を設立、学校は再スター

トした。入学者は多かったが、中途退学者もこれまた多かった。

創立以来 47 年間、無資格のまま続いた私立夜学校は、1938（昭和 13）年に晴れて文部省指定の「松山夜間中学校」になった。その結果、それまで多かった中退者も少なくなり、1943（昭和 18）年、校名は「松山城南中学校」に変わった。

1948（昭和 23）年から新制の定時制高校になって、1951（昭和 26）年に全日制を併設した。1960（昭和 35）年から全日制のみとなり、長年親しまれた「夜間」の使命を終えることになった。

創立者ジャドソンは 1932（昭和 7）年に帰米し、1969（昭和 44）年死去した。学校の礎を築いた西村清雄は、1962（昭和 37）年に松山市の名誉市民第 1 号になり、1964（昭和 39）年死去した。

讃美歌 404 番の「山路越えて」は、西村の作詞としてあまりにも有名で、ジャドソンが宇和島で伝道している時、峠を越えて西村が伝道の応援に行った時のものである。

讃美歌の一節が、法華津峠に建つ碑に刻まれている。幾多の苦難を乗り越え、理想に燃えた二人の建学精神は、長く称え続けられることであろう。

讃美歌集で歌われる「山路こえて」を現代文で再掲すると

- 1 山路こえて ひとりゆけど 主の手にすがれる 身はやすけし
- 2 松のあらし 谷のながれ みつかいの歌も かくやありなん
- 3 峯の雪と ころきよく 雲なきみ空と 胸は澄みぬ
- 4 みちはけわしく ゆくてとおし ころぎすかたに いつか着くらん
- 5 されども主よ ねぎまつらじ 旅路のおわりの ちかかれとは
- 6 日もくれなば 石のまくら かりねの夢にも み国しのばん

（現代語訳）

- 1 山道をゆく 一人旅だけれど 神の手に すべてゆだねているので 心は平安だ。
- 2 松風や 谷川のせせらぎの音 天使たちの歌声も きっとこのようなものだろう。
- 3 峯の雪のように 心は清らかで 雲のない空のように 気持ちは 澄んでいる。
- 4 道は険しく 行く先はまだ遠い 目的地には いつ着けるのだろうか。
- 5 しかし神よ 旅が早く終わってほしいと 私は望んではいません。
- 6 日が暮れたら 石を枕にして寝よう 眠っても 神の国の夢を見よう。

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会（2011 年）

「松山藩最後のお殿様」

ひさ まつ さだ こと

久松定謨（1867～1943）



久松定謨 石碑
（松山城）

幕藩体制が敷かれていた、江戸時代の最後の松山藩主は、松平定昭である。しかし、松山藩最後のお殿様と呼ばれた人物が別にいる。その人は久松定謨である。

時代は江戸から明治となり、定謨は藩主になることはなかったが、松山への功績は高く評価されている。

東京で勉学に励む郷土の若者のために常盤会を創り、子規や虚子、碧梧桐などを輩出する。特に子規は、日清戦争の従軍記者をしていたとき、定謨に招

かれたこともある。またフランスの留学経験を生かし、松山にフランス風の別邸「萬翠荘」を建築するなど、当時の進んだ西洋文化を愛媛の地に紹介した。

お殿様の跡継

定謨が、第 14 代伊予松山藩主・松平定昭の養子に決まったのは 1872（明治 5）年の初夏、5 歳になる少し前のことであった。定昭が病気になり、藩主の跡継ぎが必要となった松山藩では、旗本・松平勝実の三男、定謨を迎え入れた。

松山藩は、1868（慶応 4）年、鳥羽伏見の戦いで幕府方に加わり、朝廷軍に敗れた。前年、松山藩主となった定昭は、短い期間であったが、幕府の老中首座という大変重い役目を務めた。だから将軍に味方するのは当然のことであったが、松山藩は朝敵になってしまった。戦いに敗れ松山に帰った定昭は、松山城を明け渡した。23 歳の若い藩主にとって、悩み苦しんだ末の辛い決断であった。

定謨の父・勝実は「お前の父上になられる定昭様は、ご家来や松山の人々を、戦に巻き込むことを避けた立派な方だ。そんな定昭様が東京に移り住むように命じられた。そのことを知った松山近辺の人々は、定昭様にずっと松山にとどまっていただこう、と訴える騒動を起こした。それほど慕われていた方だ。定昭様はご病気だが、お前のおじい様にあたる勝成さまは、まだまだお元気だ。心配することはない。」「お前は松山藩主の跡継ぎとな

るのだ。家来であった者を大事にすること。ご領地の人々の暮らしぶりに思いを寄せること。それができてこそ殿様なのだ。」と、定謨を見てきっぱりと言った。

「はい、父上」わずか5歳の子に、どれほど理解できたか。定謨の表情はりりしく、心に決意を抱いたことは確かであった。定謨が、定昭と暮らしたのはわずかな間で、定昭は27歳という若さで亡くなってしまった。

久松小学校

現在の東京都中央区日本橋久松町に「久松小学校」がある。長い間、校名は町名に、由来すると言われていたが、1873（明治6）年、久松定謨から多額の寄付を受けて、建てたことから名付けられたということがわかった。明治6年は、定謨が久松家を継いだ翌年である。寄付は祖父・勝成が決めたことであろう。

勝成は1869（明治2）年、松山藩知事に任命されたが、広く世界に目を向けた知識をもつことの大切さを痛感していた。時代は移り、社会の仕組みが大きく、しかも急激に変わっていく。新しい国づくりには、子どもたちの教育が大切だと考えるようになった。政府も急いで国の教育の仕組みを整えようとしていた。

1872（明治5）年から、全国に小学校がつくられることになった。しかし国も県にも、学校を建てるゆとりはなく、教育の大切さに気付いた人たちが中心になって、それぞれお金を出し合い、また寄付をお願いして資金を集め、自分たちの地域に学校を建てる準備を進めた。東京の久松小学校も、定謨を筆頭に、地域のたくさんの人たちの寄付金をもとにつくられた。

定謨は、松山の学校にも多額の寄付をし、番町、味酒、八坂、東雲、新玉、清水の小学校が、明治5年に開校した。二番町に開校した番町小学校は、正岡子規や秋山^{きよ}真^{ゆき}之^らが学んだ学校であるが『明治10年、旧松山藩主・松平定謨から多額の寄付を受けた』記録が残っている。当時、三教科を教える資格をもった先生の給与が最も高く20円だったから、定謨の寄付金がいかに大変な額であったか、ということがわかる。

定謨自身も、成長に従い学習意欲が高まり、外国に興味を持ちフランス留学を希望したが、「東京で学びたいと希望しても、学費が準備できない。」「国の要職に就きたくても、朝敵の旧松山藩出身では、排除された」など、旧藩士から松山の様子や人々の生活振りを聞き心を痛めた。

1884（明治17年）祖父や、文部省役人^{もとゆき}内藤素行（鳴雪）と相談し、常磐会給付金制度を設立した。一人月額7円、大学生は10円、本代は別に支給された。東京での下宿代

は月4円であった。第一回給付生は10名で、正岡子規も選ばれたので、伯父の加藤拓川は上京を促した。

定謨は、1887（明治20）年常盤会寄宿舎を建設した。2階建で30人ほどが生活できた。関係者の中に、正岡子規、村上^{うむつ}齋^{さい}月、高浜^{たかひら}虚^こ子、河東^{かとう}碧^{へき}梧^こ桐などの俳人、大蔵大臣や文部大臣を務めた勝田主計、司法次官皆川治広らがいた。

常盤会の設立にかかわった内藤素行が2代目の監督になり、1889（明治22）年から19年間務めた。内藤は20歳も年下の正岡子規から俳句を学び、上達著しく新聞や雑誌の俳句の選者となった。鳴雪と号した。

内藤の次に、寄宿舎の監督になったのが秋山好古である。好古は定謨とともに、フランスに留学していた加藤拓川が、外務省の仕事をするようになったので、拓川に代わって定謨の世話係としてフランスに留学した。

このように、常盤会の監督や寄宿生をはじめ、定謨に関係の深かった人々は、各方面で大きな活躍をした。当時の愛媛出身の有名人で、常盤会の世話にならなかった者はない、とまで言われた。

松山藩最後のお殿様

定謨は、1922（大正11）年に、今も城山の南に残る萬翠荘を建てた。陸軍の大演習が四国であり、それをご覧になるために来られた皇太子殿下の松山での宿舎にするためであった。フランス風の立派な建物で、長くフランスにいた定謨の好みを考えて設計されたが、定謨は松山について少しでも良い印象をもっていただきたいと願っていた。ちなみに、設計に当たったのは^{きこ}木^こ子^し七^{しち}郎という人で、妻は松山出身の実業家、新田長次郎の長女カツであった。

日本三大平山城の一つといわれる松山城は、明治維新のときに、松山藩が明け渡して以来、陸軍が管理していた。「お城を松山に返してもらおう」と、大きな働きをしたのが定謨と加藤拓川である。拓川は、定謨とフランスに留学し、外交官として活躍した。その後、貴族院勅撰議員となっていたが、松山の人々の強い願いを受け入れ、松山市長になった。

拓川は、定謨と相談し、城山を松山に返していただきたいと政府に願い出た。

1923（大正12）年、願いが聞き入れられ、お城、城山、堀之内をひとまとめに払い下げを受けたが、定謨はそれに多額の維持費を添えて、松山市に寄付した。

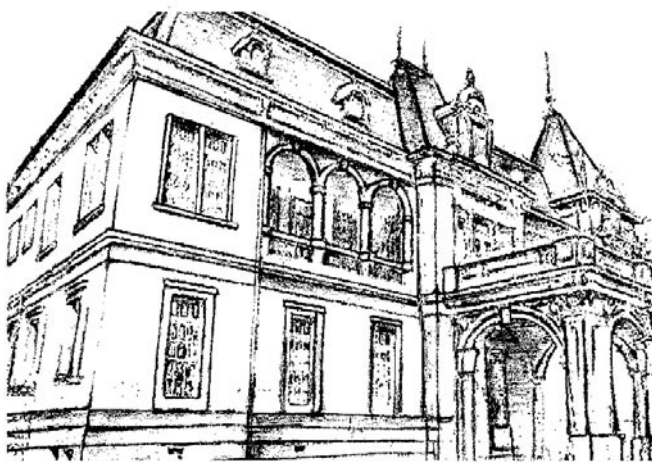
市長をはじめ松山の人々は大いに感激し、定謨の行いを称えたことはいうまでもない。後日、定謨の行いを後々まで伝え残すために、石碑が立てられた。天守閣の石垣の下、北

東の隅にある大きな石碑が「伯爵久松定謨^{しょうとくひ} 頌徳碑」である。

定謨は、松山の農業の発展のためにも大きな働きをした。農業のことを考える「久松家^{ここうかい} 顧耕会」を作り、数名の専門技術者をおき、農業の技術指導に当たらせた。

松山藩、松平家・初代藩主・松平定行の隠居所だった東野御茶屋付近を開墾し、みかんなどの果樹を植えさせ、模範となる農場づくりを進めた。後に県の果樹試験場として、地域の農業の発展に大いに役立った。特に柑橘類の研究は成果を上げ、新品種のみかんは、松山だけでなく県下の農業発展に寄与した。

ほかの元藩主の子孫は、ほとんど東京に住んでいた。定謨が松山に帰って住むようになったころ、松山の人たちは大いに喜んで迎えた。定謨が、元の藩士だけでなく、松山の人たちのために尽くしてくれたことをみな知っていた。



萬翠荘

定謨は、正式に松山藩主になったことはない。でも、多くの人が定謨を「お殿様」と呼んだ。「松山藩最後のお殿様」と呼ぶに、ふさわしい人であった。

松山市はすでに、松山城や三の丸を改修し、現在堀之内を大々的に整備し、封建的社会のシンボルから、多彩な行事ができる、市民の集まる公園に作り替えている。

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会（2011 年）

「荊の道を乗り越えて」

福岡^{さね かず}實一（1921～1988）

松山市の同和教育の礎を築く



1922（大正 11）年 3 月 3 日、京都市岡崎公会堂にて、水平社宣言が高らかに謳われる半年前、福岡^{さね かず}實一（旧姓・藤岡實一）は伊予郡北伊予村（伊予郡松前町）の被差別部落に生まれた。

農業を営む藤岡米近・マスの三男として、幼・少年期を松山市近郊の農村で過ごし尋常高等小学校卒業、松山市の愛媛県立松山農業学校に進学した。1939（昭和 14）年 3 月同校を卒業すると、東京の麻布獣医専門学校（麻布獣医科大学）に入学したが、翌年 11 月、

経済的な理由から退学した。

帰郷して農業に従事していた實一にも太平洋戦争の影は忍び寄り、1942（昭和 17）年、兵役に就き、中国・満州（中国東北部）に従軍した。

レッドパージを乗り越えて

終戦の 1945（昭和 20）年の 11 月復員した實一は、1948（昭和 23）年 1 月、愛媛新聞社に入社すると同時に愛媛新聞労働組合に加入し、その翌年 1 月、早くも組合の書記長に就任する。

当時の日本は連合国の占領下であり、GHQ の占領政策によって、労働組合の結成が進められたが、米ソ冷戦下で朝鮮戦争が勃発（1950 年 6 月 25 日）すると、GHQ 総司令官マッカーサーは言論機関のレッドパージを勧告した。その結果、愛媛新聞労働組合書記長であった實一も、1950（昭和 25）年 8 月 5 日に新聞社を解雇された。實一 29 歳の夏であった。

この時期、實一は母方の姓の高市をペンネームとして使っている。そこには被差別部落出身であることに対するなんらかの意識が働いていたのかもしれない。

やり場のない憤りを胸に、大洲市の姉の嫁ぎ先に身を寄せた實一であるが、組合活動をととして、新しい日本、新しい社会の理想に目覚めていた實一は、大洲市周辺の若者たち 6～7 名と社会科学研究のための学習会を開いた。實一は 1955（昭和 30）年学習会で出会った福岡朋子と結婚し、それ以後、朋子の姓である福岡を名乗ることとなった。そこ

にも部落差別の越え難い現実があったことは否めない。そしてそのことが、その後の福岡
實一の生き方に大きな影響を及ぼしている。

部落差別を乗り越えて

結婚を機に実家に帰った實一は、農業に従事しながら解放委員会愛媛県連運動に関わる
ようになる。解放委員会愛媛県連準備会の愛媛人民連盟議長を務めた中西昌晴、愛媛県連
の歴代委員長・原宰三・村上栄太郎・山下友枝、松山市議の中田秀一らとともに差別事件
の公判闘争と同時に、行政への追及を進めていく。

当時の愛媛県の部落解放運動を振り返ってみると、1922（大正 11）年 3 月の全国水
平社結成以来の部落解放運動も戦争によって自然消滅していた。終戦後 1946（昭和 21）
年 2 月、部落解放全国委員会が結成され、部落解放運動が再開された。

愛媛県でも解放委員会愛媛県連準備会の組織化が進み、1948（昭和 23）年 12 月、解
放委員会愛媛県連が発足するが、同和対策審議会設置法が公布される半年前の 1960（昭
和 35）年 3 月の県連 14 回大会を最後に活動を停止した。

實一は 1961（昭和 36）年 4 月、同和対策事業の行政への窓口であった愛媛県同和事
業対策協議会の有志を中心に結成された、愛媛県同和対策協議会（県同対協、初代会長は
松山市長・宇都宮孝平）の事務局長に就任（昭和 36 年～37 年）した。その後、県同対
協は県民総ぐるみの組織として「対話と協調」路線のもと、県知事を会長（支部では市町
村長が支部長）に、同和対策事業の行政窓口を一本化して運動を展開していく。1971（昭
和 46）年県同対協第 11 回大会頃から次第に部落民の自主的な解放運動を否定、排除し
ていくことになる。

あつれき

軌轢を乗り越えて

1962（昭和 37）年、県同対協事務局長の職を辞した實一は、1963（昭和 38）年に
松山市役所の嘱託職員となり、同和対策事業特別措置法が施行された翌年の 1970（昭和
45）年 7 月、同和問題の専門職員として正規職員に採用され、民生部社会課厚生係に任
命された。

県同対協の動きから距離を置いた實一は、部落問題や部落史の研究に多くの時間を割く
ようになり、愛媛大学部落問題研究会の指導を始めたのもこの頃からである。

同和対策事業特別措置法が施行された 1969（昭和 44）年、松山市教育委員会も社会
教育課成人係に同和教育担当者が置かれ、公民館活動の中へ同和教育を位置づけようとし
ていた。こうした中で松山市教育委員会は、公民館主事を対象に實一を講師に、同和対策
審議会答申を中心に、一泊二日の集中研修を行っている。

1972（昭和 47）年 3 月、福岡實一執筆の「つくられた部落……その歴史と解放の歩
み」（松山市教育委員会・松山市社会同和教育協議会）を発行した。實一は 1973（昭和
48）年 2 月の第 1 回松山市同和教育研究大会で討議者として参加した。第 2 回研究大会は、
討議者として参加するとともに、松山市同和教育協議会設立準備会を立ち上げ、5 月の設
立総会を目指していたが、松山市同和教育協議会設立は、運動団体の軋轢によって設立総
会前日に中止となった。

その日の日記に、實一は次のように記している。

『5 月 15 日（水）晴れ 身体だるく 頭ぼやける 一人の狂人が 刃物を持って 市
民をだまくらかして 狂人は暴れる…手をこまねいて あれよあれよと見守る行政 市教
委と発起人たちに嫌悪感をおぼえさせ 善良な公務員はおびえ 発起人会を開いて 市同
教協議会結成大会は延期となる 無期延期 夜、先生たちと同和教育を話し合う。 学校
教育現場は「同和教育」実行の強制命令がでたとか 全教科でとり組め、命令、弾圧 ヤ
レ、ヤレ 何でヤランノカ オドシの中の同和教育 こんな同和教育などやらんがよい
目覚め 民衆よ 早くおきろ 民衆よ むなしい空虚 空念佛 ゼロの世界 日本国 ど
この国だ。』

荊の道を乗り越えて

仕切り直しとなった松山市同和教育協議会は、1975（昭和 50）年 12 月、松山市同和
教育推進協議会として結実し、松山市同和教育基本方針が策定された。そして、1976（昭
和 51）年 3 月、福岡實一の手による同和教育テキスト第一集「みんなのしあわせをめざ
して一部落の歴史と解放の歩み」、第二集「同和問題の認識」（松山市教育委員会・松山市
同和教育推進協議会）が発行された。

1976（昭和 51）年 4 月、實一は同和教育担当主幹として、社会教育課に異動となった。
そして彼を中心にして、松山市同和教育基本方針に基づく「同和教育推進計画」が作成さ
れ、松山市における同和教育の基礎が固められた。また、公民館や学校の学習会講師を務
める傍ら、指導者の育成にも尽力した。

1977（昭和 52）年、長野県の現地研修に参加した公民館主事を中心に「光と熱」と

いう自主グループが誕生した。同じく参加した同和教育主任の先生たちは、定期的に連絡会を開催し、自己研修に努め、社会教育の分野にも積極的に関わるようになってきた。

實一は市民啓発にも努め、1979(昭和54)年度「広報まつやま」に月一回「同和問題シリーズ」を連載しており、1981(昭和56)年2月、同和問題や部落史に関わる資料をもとに研究書「解放令考」(松山市教育委員会・松山市同和教育推進協議会)を書き上げている。

こうした同和教育行政の牽引役の一方で、實一は愛媛大学部落問題研究会の学生たちとともに、愛媛県内の同和地区のフィールドワーク(聴き取り調査)も行っている。この活動は、彼のライフワークに位置づけられ、県下の同和地区360地区を巡って聴き取った証言とともに、1950年頃から同和問題や部落史に関わる資料を収集している。

また、四国部落史研究会の求めに応じて「伊予に於ける近世部落の形成過程」を「四国近世被差別部落史研究」(1982年三好昭一郎編・明石書店刊)に執筆したり、愛媛県百科大事典(1985年・愛媛新聞編・刊)に同和問題に関わる項目を寄稿したりもしている。

こうした多忙の中6年かけてまとめた「愛媛県の部落解放運動史概論」は、「いわれなき差別に県内の同和地区の人たちはどのように闘い、いかに平等を要求して来たか」を関係者の証言と綿密な調査資料で綴っている。

年表を残して脱稿した1981(昭和56)年7月の愛媛新聞の取材に対して、實一は「正当な解放運動史を後世に。その中から差別をなくすためにどうすればよいか。それを読み取ってほしい。」と答えている。

しかし、この愛媛新聞7月10日付けの記事を最後に、福岡實一の活動は終わっている。自宅の書斎の机の上に「愛媛県の部落解放運動史概論」の原稿を残したまま病に倒れ、「愛媛県の部落解放運動史概論」の完成を夢見ながら、1988(昭和63)年6月3日、帰らぬ人となった。

『資料1』伊予における近世部落の形成過程

三好昭一郎編 四国近世被差別部落史研究 1982(昭和57)年12月20日 から引用

まえがき

在来の歴史は、その時代の人民を抑圧し、搾取した権力者たちの都合のよい歴史を捏造、押しつけてきたものでしかない。歴史の主人公は人民である、各時代の権力者の弾圧と戦い、死闘をくりかえしてきた、人民の文化的歴史を知ることこそ真の歴史なのである。

そのため、わが国の幕藩権力者の支配体制と、その機能を明らかにすれば、身分制の構図を把握でき、被抑圧人民とりわけ被差別部落の歴史や文化を知ることでもあるはずである。

歴史は官(権力者)や、その道の専門家から与えられるものに頼るのではなく、歴史的に愛媛県の各地で権力の抑圧と不合理に対して戦っている多くの民衆の、属地の生活や環境をよくする戦いから、その地域に根ざした民衆の足跡をさぐりあてなければならない。

これまで愛媛県では、村落共同体から除外された、多くの被差別部落の歴史は、口伝でしか伝承することができなかった。富も文字もなく、毎日が「人外の人」として、禽獣扱いされてきた惨酷なその歴史は、暴力と狡知(こうち)にたけた、権力者には、富と文字があったから、自己の利にかなった歴史を残してきた。その陰に被抑圧人民の真の歴史は抹殺されてきた。

ここにまとめようとする近世部落の小論は、伊予全土に苦吟の暮らしを強いられた被差別部落の、血塗られた歴史のほんの一部分にしかすぎない。被差別部落の伝える史料はいくらもない。あるのは存命中の古老たちの口碑(こうひ)にたよらざるを得なかった。しかも十指にたりない古老しか存在せず、彼らの多くはあまり、過去を語りたがらなかった。地下にうずもれた陰惨な歴史は、もはや掘りおこしようもないのかと、気力の薄れる思いにおそわれた時もあったが、勇をふるってこの壮大な研究に体当たりしたが、この欠陥の多い小論に対して、ご批判を賜れば幸甚である。

享保大飢饉と部落民

さて、伊予の穢多・非人制度を考える場合に、素通りできない大事件に突き当たる。その一つは享保の大飢饉である。この大飢饉は1702年のことで、五代定英の治政下におこったもので、災害を明らかにするための史料は残されていない。したがって、被差別部落民

の口伝と、わずかに残る供養塔を訪ね、古老たちに聞き取りをしたものに基づいて、当時の惨状をかいまみる以外にない。

松山藩の平田村・安城寺・宮の窪・浦戸・堀江村（松山市）・神崎村（伊予郡松前町）などは、貧農や穢多・非人の 90％は餓死したといわれている。そうした当時の惨状を口伝に聞かされたという被差別部落の古老はいう。「生き地獄とはこのことで、青草一本なかったという。木の根（サクラ、柳、バラなど）草の実はとつくになかった。ろすけ草（浮草）犬も猫もみんな食うた。食えるものは何でも食うた。しまいには、人間も山にはこんで焼いて食うた。それはひどいもんであったという。

勿論着るものはなく、蓮の半パラ、菰の半ペラを腰に、縄でしばりつけて、水ぶくれの腹をさすりながら、あてどなく雨の中を歩きまわった。

川という川は水力サがふえ、海にも近よれず、神社にも近よれず、昼となく夜となく、人間のうめき声は村にみちあふれ、乳首を食いちぎられた母は、赤ん坊を下敷にして、血だらけでこときれているのをなんぼもみた」という。

この享保大飢饉での餓死者の大半は、生産から疎外され「人外の人」として禽獣に等しいとされた穢多・非人であったという。

以下、すこし長くなるが、享保大飢饉について『伊予史談』に発表された、柳原多美雄氏の論文「享保の飢饉について」から引用してみよう。

『享保 17 年子歳（将軍吉宗の時代）は最も凶作の年であって、特に関西地方は激甚を極め、飢民の数 16 万 9 千 5 百人に及んだ。この凶作の主なる原因とは、第一霧雨、第二蝗害であった。

我々はこの年に於ける気候が、如何なる状態であったかを、確実に知ることができないけれども、松山藩浮穴郡高井源次郎の覚書によると、当時松山地方は 3 月頃より雨度々降り申し、麦の収穫時期に霧雨あり、麦くさり、いつもの年の三分作と相成り、5 月の中旬より又々雨降り続き、閏 5 月 29 日頃までふり続き、そのはては「蝗」と申す虫つき、村々にては諸人集まり虫の祈祷をなすと言えども、そのしるしさらになし。』云々とある。よって当時松山地方に於いては、麦の収穫時間に霧雨あり、五月の中旬から翌閏五月末日まで約一ヶ月半の長雨となり、蝗の害による稲の収穫皆無という悲惨な状況となったのである。

『資料2』 差別と闘う生きざま克明に

「愛媛県の部落解放史概論」 近く刊行

360 地区巡って聞き取り調査 松山の福岡さん 6 年かけてまとめる

「愛媛新聞 1981（昭和 56）年 7 月 10 日」引用

『いわれなき差別に、県内の同和地区の人たちはどのように闘い、いかに「平等」を要求して来たか。関係者の証言と、綿密な調査資料でつづる「愛媛県の部落解放史概論」が、松山市内の一運動家の手でまとめられ、近く刊行される。部落解放運動史概論をまとめたのは、松山市教委社会教育課主幹福岡實一さん。

県下で初めてしるされる、近世から現代までの解放運動の通史として、また同和地区に生まれ育ち、現場に身を置いた著者の目を通してのリアルなドキュメントとして注目されており、発刊にかける関係者の期待は大きい。同書は「近世（徳川時代）」「初期資本主義（明治）」「自由民権から 15 年戦争（太平洋戦争）まで」「敗戦から現在まで」の四部で構成され、県下の同和地区の人たち、解放運動に携わった人たちの生きざまを克明に追う一方で、解放運動の歴史を各種史料から通史の形でまとめている。

大正 11 年、県水平社創始者松波彦四郎氏（92）東京在住、元松山市議中田秀一氏（82）内宮町、初代部落解放同盟県連書記長故村上栄太郎氏、県下の水平社運動を闘ってきた人たち 36 人をはじめとする、現存の関係者約百人の聞き取りによる証言は、まさに“生きた現代史”である。

昭和初期、当時珍しいサイドカーを駆って県下の解放運動に奔走し、法華津峠で倒れた故徳永参二氏のエピソード、水平社発足当時の「氏子加入」「神輿渡御」など宥和主義的運動への疑問、昭和 43 年スタートした県同和教育研究協議会が、昭和 27 年に発足していたことなど、その内容も興味深い。

福岡さんは、同書執筆をライフワークとして取り組んだ動機を「県内に正当な部落解放運動史が皆無であること、解放運動の歴史を担ってきた人たちの存命中に事実を聞き取り、身を持って体験したことを詳細に後世に残したい」と話す。

昭和 50 年から資料収集を始め、県下の同和地区 568 のうち 360 地区を巡って聞き取り調査を行った。言語障がいのある松波氏とは執筆で、水平社創設当時のメンバーを病床に何日も訪ねたこともある。「正当な解放運動史を後世に。その中から差別をなくするために、どうすればよいか。それを読み取ってほしい。」この一念が福岡さんの聞き取り、資料収集、執筆作業を支えてきた。同書は、年表を残して脱稿、今年 12 月にも刊行される。』

『資料3』 国交断絶のアルバニア訪問

「愛媛新聞 1980（昭和 55）年 8 月 15 日」引用

『松山市教委の福岡さん 来月出発 日本の姿 紹介

松山市の職員が近く、東欧にあつて独自の社会主義国建設を進めているアルバニアへの訪問団の一員として参加する。同国は中、ソ両国とも外交を断絶、準鎖国国として、わが国とも現在国交はない。県下でも同国を訪れるのは戦後初めてで、民間人による友好の架け橋として期待されている。

この人は、松山市教委社会教育課主幹の福岡實一さん。去る 54 年から日本アルバニア協会県支部長として、両国間のパイプ役を務めて来た。同協会が、来月初め戦後 3 回目の友好代表訪問団をアルバニアに派遣するのに伴い、福岡さんが四国地区で初の団員に選ばれた。

福岡さんらは、9 月 7 日大阪を出発、シンガポール―バリーベオグラード（ユーゴスラビア）を経由して、アルバニアの首都チラナに入り、約 2 週間同国内を視察、同国民との交流を深める。福岡さんは「ソ連、中国」などが修正主義に走り、社会主義のイメージが世界でも消え去ろうとしているなか、イデオロギーの純粋性を保持しつつ、独自の社会主義国家の道を歩む同国に学びたい。とくに、教育、障がい者に対する福祉施策、医療の無料化など資本主義国より学ぶところが多いものと思っている。」と胸をふくらませている。

また、中、ソと国交を断つて以来、東欧の孤児として、苦難の経済後進国性を持つ同国に「本来の日本の姿を紹介し、国交以前の何かを見つける必要がある。」とも話し、福岡さんは民間人による友好のパイプを少しでも広げる役を担って、近く同国へ向け旅立つ。』

参考文献

- 「部落問題・人権事典（戦後の解放運動・愛媛県・松尾幸弘著）」部落解放人権研究所（2001 年）
- 「愛媛新聞労働組合 20 年史」愛媛新聞労働組合・刊（1965 年）
- 「愛媛県百科大事典」愛媛新聞編・刊（1985 年）
- 「つくられた部落その歴史と解放の歩み」
- 「みんなのしあわせをめざして・第一集・第二集」
- 「解放令考」
- 「四国近世被差別部落史研究」「愛媛新聞」（1981 年 7 月 10 日付）

「俳句は文学である」

まさおか し き

正岡子規（1867～1902）



松山観光に来た人がまず驚くのは、市内に建てられている句碑の多さである。石手寺、松山城、道後公園などの観光地だけでなく、街中の小さな公園にまで句碑が見られる。

また俳句ポストも数多く設置されており、松山でこんなに俳句づくりがさかんになった理由に、正岡子規の存在があげられる。

正岡子規は、1867（慶応 3）年、現在の松山市花園町に生まれた。父・松山藩士、母・八重は加藤拓川の姉であり、拓川は 8 歳年上の叔父である。

子規が生まれた年は、徳川慶喜の大政奉還、明治天皇即位など、近代日本が始まった年でもあった。1871（明治 4）年明治政府は、穢多・非人の呼称を廃止し、平民と同様とするという、いわゆる「身分解放令」を布告した。子規が 4 歳の時のことである。

16 歳で東京に勉強に行き、俳句や小説の勉強を続けたが、やがて重い病気にかかり、ついには歩くこともできなくなる。でも病気に負けることなく勉強を続け、一生の間に 2 万 4 千句以上の俳句を残した。

その間、夏目漱石や秋山兄弟、高浜虚子など、多くの人たちと交流を深めた。子規は松山だけでなく、世の中に広く俳句のよさを知らせ、今でも私たちのまわりに、そのすばらしい足跡を残している。

1883（明治 16）年、叔父の拓川の勧めで勉学のため上京した子規を、フランスへ行くこととなった拓川は、親友の陸羯南^{くわかつなん}に託すが、この出会いが子規に「近代俳句の父」への道を開く。のちに陸羯南は新聞「日本」を創刊し、子規に活躍の場を与えた。

1889（明治 22）年、咯血した子規は “ 卯の花を めがけてきたか 時鳥 “（ほととぎす） “ 卯の花の 散るまで鳴くか 子規 ”（ほととぎす）という句をつくった。

この時から咯血した自分を、鳴いて血を吐く（ほととぎす）にたとえ、その後「子規」と号することにした。卯の花には卯年生まれの自分を託し、時鳥・子規には肺結核が託されている。

子規の時代、肺結核は不治の病だった。「あと 10 年の命だ」こうして子規の俳句における本格的な活動が始まった。

1891（明治 24）年には、俳句における写実性を重視して、新聞「日本」を舞台に俳

句革新運動を起こし、芭蕉の俳句を批判するまでになった。

1892（明治 25）年、子規は日本新聞社に入社し、東京根岸に松山から母と妹を呼んで同居し、新聞「日本」の紙面で、読者から送られてきた俳句、短歌を批評したり自分の俳句、短歌の作品や随筆「墨汁一滴」などを発表したりした。

1902（明治 35）年 9 月 18 日、午前 11 時頃、妹の律に支えられて筆を持ち、画板に貼った唐紙の真ん中に、何度も墨をつぎながら、一句一句紙に書き付けた。

糸瓜咲て 疾のつまりし 仏かな

痰一斗 糸瓜の水も 間にあはず

をととひの へちまの水も 取らざりき

やがて眠りについた子規は、9 月 19 日午前 1 時、律や母、みんなに見守られ、永遠の眠りについた。

子規の偉大な業績の一つは、俳句を文学にまで高めたことである。松尾芭蕉以後の江戸時代末期から明治にかけ、俳諧が次第に低俗な趣味に流されて、滅亡状態になっていたが、一瞬の感動を伝える文学にまで高めた。それには、病の体と闘いながらの壮絶な努力があった。

子規が明治の幕開けとともに、病魔と闘いながら生き抜き築いてきたものは、今も多くの人々に影響を与え続けている。

子規は、決して長くはない 35 年の生涯の中で、2 万 4 千句以上もの俳句を残した。

その子規の俳句の中に、被差別部落を題材に詠んだ句がある。

鶴の巣や 場所もあろうに 穢多の家 1901（明治 34）年 春

穢多村の 仏うつくし 漫寿沙華 1900（明治 33）年 秋

穢多村の ともし火もなき 夜寒哉 1896（明治 29）年 冬

穢多村や 犬の皮を剥ぐ 盆の月 1894（明治 27）年 夏

穢多の子の 窓からのぞく 夏書哉 1893（明治 26）年 夏

これらの俳句に対する解釈や評価には、種々の異なった意見がある。

その一つは「これらの俳句はいずれも郷里松山在住時の作でなく、東京に居た頃の作である。

これを見てもわかるとおり、解放令が出たときは、子規はまだ 4 歳であり、その後東京に出る 17 歳頃までに部落についての専門的知識を学ぶ機会は何もなかったといえよう。ただ断片的に叔父の拓川やその友人陸掲南から聞き知った程度であろう。

こうした句で、部落の人々を同情や哀れみ程度の感情でもって、見下し、さげすむような作品を通じて、差別助長の役割を果たしていたのではないのか」といった意見である。

また、それとは異なる解釈もある。

その一つとして「岩波文庫の正岡子規著『墨汁一滴』の末尾〔編集付記〕に『鶴の巣や…』の句は、差別用語を用いているのみならず、著しい部落差別の意識を前提として成立している」と書かれている。

また『愛媛県史』にも、「穢多の家とめでたい鶴とを対照的に配置している作品には、明瞭な差別性を捉えることができる……明らかな差別性を感じとられるのは、彼が武士出身であり、加藤拓川や自由民権運動の影響を受けたといっても、本来的には支配者である武士の体質が、払拭されていないからといえる……文学の革新に立ち向かっていくうえで、部落問題に大胆に取り組んではいるが、子規自身がその時代、社会の差別性を脱却できていないのは、いかにも残念である。」と解説している。

『鶴の巣』という以上、巣をつくり卵を生み、子どもを育てることが連想され、未来を意味する。『鶴』は、将来のめでたいしるしを現わす『瑞祥』だともいわれている。

『場所もあろうに』差別と貧苦に苦しむ部落の家に『瑞祥』である鶴が、巣をつくったよ、という句である。

こう考えると、この句は岩波文庫のいうように、差別用語を用いているのみならず、著しい差別意識を前提として成立しているのではなく、子規自身の病状も同様であるが、自分自身ではどうする事もできない、悲惨な生活を強いられている部落の人々に、心から『将来必ず幸せになってほしい』と願う、子規の温かい気持ちを、素直に読み取るべき句として、ながく親しんでいただきたいと思います。」という意見もある。

『小説石田波郷』の著者でもある土方鐵は『文学作品の差別表現』のなかで「最近必要があつて再読した夏目漱石の『坊ちゃん』は、明治 39 年の作だが、その中に次のような記述があつた。『是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生まれからして違うんだ』これは、坊ちゃんが生徒たちの悪戯にへきえきし、つよがりを心のなかで呟く台詞である。

漱石が武士の出かどうか、わたしは知らない。もっともこれは作中人物の坊ちゃんが呟くのであって、漱石自身の意識ではないのかもしれない。しかし、漱石は、当時の最高の知識人の一人であろう。それにしては、作者の坊ちゃんへの批判的視点は、希薄といわねばなるまい。

いずれにしても、坊ちゃんは、今日の人権意識からいうと、かなり差別的人間観をもっているといってもいい。そのうえ、土地の人間を軽蔑し『田舎もの』とよぶ。

わたしは、ここで漱石批判を展開しようと考えているのではない。わたしたちが、今日これらの作品を読むとき、いかなる態度で受け止めるべきかが問われているのである。今

日時点で読むということは、無批判に読み流すということではなく、批判すべきは批判しながら読むということである。

だからといって、わたしはこれら問題点を含んだ作品を、読者から隠そうなどとは考えない。いくら問題点があろうとも、初出原稿のままに活字にすべきだと思う。なぜなら、一度活字にして公表したものを、闇に葬ることは不可能であるし、表現の自由からいって正しくない。それら差別的作品をも、反面教師として、人権意識の向上に努めねばならないだろう。

それよりなにより、作品の一部であることばや表現が、問題ではないということだ。『士農工商』という身分意識は『坊ちゃん』の時代には生きていたのである。履歴書などには、士族とか平民とかの族称を記載しなければならない時代であった。小学校で貰う卒業証書にも記載されていたのである。

わたしは、ことばや表現は、まったく自由であるべきだと考える。まったく自由であるから、書き手は当然それにみあう責任がともなう。その責任は表現者としては当然のものである。

差別意識や身分意識などといった、封建的人間観を否定し、克服を促すように書かれるべきであろう。少なくとも、先に挙げた『坊ちゃん』のような場合、書き手は批判者でなければならない。差別・支配の文化は克服され、新しい人間的な文化が創造されねばならない。支配・排除ではなく人々が共生する文化でなければならない。そうした新しい文化の形成の過程でこそ、差別語や差別表現はなくなっていくのである。より豊かで、より人間的な文学作品も、そこから生み出されるに違いない」と述べている。

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会（2011 年）

「軍人の非戦・平和主義者」

みず の ひろ のり

水野広徳（1875～1945）

「世にこびず人におもねらず我はわが正しいと思う道を進まん」



これは、松山市の正宗寺にある、水野広徳^{ひろのり}の碑に記された歌である。戦争の時代と真正面に向き合った、平和主義者の生き様がうかがえる。

水野広徳は、第一次世界大戦後の欧米諸国を視察し、近代戦争の惨状を痛感した。特に敗戦国ドイツ・ベルリンの人々の惨劇を目撃、戦争の罪悪が身にしみ、180 度の思想転換を行う。帰国後は積極的に「非戦・平和論」を展開する。水野 45 歳のときである。

水野が軍服を脱いだ年に、ワシントンで軍縮会議が開かれた。その結果、海軍人事の整理が行われ、多数の将校が現役を去ることとなり、退職将校には多額の手当が支給された。水野も後 6 か月待つて退役していたら手当をもらえたが、水野がそれに耳をかすことはなかった。彼の生き方を示している。

1 偶然の出会い

中の川通りを歩いていると「水野広徳の墓所」と書かれた案内板の前に、大きくて立派な蓮福寺というお寺が建っている。何となく気になって、正面の階段を三段ほど上がって、中をのぞき込んでみた。すると中から優しそうな住職さんが声をかけてくれた。

「何か用事かね。」「こんにちは。あそこに水野広徳って書いてあったので。」「それならお墓を拝んで行ったらええ。」住職さんの後について、お寺の裏側の墓地に行った。

墓地の真ん中に、広徳さんの古いお墓があった。その横には「平和護念之碑」という大きな碑も建てられていた。碑には 1945（昭和 20）年に亡くなったと彫ってある。

その年は、確か太平洋戦争が終わった年だ。戦争中に平和主義者なんていたのだろうか。いや平和はいつだって、だれだって望んでいる。でもあの頃に戦争反対などと言えたのだろうか。お墓に手を合わせ、住職さんにお礼を言って帰った。

2 つらく苦しい少年時代

亡くなった父を見送る数人の寂しい葬列を見ていた。「なんと惨めな葬式じゃのう。」近所の人の言葉を聞いた広徳は、奥歯をかみしめてにらみ返した。広徳が6歳の時のことである。

5年前に、母が赤痢で亡くなったときは、広徳はまだよちよち歩きだった。次は、5人の子どもを残して、父が胃を患って亡くなった。水野家には、広徳の兄にあたる長男がいたが、足が不自由だったため、広徳が相続人として喪主を務めていた。

父の葬儀のときの屈辱を、広徳は生涯忘れることはなかったという。両親が亡くなってから、水野家の子どもたちは、三津の生家から親戚の家にばらばらに預けられることになった。

広徳は母の里に当たる笹井家に引き取られた。無口で厳格な伯父は、挨拶、言葉遣い、姿勢、食事のきまり、掃除の仕方に至るまで、家庭でのしつけは厳しかった。いたずら好きの広徳はよく叱られた。

小学校時代、広徳は朝、学校に行く前に漢学塾へ通い、論語や孟子などを学んだ。もともと勉強が嫌いではなかったから、伯父から「塾に行ってもよい。」と言われた時にとて喜んだ。

しかし、笹井家の子どもであると同時に、使用人でもあった広徳は、勉強だけしていればよい訳ではなかった。朝一番に起きて掃き掃除、かまどの火付けをして、家族の朝ご飯の用意をした。学校から帰ると、使い走りや庭掃除、ランプの用意、家族の布団出しと、毎日ぐったりするほど働いた。

3 海軍への憧れ、そして活躍

そんな広徳の数少ない楽しみの一つは、お囲い池水練場で泳ぐことであった。夏になると朝・昼・夕と一日に3度通った。

夏休みには、秋山真之が海軍兵学校の夏休みで帰省し、水練場に来ているのに出会った。誰にもまねできない泳ぎを見て広徳の胸は熱くなり、海軍兵学校への憧れが芽生えた。

ところが、広徳にとって後戻りのできない大きな事件が起こった。伯父が、大切に育てていたホオジロに餌をやることを忘れ、死なせてしまったのである。

伯父は「よその家に世話になりながら、小鳥一羽に餌一つやれないような横着者は、兄のところへでも行け。」とすごい剣幕で広徳を追い出した。



そのころ広徳の兄は、不自由な足を引きずりながら、あんまや使い走りの仕事をして、中の川の極楽橋付近で、狭い部屋を借りて住んでいた。広徳と一緒に住むようになってからは、三畳一間に一つの布団を敷き、頭と足を反対にして二人で寝た。

米もろくに買えない生活のため、二人はいつもひもじい思いをしていた。兄は毎晩真夜中まで働いたが、貧しい暮らしの中で持病の発作が年を追うごとに悪化し、30歳の若さで亡くなった。

両親、そして兄を失い一人で暮らし始めた広徳は、中学を卒業する頃、海軍兵学校への進学を考え始めるようになった。

中学校での落第や退学、再入学、病気等、いろいろな試練を乗り越えて勉強した。4度目の挑戦で憧れの海軍兵学校に合格した。こうした粘り強さと目標に向かって努力を続ける血気盛んな若者に育っていた。

1896（明治29）年2月、広徳は大きな希望と誇りをもって江田島の海軍兵学校の門をくぐり、訓練と勉強を積み重ねた。

1904（明治37）年、日露戦争が始まった。広徳は日本海海戦に、第41号水雷艇長として参加した。当時30歳であった。

戦後、日本海海戦の様子を書き綴った戦記本『此一戦』を発行した。『此一戦』は発売直後から売れに売れ、ついに百数十版を重ねるベストセラーとなった。

さらに10年後、日米戦争を仮想した『次の一戦』という本を発表した。アメリカと戦争をしたら「日本は負けるだろう」と書かれた内容は、太平洋戦争を予見したものであった。

この頃は、まだ軍国主義者であった広徳は『次の一戦』の中で、日本海軍のさらなる充実を訴えていた。この本も発行と同時に爆発的に売れたが、出版許可をもらっていなかったという理由で本は出版禁止となり、広徳は謹慎処分を受けた。

42歳になった広徳は、第一次世界大戦中の欧米の様子を自分の目で確かめてみようと思い立ち、私費留学をすることにした。

1916（大正5）年、広徳はトランク一つを持ってロンドン、パリ、ローマ、アメリカに渡った。「文明国の戦争なるものが、いかに大規模であるか、これに比べると日露戦争など子どもの戦ごっこのようだ」これが広徳の感想だった。

また、ロンドンでドイツ軍の空襲に遭い、日本海軍のあり方を考え直し「これからは空軍の充実が必要だ。」と説いた。この時も、まだ軍国主義の先端を走る広徳だった。

広徳は帰国したものの、敗戦後のドイツの様子を見に行きたくなった。二度目の私費留学である。この留学が後に広徳の考え方を大きく変えることになるのである。

4 平和主義を唱える軍人

北フランスに着いた広徳が見たのは、戦争の爪痕残る無惨な風景だった。雨のように降り注ぐ敵弾により生き埋めにされたフランス軍、山が屍で覆われるまで肉弾攻撃を続けたドイツ軍。戦場のここかしこには、戦死者の墓標が林のごとく連なっている。戦死者 1200 万人、負傷者 500 万人。これだけの人間が、この大戦中国家の命令で死傷した。

戦勝国と敗戦国、戦前よりも幸福になった国はどこにもない。飢餓の苦しみと孤児・老人の嘆き、失業者の増大、職業の争奪戦などが残っているだけだ。

戦場で倒れた若者の血は何のために流されたのであろうか。これまでの軍備は、国家発展の手段だという広徳の信念が、根本から覆された。

平和であることを望むならば、平和の存立を脅かす一切のものに反対する勇気を持たなければならない。かくして、広徳は軍備第一の軍国主義の殻を脱ぎ捨て、一転して軍備撤廃主義者となった。

帰国した広徳は『第一次世界大戦の恐ろしさと敗戦国ドイツの大惨状を見て、日本は今後いかにして戦争に勝つかということよりも、いかにして、戦争を避けるべきかを考えることが、より重要であると痛切に感じた』と知人に語っている。

海軍大佐にまでなった軍人が、一転して平和主義者となる。この信じられないような転身は、広徳が幼少時代に培った反骨精神に裏打ちされている。

帰国してから書いた論文が問題となり、処分を受けたのをきっかけに、広徳はついに海軍を辞めることを決心した。少年時代に強く憧れて入った 25 年 6 カ月の海軍生活に終止符を打ったのである。

5 予想通りの敗戦

幼い頃、父の葬儀を馬鹿にされたときの悔しさ、笹井家での我慢と忍耐、兄との惨めで貧しい暮らし。広徳は孤独な環境の中で、強さを身に付けた。これこそが人々が言う広徳の反骨精神の礎とも言える。

この反骨精神が、この時代の日本で、帝国主義にノーと言える強固な意志を生み、国家に日米戦争は避けるべきだという警鐘を鳴らしたのである。戦争反対の評論や論文が、次々

と差し止められるようになってからは、広徳は反戦の思いを短歌や俳句に託しながら平和の大切さを訴え続けた。

しかし、広徳の客観性の高い力強いメッセージはこの時代の日本には受け入れられず、太平洋戦争への道をたどることとなった。広徳の予言通り、日本は負けて大きく傷付いた。

広徳は今治市の大島に疎開し終戦を迎え、1945（昭和 20）年、享年 71 歳で波乱の人生の幕を閉じた。今は松山市の蓮福寺の墓地で眠っている。

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会（2011 年）

「一粒米」

もりつね た ろう

森恒太郎（盲天外）（1864～1934）



つね たろう

森恒太郎（盲天外）は、1864（元治元）年に、伊予郡西余戸村の庄屋であった森謙蔵の長男として誕生した。恒太郎は、俳句や書道にすぐれた才能を持っていた。

「天外」というのは俳句の師である正岡子規がつけた号で、失明したのち「盲」の字を自分でつけて「盲天外」と名乗った。

1870（明治3）年、恒太郎が7歳のとき父を失い、ずっと母・くらの手で育てられた。

幼いころ、恒太郎は、西余戸村の腕白と一緒に神社の神輿蔵にあった干しアラメ（海草）の束を盗み出し、野原で焚き火をし、これが堆肥わらに飛び火して大騒ぎになった。駆けつけた大人たちによって火は消し止められたが、逃げ帰った恒太郎には、母・くらの厳しい叱責がまっていた。

「あの干しアラメは、大庄屋のお父様が、村が万一飢饉になった時に備えて蓄えていたものです。幼くてもお前はこの西余戸村の庄屋です。それが、大切なアラメを燃やしたうえに、村中を騒がせるとは。そのような者は、家に置くわけにはいきません…」母・くらは、松山藩主松平家の出で厳しかった。恒太郎は日の暮れた裏口から寒空の下に突き出され、容易に許してはもらえなかった。

この事件から恒太郎は「治に居て乱を忘れず」の先人の知恵と、村人相互の連帯、上に立つものとしての責任の重さを体得する。父謙蔵が近郷を束ねる大庄屋となったために、恒太郎は1864（元治元）年、生後3か月で庄屋職を与えられていた。

恒太郎は14歳のとき、愛媛県変則中学校（のちの松山中学校）に入学する。校長は、福沢諭吉の直弟子の草間時福であった。

明治維新の自由民権思想によって教育を受けた恒太郎は17歳で上京し、啓蒙思想家村正直の私塾同人社に学び、自由民権思想に基づく新時代の人となりを身につける。

1886（明治19）年、22歳の秋、恒太郎が帰村すると間もなく、余戸村は台風による洪水のために全村が壊滅的な被害を受けた。学んできたばかりの学識を活かして「余土農談会」というグループを青年たちでつくり、農業に新しい考えを取り入れていった。

青年たちと語り合い、県との交渉にも努めて、村の復興に努力し成果をあげた。これが恒太郎が、政界に進出するきっかけとなった。

1890（明治23）年、町村合併の結果、温泉郡余土村と改められ、26歳の恒太郎は村会議員に選出された。さらに「愛媛県改進黨」の結成に加わり、機関紙「予讃新報」（のちの愛媛新報）を発行する。同年愛媛県議会議員選挙が実施され、改進黨から出馬して当選を果たし、地方衛生会、山林会、南予鉄道（のちの伊予鉄道郡中線）、伊予肥料会社、松山紡績などの創設に奔走した。

その間、改進黨の政治活動、新聞発行、さらには道後温泉や松山の料亭での豪遊の結果、気がついたときには森家の財産70町歩がなくなっていた。

さすがの恒太郎も政界の引退を決意して、松山市に出て三樹堂という薬局を開業した。この頃から三樹堂弧鶴こかくの俳号で、芭蕉の精神に立ち返って、新しい時代にふさわしい俳譜を作ろうと、俳譜誌「はせを影（ばしょうかげ）」を創刊した。その2号には、東京帝国大学学生であった正岡子規も紀行文を寄せ、文芸家としての夢を追う三樹堂弧鶴に「天外」の俳号を贈っている。

恒太郎の人柄を知ることのできる逸話が残されている。

母・くらが恒太郎に「もうお前は、田地をなくしてしまい、金もなくしてしまった。家にはもう何もなくなってしまった。だが、この大切な系図だけではなくさないで私が持っていた。これを今日お前に渡すから、大切に保存しなさい。」と手渡した。

恒太郎は「はい」と言って恭しくこれを受け取って、そこをさがった。間もなくして土蔵の前に何か煙が出ているので、母親が不審に思い行ってみると、いま渡した系図を焼いている煙であった。母親は「お前は何をするのか、正気なのか。」と怒り詰問した。

恒太郎は「お母さん、こんなものが世の中にあるから、同じ日本人でありながら、苦しめたり苦しめられたり、虐げたり虐げられたりしなければならないのです。われわれ日本人はみんな一つなんです。こんなものがあるからいけないのです。」と答えたという。

1894（明治27）年9月、突然、左目に眼底出血を起こし、東京の大学病院で治療に手を尽くすが、33歳のとき、両眼とも失明した。恒太郎も目が見えなくなった事実をすぐに受け入れることができた訳ではなかった。失意のどん底に突き落とされ、将来に希望を失い三度も死を決意したが、母の悲しみを思い果たすことができなかった。

そんなある日のこと、恒太郎は食事のとき米粒を箸から落とした。米の粒のかすかな重さをひざの上に感じた。こぼした米粒に指が触れたとき、恒太郎ははっとした。『暗黒の心の内を照破する』というような悟りを得た。

「そうだ、これは、わずか一粒の米にすぎない。一粒の米でさえ、熱い湯で煮られ、歯で碎かれ、胃腸で消化されるという苦しい道を通り、その人の血となり肉となり、いや、精神にまで向上進化していくではないか。たとえ目は見えなくても、世のため人のために

働くことはできる。やらねばならない。」と、一粒の米から勇気づけられ自分自身を見つめ直し、前向きに生きていこうと決意した。

恒太郎のもとに、混乱した村政を立て直すために余土村長になってほしいとの要請が届く。「私は、ご存知のように目が見えないので文字も読めません、せっかくですが、お引き受けできません。」「役場の書類など事務は助役がやります。指図をしてくれればよいのです。あなたのすぐれた考えを出して、村を治めてほしいのです。」「気持ちはうれしいが。」「どうか、お願いします。これは、この村の人々の総意です。」

恒太郎はいろいろと考え悩んだが、村人たちの強い熱意に動かされ村長を引き受けることにした。しかし、愛媛県より視力障がい者のため不認可とされる。

恒太郎は、ここで引き下がると、以後身体障がい者が公職に就けなくなると、その不当性を県知事に抗議し、ついに認めさせた。日本で初めて盲目の村長が誕生した。1898（明治31）年2月25日のことだった。この頃より、『盲天外』と自らを呼称するようになる。

恒太郎は村長になると先ず、人口動態、村民の経済力、気象観測などの基本調査を実施し、それに基づいて、1900（明治33）年『余土村是』が作られた。

『村是』は、次の7つにまとめられる。

- 小学校の教育をよくしよう。
- 青年たちの教育に力を入れよう。
- 土地を改良して、よい田畑にしよう。
- しっかり貯金をしよう。
- くらしや農業で使う品物は、村でまとめて安く買い入れよう。
- 小作人が困らないように助けよう。
- 副業をさかんにしよう。

○小学校の教育をよくしよう。

当時、小学校を卒業して高等科に行って勉強する生徒は、松山市の高等小学校に通っていた。森村長は、農村の子どもは農村で教育しなければならないと考え、余土尋常高等小学校を開校した。そして市坪から石手川を越えて通う子どものために、二つの橋をかけて安全に学校に通うことができるようにした。

また、村を良くするために、子どものころから村役場の仕事を勉強しておくことが大切であると考え、小学校の子どもが毎月第2週と第4週の土曜日の午後「児童役場」を開くことにし、教室の入り口に余土村児童役場の看板を掲げ、3年生以上の子どもは大人扱

いで「公民」とされ、公民は投票することができた。

○青年たちの教育に力を入れよう。

まず、青年たちの中心になって働くリーダーを育てるために「余土村青年実習会」を作った。村人として必要なことを学ぶため、森村長が自ら道徳や経済の勉強を教えた。

国語や算数は小学校の先生に、農業は農事試験場の技師や農業のことをよく知っている農家の人などに指導をお願いした。

このようにして、若い人たちを立派に育てるために力を入れた。これが余土村を改善する大きな土台になった。

○ 土地を改良して、よい田畑にしよう。

石手川と重信川の二つの川が、余土村の中で一つに出合うあたりは水量が多く、底なし沼と呼ばれていた。村長はいらぬ水を抜くことを考え、余土村に降る雨の量をはかつて、米を作るため必要な水の量との差を計算した。必要のない水を流すためには、どれぐらいの大きさの川を何本つければよいか調べて新しい川をつくった。

そして東西の長さ22メートル、5枚の田で110メートルになるよう、同じ広さ・同じ形の田畑に改良した。まっすぐなあぜで区切り、道や川も田にそってつけた。水はけをよくし、砂や小石の多い所には土を入れて、米や麦の収穫量を増やした。

いろいろと改良したことにより、新しく19町の田が増え、仕事はしやすくなるし、土地は良くなり、よい米がたくさん取れるようになった。余土村はだんだん豊かな村に変わっていった。こうした余土村の農業を見学に来る人がたくさんふえた。

○ しっかり貯金をしよう。

世の中が進むにつれて、松山の中心部に近い余土村の人々のくらしは贅沢になり、働くことをおろそかにする傾向が見受けられるようになった。

1901（明治34）年から、小学校の5年生以上の子どもたちは、毎週日曜日に村の家々を回って10銭以下のお金を集め、役場に持ち寄り、銀行に貯金をした。

そのころ余土村には453軒の家があった。最初の集金では70円余り集めたが、やがて50円、40円と減っていった。村人の中から「村長さん、貯金は毎月一回ということにしてくれませんか。月に4回も5回も小学校の子どもたちに催促されてはかないません。」という声も出た。村長は「毎月一度の貯金にすると、後の29日間は貯金のことをすっかり忘れて暮らしてしまう。一週間ごとに貯金をすると、それだけ毎日の暮らしで、むだ使いをしなくなる。お金が多く集まることよりも、それがねらいだ。」と、毎週の貯金集めを続けた。

森村長は時々小学校に出かけて行って、子どもたちに「みなさんの集めた貯金が今では

2万3千円になった。この貯金で村の人は牛を買ったり、農具を買ったり、納屋を建てたりするときに大変助かっている。みなさんはこの余土村の暮らしを豊かにするお手伝いをしている。ご苦労ですがお願いします。」とお礼を言った。

○ 小作人が困らないように助けよう。

そのころ、村では田や畑をたくさん持っている地主と、その地主から田や畑を借りて農業をしてくらしている小作の農家があった。小作の農家では、一年間の収穫の中から、年貢米といって地主に田畑の借り賃を払っていた。そこで、小作の農家が作物のできが悪く収入が減ると年貢米が少なくなるので、お互いに助け合わないといけないことを、森村長は人々に話して回った。「田一反に米一升はわずかであるが、米を小作のために積み立てるという気持ちが大切だ。地主から喜んで出してもらうために、わたしも地主の家を回る。」と言って、大きなふくろに「小作保護積立」と書いて首からさげ、先頭に立って役場の人たちとともに米を集めて回った。これに反対する人もいたが、村長の決心はゆるがなかった。

杖をついて地主の家ごとにわけを話して歩いた。この積立米をするようになってから小作の農家から地主におさめる年貢米が年ごとに多くなった。米の市場でも余土村の米は良いと評判が高くなったといわれて村人たちは、森村長が考えた積立米に感謝するようになった。

村を改善するためにかかげた『余土村是』は、村長を中心に着実に実行され、盲目村長の姿は村民の心を動かし、自治共同の精神を芽生えさせ、着々と成果をあげ村が生き生きと立ち直った。

1903（明治36）年、第5回内国勸業博覧会に出品した「余土村是資料」が、会場の注目を集め一等賞に選ばれると、先進的な自治体として全国から見学者が余土村に押し寄せた。恒太郎は、10年間余土村の村長として村づくりに努め、内務大臣からも「全国優良模範村」として表彰された。

さらに、恒太郎は、障がいのある子どもたちに教育の道を開き、自立させていくことこそ自らの責務であると、退職慰労金の全額を投げ出して、松山市二番町に盲啞学校をつくった。これが現在の県立盲学校・聾学校のもとである。

松山盲学校にある『一粒米の碑』は、時代を越えて、今も子どもたちに自立、向上の大切さを語りかけ、胸に火を灯し続けている。



森盲天外 石碑
(久万ノ台・愛媛県立松山盲学校内)

参考文献 「わたしたちの余土」 松山市立余土小学校

「松山騒動の虚と実」

やまうち よ え もん 山内與右衛門（江戸時代）



南江戸・西山の麓、字 朝日谷に、松山藩目付 山内久元（與右衛門）の霊を祀る山内神社がある。旧村社。久元は享保大飢饉に際し藩主、松平定英の命を受けて、松山藩内の惨状を調査、報告したが、直後に起こった藩政大変動のなかで、藩主を惑わしたとの罪名のもとに、味酒村の長久寺で切腹を命ぜられた（山内家記）。その後、無実の罪に服したことがわかり、1743（寛保3）年藩庁は久元の次男岩次郎に父の扶持を与え、馬廻りとした。十一代藩主松平定通は久元の孫 弁右衛門に祭祀料を給付し、さらに彼の業績を顕彰するために社殿を造営し、神として祭祀した（増田家記）。1832（天保3）年3月には盛大な百年忌が執行された。（古今紀聞）。

山内與右衛門賛歌 藤田武明（著）

與右衛門賛歌は、私たちが少年の頃毎年大祭日の4月23日に、江戸山の社前で、社殿に向かって朝日小学校が右、味生小学校が左に並列。オルガンの伴奏にあわせて、両小学校の生徒が一節ずつ掛け合いで歌い、最後の一節は全員で斉唱した。

この13節全部の歌詞を私より一期上級生で、大正7年朝日小学校を卒業した沢村（現・朝美二丁目）の藤田笹市氏が記録していることがわかった。南江戸村の一色高明氏が、兄一色高美氏から貰ったものを写したといわれる。

何年か前に市の教育委員が笹市氏に歌詞を聞きたいと訪れたことがあったが、委員は一、二節を手控えただけで帰ったそうである。笹市氏はこの賛歌の話になると『あの時なぜ歌詞の全章を控えて帰らなんだのか、あれでは松山騒動のあらましが皆さんに判って貰えない』という。笹市氏は、戦災で消失した山内神社の跡に建てられた小さい祠の屋根を塗装したり、境内の清掃・石段の修復をするなど実に奇人な人である。

昭和52年の春、朝美の陣屋跡について、私は藤田寿平と「亀三屋敷」との関係に関連して、朝日八幡神社の玉垣を調査したことがある。社の西側から松山藩の殿様の久松家・沢村の五百木・同じく藤田亀三・藤田助五郎・藤田寿平などの名前が彫られた大理石柱があることが確認された。

この時、戦災で焼け落ちた山内神社の鬼瓦の破片を、境内の北側の焼瓦の中から探し出した。その鬼瓦には九曜の紋所が見られる。今、私宅南の子庭に集めた鬼瓦とともに飾っている。昭和55年2月、和田茂樹先生を子規記念博物館にお訪ねした際、山内神社の話が進んだ。私が山内與右衛門賛歌のあることを話すと、ちょっと唄ってみてはとの御注文、しかし此の時点では、第一節と最後の節13節しか判っていなかった。同年の9月19日、笹市氏から原稿を頂きコピーした。

幼年時代に耳からはいった歌詞からの原稿には、ところどころに誤りのあることが、和田先生にお見せして明らかになった。歌には久松家の御家騒動のあらましが歌い込まれている。焼けた社殿の北側にかかっていた大きな絵馬には、山内與右衛門の亡霊が殿さまの夢枕に立っている絵が描かれていた。現在境内の北の端に、西村清臣の歌詞の彫られた自然石の碑がある。また参道登り口の右には『西山に桜一木のあるじ哉』と正岡子規の句碑があり、松山俳句の里巡り城下コース第33番のポストとなっている。

山内與右衛門賛歌（奥村算貞 謹作）

- 1 常盤の松の色ふかき その松山に名も高く 書籍に口碑に伝わりて 誉れを千歳に遺したる 忠誠義烈の大丈夫は 山内與右衛門久元氏
- 2 松山侯に仕えしが 常に忠勤怠らず 公も股肱と頼ませる 折しも奸臣奥平久兵衛と云ふ 家老職 表は忠義を装ひて
- 3 内心奸智にたけたれば 一味徒党をかたらいて 主公を亡くし己が儘 養子は公の血統ぞと 十有五万の御領地を 奪いてわれは久万山の
- 4 六千石を押領し 栄耀栄華を極めんと たくむ心ぞおぞましき 江戸結なりし山内氏 それと悟りておもえらく かかる逆臣あるときは
- 5 この後お家に如何様の 騒動起るも計られず いざ一命を投げ打ちて 彼を打たんと謀りしも その事洩れて果し得ず 恨みをのみて待つ程に
- 6 帰国の命の有たれば 是非なく江戸より立ち帰り 同志と心を砕くうち 程もあらせず奸党の たくみな罠に陥いりて 網乗り物にからめられ
- 7 檀寺味酒の長久寺 検使をうけて腹切し 時は享保18年 師走5日の朝霜 と消え果しこそ悔けれ よしやこの身は死すとても
- 8 魂隗この世に止りて 公を守護なし奉り 奸臣ばらを払わんと 泣血悲憤の言の一葉は 後にぞ思い知られける 此方は悪計いやつのも
- 9 忠義の人は悉く 無実の罪に陥せられ 若君帰城の近ければ 三津のお茶屋に待

ち設け 毒殺せんと謀りしを 御船岩城の島近く
10 波を破りて進むうち 豈計らんや與右術門の 亡靈忽ち現れて 危難のあらまし上申し 高浜港より御上陸 事なく帰城ありければ
11 陰謀ついに現れて 善悪邪正かくれなく 巨魁はやがて沖遠き 生名の島に流されて 余類残らず誅に伏し 忠奸処をかえにしは
12 実に心地よき次第なり 與右衛門公の死を悼み 其の忠烈を追賞し 松山近き江戸山に 山内神社とあがめられ 春秋祭祀怠らず
13 今に社前の山桜 朝日に匂う芳魂は 忠臣烈士の鑑ぞと 称えらるこそ誉れなれ 実に忠臣の鑑ぞと仰がぬ人ぞなかりける

山内神社のおかれた環境

松山城の西に横たわった丘陵を西山といい、その頂上を千畳敷と称し、眺望絶景の地である。東面の山腹には桜樹多く由緒ある寺社が多い。山内神社は朝日八幡神社の境内にあり、松山藩の忠臣、山内與右衛門の霊を祀った祠である。西山地域は私たち朝美村立朝日尋常小学校児童の心身鍛練の場でもあった。

12月15日の夜明け前、朝日小学校の上級生有志は、各自朝日八幡神社の北側の尾根から、西山の山頂に向って登り、千畳敷に集合した。そこで赤穂義士討入りの勇壮な歌「寄せ手の勇士四十七 夜深き夢を破りけり 不具載天の仇を討つ 吉良の屋敷の雪あかり 蹴破る門乗り越す塀 大刀をかざし槍をしごき」を全員で合唱し、万歳を三唱した。

明けかかる東の空に、遠く石鎚の連峰、手前には松山城。西は瀬戸の海、興居島、中島は遥にかすむ。はく息は白く、心の中は赤い。

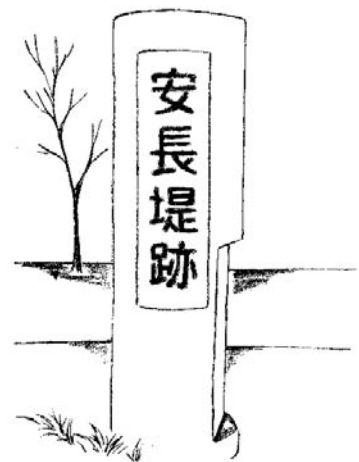
朝日八幡に参拝して下山、学校に至り校庭の大きな梅檀の木の下で、小使いの助五郎爺さんの肝煎りで、平釜一杯に出来上った温い甘藷粥^{かんしょがゆ}を皆ですすった。大正6、7年の冬の行事のひとつであった。

参考文献 「日本地名大系第3巻 愛媛の地名」 株式会社平凡社 （1980年）

「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会 （2011年）

「水との闘い」

やすなが くろう ざ えもん
安長九郎左衛門（江戸時代）



安長九郎左衛門 標柱
(市坪西町・松山中央公園内)

1603（慶長8）年頃、正木城主・加藤嘉明の命により、伊予川の洪水を防ぐために、足立重信による大規模な改修工事が始まったと言われている。

この大工事で、伊予川近くの田畑は水害が少なくなり、多くの荒地は水田に変わり収穫量が増えた。足立重信の働きを記念して、伊予川は重信川と呼ばれるようになった。

さらに、加藤嘉明は今の城山（勝山）に、新しい城を建てることを計画した。足立重信は立派な城下町をつくるために、石手寺の上流にある岩堰の岩を切り開き、水路を南西の方向にのばして、余戸（出合）で重信川に合流させることにした。

岩堰の工事は「つち」と「のみ」しかない当時としては、岩1升を掘るのに、米1升到相当する代金を支払ったといわれ、掘った岩の量が1千貫あったことから「千貫岩」と言われる難工事であった。こうして重信川の大改修、石手川の付け替え工事、勝山城築城の工事が進められた。

水との闘い

本来、市坪は洪水の心配などは、ほとんどない地域であった。しかし石手川と重信川の改修工事によって、川に囲まれることになってから、雨が降るたびに、上流からの土砂が大量に流れ出し、洪水を引き起こすことになった。

1602（元和6）年、村人が恐れていたことが現実となり、堤防が決壊し、濁流が市坪の村全体を飲み込んでしまった。人々の胸に絶望感がこみ上げてきた。

そのとき「壊れた堤防を、これまで以上に強いものにするしかない。われわれの村だ。われわれの力で、何としても成し遂げるぞ。」そう力強く、宣言する人物がいた。彼こそが安長九郎左衛門であった。

「私は災害とたたかう。そのためには私の財産も何もかもつぎ込もう。皆さん、私を信じて協力してくれないだろうか。」と、九郎左衛門は、みんなに訴えた。

「俺たちには金がない。」九郎左衛門は言った。「金は私が工面する。皆さんは力を貸し

て欲しい。自分たちの村だ。自分たちで立て直そうじゃないか。」村人は、九郎左衛門の言葉に励まされた。

「よし、やろう。堤防を頑丈なものにしよう。」ついに村人たちは、九郎左衛門とともに立ち上がったのである。人々は九郎左衛門の村を思う気持ちに感動し、夜おそくまで「槌」や「もっこ」を使って、一生懸命働いた。

そして、石手川の堤防、東西約 540 ㍍を直すことができた。ところが、人々の田畑を耕すという喜びも長続きしなかった。1652（承応元）年 8 月、また雨が降り続き大洪水となって、せっかく直した堤防も、あっという間に切れてしまい、多くの田畑を失った。人々はがっかりし、堤防を直そうとしないばかりか、あきらめて村を出て行く人さえ現れてきた。

九郎左衛門はそれでもあきらめず、わずかな財産を投げ出して、村の人々に声をかけ、再び堤防を直す工事に取り組み始めた。村の人々も九郎左衛門の村を思う気持ちに心を動かされ、力を合わせて働いた。

1678（延宝 6）年 3 月、3 度目の大洪水が押し寄せてきた。雨が降り続くと、村人みんなで堤防を守ろうとした。しかし雨に打たれ、どろまみれになった人々のすぐ近くで濁流の渦巻いているのがはっきり映ってくるのであった。

土のうで堤防を補強するなど、人々の必死の努力のかいもなく、北の石手川の堤防の一部が切れてしまった。

九郎左衛門は、米に代えられる財産もなくなってしまった。しかし、市坪を立て直さなくてはいという思いは、今まで以上に大きく心の中にふくらんできた。今度ばかりは、藩に助けをもらうしかないと考え、当時の藩主・松平定直公に願い出た。

藩は九郎左衛門の働きぶりも、市坪を立て直そうという強い気持ちもよくわかっていたので、堤防の復旧工事を手助けすることにした。

九郎左衛門をはじめ、村の人々はたいそう喜び、今までと違って堤防工事に明るい気持ちで取り組むことができた。そして、九郎左衛門が全財産を投げ出して村のために努力してきてくれたことに感謝するばかりであった。

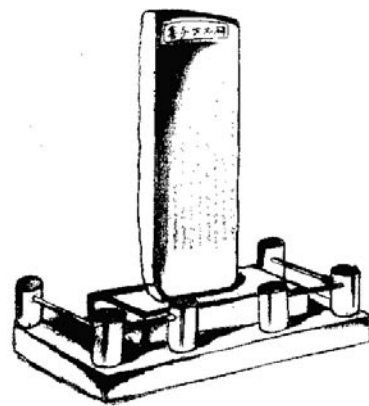
藩の力を借りてつくり直された堤防を、人々は九郎左衛門への感謝の気持ちから「安長堤」とか「安長土手」と呼ぶようになった。

市坪の椿中学校の西、玉善寺の境内に石塔がある。この石塔はお経を納めるものであるが、安長九郎左衛門の墓ではないかといわれている。

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会（2011 年）

「太郎兵衛とお喜与さん」

（江戸時代）



喜与女之碑
（喜与町 1 丁目）

1730 年ころ、松山地方はひどい飢饉になり、人々は苦しみにあえいでいた。

松山藩主は税を重くしたり、節約のお触れを出したり、武士の給料を下げたりするなどいろいろな手をうったが、人々の暮らしはますます苦しくなるばかりであった。そのため人々の気持ちはすさみ、心が乱れ、罪を犯す人も増え、不安な世の中になっていった。

そのころの石手川は、150 年前の大改修とともに植えられた松の木もよく成長し、美しい緑が連なっていた。ところが、その松の木を盗むものがでてきた。藩の役人は、犯人を捕らえようとして監視を厳しくしたが、いっこうに減らなかった。

ある朝、役人が見回りをしていると、やはり松の木が盗まれていたが、松の木を引きずった跡が、はっきり残っていた。

役人は目を皿のようにして、その跡をたどって行くと、持田地区に入っていた。「これで、犯人の手がかりはできた。持田地区の百姓が盗んだに違いない。」と考え、持田地区の百姓を一人ひとり調べ始めた。

しかし、犯人はなかなか見つからず、役人は怪しいと思われる百姓を次々と捕らえては牢に閉じ込め「白状するまで帰さぬ。」と連日厳しく取り調べた。

捕らえられた百姓たちは、狭い暗い牢の中で、家にいる妻や子のこと、野良仕事のこと、恐ろしい拷問のことなどを思い出しながら、言葉で言えないぐらい、辛い日々を過ごしていた。

そんなとき、人々の不安と苦しみを見かねて「私が盗みました。」と申し出た百姓があった。それは、太郎兵衛という年とった貧しい百姓で、まじめで親切でよく働く、近所でも評判のよい百姓であった。

「だれか一人、私がやったと名のり出れば村に平和がくる。牢につながれている人が家に帰される。」太郎兵衛は深く心に決するところがあった。身代わりとなって牢につながれた。「なに、お前がやったのか、ふとどき者め。なぜ、早く申し出なかったか。」と強い調子で怒りはしたが、内心は「やれやれ、これで一件落着。年寄りには気の毒じゃが、しかたないことだ。」

やがて、冬が来た。この冬はことのほか寒く、つめたい牢屋は老人の太郎兵衛には耐えがたく、体は日に日に弱っていった。そして、どんな取り調べにも「私が盗みました。」の一点張りで押し通した。そして春が来るのを待たず、太郎兵衛は牢の中で命果ててしまった。1764（明和 4）年 2 月 17 日の朝のことであった。

気の毒だったのは、太郎兵衛の妻、お喜与さん。太郎兵衛が松の木盗みの犯人とされたので、役人は決まりに従い、わずかな田畑や家屋敷も取り上げてしまった。子どももなく親類もいない年老いたお喜与さんは、地区の片すみで、ほそぼそと一人寂しく暮らす身となった。

しかし、お喜与さんは、「牢死した夫は、決して盗みなどをするような人ではない。それどころか、大勢の人たちの犠牲となったのである」と固く信じ、いつかはその罪が晴れるであろうことを信じ、ただひたすら夫の冥福を祈っていた。

お喜与さんは、太郎兵衛におとらず立派な心の人で、親切で同情心に富み、信心深く、しかも骨身惜しまぬ働き者で、近所の人の世話もよくした。

特に近所の人が病気にでもなった時は、我が身を忘れて親切に看病し、お手伝いをするなどした。そのため近所の人たちは、お喜与さんを信頼し、相談事をしたり頼み事をしたりするようになり、しだいに地域での重要な人になっていった。

そのころのある夏、松山地方一帯に悪い疫病が流行して、多くの人々が病に倒れた。いろいろ手当てをしたが、そのかいもなく病気は日一日とはげしくなるばかりで、おさまる様子はなかった。

お喜与さんは、次々と各家をまわり、病人の世話をしたり、病人を励ましたり、洗濯ものを洗ったり、掃除をしたりした。

しかし疫病はますますはげしくなり、おさまる様子がないのでお喜与さんは、夫「太郎兵衛」が人々の苦しみを見かねて自ら進んで犯人になったように、自分も神様にこの身を捧げて、この疫病をおさめてもらうより外にないと決心した。「神様このように大勢の人々が、疫病で苦しんでおります。この疫病は私一人で引き受けます。私の身体を神様にさし上げます。私の身体はどうなってもよろしいから、大勢の人たちをお助けください。」とお喜与さんは一心にお祈りした。このお喜与さんの願いを、神様がお聞き届けくださったものか、さしもの疫病も次第に収まった。しかしお喜与さんは、ついに病の床についてしまった。

近所の人たちが介抱しようとかけつけると、お喜与さんは「みなさま、おかまいますな。ご心配してくださいますな。私は大勢の人たちが苦しめる様子を見て、私一人がみなさんの身代わりとなり、神様に私の身体をさし上げますから、大勢の人々をお助けください

と祈願いたしましたので、神様がお聞き届けくださったのです。私の命は、神様にあずけたのです。みなさまありがとうございました。長い間、お世話になりました。みなさまお達者で。」と別れを告げて、お喜与さんは、ついに息を引き取った。

あとがき

その後、疫病もおさまり、以前のような平和な日が来たので、人々は「お喜与さんの死は、私たちのために病気を一身にお引き受けくださったのだから、丁寧に霊をおまつりしなければとって、資材を持ち寄り、小さい祠を建てた。

ある時、通行人が急に腹痛で困っていると、そこに女のお遍路さんが現れ、一杯の水を与えたり呪文をとなえたりした。すると、たちどころに腹痛がなおり、お礼を申し上げようとすると、女のお遍路さんの姿は見当たらない。このようなことがあちらこちらであり、これはお喜与さんがお遍路姿となり、苦しむ人々を助けてくれるのだと人々は言った。そのようなことから「お喜与大明神」は、病気を治す神様として、人々から信仰されるようになった。

松山に市制がしかれた 1889（明治 22）年「お喜与さん」の徳を永久に忘れぬため、この地区を喜与町と名付け今日に至っている。

「お喜与大明神」は、1945（昭和 20）年の戦災であとかたもなく焼けてなくなり、その上、市の区画整理でその土地までなくなり、今は何一つ残っていない。

しかし「お喜与大明神」の近くに住んでいた松本能尚さんが、自宅の一角に小さな祠をつくり、「お喜与大明神」として現在もまつられている。

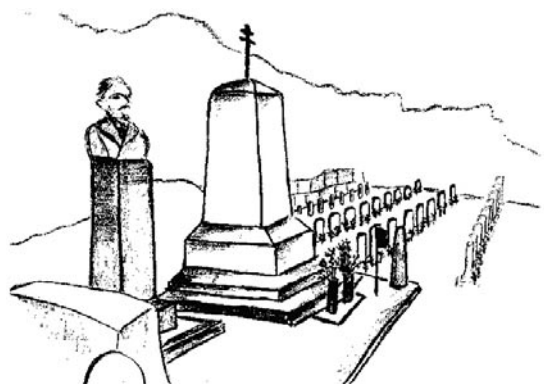
また、お喜与さんのことを何としても後世の人たちに、語り伝えておくべきだと考えた福田直記（元県教育次長）らにより、1979（昭和 54）年、お喜与さんのことを刻んだ碑文が、喜与町の赤穂内科の玄関北側に建てられた。

太郎兵衛についても人々は、その霊を若宮神社にまつり、その徳をたたえ霊を慰めた。それから人々は、この神社を「太郎兵衛神社」と呼ぶようになった。そして 1923（大正 12）年、太郎兵衛の徳を称える「彰徳碑」を建立した。

参考文献 「東雲の先人に学ぶ」 松山市立東雲小学校 （1991 年）

「ロシア兵墓地の歴史」

(1904～現在)



ロシア兵墓地
(御幸 1 丁目)

1904（明治 37）年、日本はロシアと戦争になり、日本海や大陸を舞台に日ましに激しさを増していった。この戦争でたくさんのロシア兵が捕虜となり日本各地の捕虜収容所におくられ、その数は全国で延べ 7 万 9 千人にのぼった。

松山にも捕虜収容所が開かれ、延べ 6 千 19 人の捕虜が、市内のお寺や現在の萱町あたりにあった市の公会堂などに収容された。捕虜は多

いときには 4 千人を超え、当時の松山市の人口の 1 割以上にもなった。

捕虜のロシア兵兵士の扱いは非常に寛大なものであった。松山市民に「敵国の兵士といえども国のために戦ったのであり本人の意思で戦ったのではない。まして本人が好んで負傷したのでもない。従って一時的とはいえ敵対心を抱いたり、捕虜兵に罵倒の言葉をかけたり、石を投げたり、のぞき見したり、または物乞いをしてはならない。」という心得が浸透していたからである。

これは当時世界の国々の間で約束された、ハーグ条約によるもので、ロシア兵を預かる松山が条約適用第一号となった。

捕虜には、決められた区域内の散歩や道後温泉への入浴、相撲や芝居の見学まで許可されていた。途中から自由外泊も認められ、位の高い軍人や奥さんのいる人には、借家住まいまで許可された。

捕虜との交流は、松山の文化まで影響を受けた。当時の日本人が身につけない洋服や革靴なども、捕虜の中にいた職人を雇って作られた。市内にはロシア兵捕虜のお店もでき、松山は国際都市のようになった。

捕虜は、元気な人たちばかりではなく、激しい戦争でけがをしたり、病気になった人も多数いた。けがや病気の患者たちは、今の愛媛大学がある場所に建てられた救護所に移され、献身的に介護された。

しかし、戦争が終わって、捕虜がロシアに帰ることができる日が来るまでに、98 名もの人たちが松山で亡くなった。そのため、収容所主催で葬儀が行われたが、一番盛大に行われたのが、海軍大佐であったワシリー・ボイスマン大佐の葬儀であった。

条約では、将校は傷の状態により、祖国へ帰ることができたが、ボイスマン大佐は重傷にもかかわらず「部下の兵が捕虜となるのだから、自分も捕虜となる。」と言って松山に送られた。

その後病状は回復せず、松山に来て 8 か月後、大勢の部下たちに看取られ、亡くなった。葬儀にはロシア兵たちばかりでなく、多くの松山市民も参加した。

亡くなったロシア兵を慰めるために、山越の弁天山にお墓が作られた。お墓は「祖国へ帰りたいかったであろう」という心遣いから、ふるさとロシアに向けて、北向きに建てられた。

最初は木製のお墓であったが、松山の人たちの手で大切に守られてきた。長い時間の中でお墓は腐り始めた。そのため石の墓標が建てられた。こうして墓地は新しく整備されたが、参拝に来る人も少なくなり、いつしか雑草の生い茂る所となってしまった。

1959（昭和 34）年ロシア兵墓地は松山市の管理となり、現在の来迎寺に移転された。それ以来、松山市民の「もてなしの心」で多くの方々により、保存活動が続けられることとなった。

勝山中学校生徒会とロシア兵墓地

ロシア兵墓地が現在の場所に移転されてから、婦人会や老人会の人々が清掃を続けていた。勝山中学校では 1965（昭和 40）年ころから、公的な場所の清掃活動などが積極的に取り上げられるようになり、長期休業前に校区内にある寺、神社、集会所、陸橋などの清掃が年 2 ～ 3 回行われるようになった。

このほか、石手川の改修に貢献した足立重信の墓地、その隣にある伊予の蘭学者の青地林宗の墓地や庚申庵の清掃を行った。その中にロシア兵墓地も加えられたが、年 2 ～ 3 回、晴天の日に限っての活動だったので、普段、墓地は雑草で覆われていた。

1983（昭和 58）年、勝山中学校は「国際理解教育」の一環として、地元にある史跡を十分に理解し、外国から来た観光客に説明できる力をつけようと様々な活動を行った。校区には有名な史跡がいくつかあったが、ロシア兵墓地は、生徒たちが平和について学習するのに適した場所であった。

当初は、教師のみが現地研修で訪れていたロシア兵墓地を土曜日の午後にみんなで清掃しようと呼びかけ、生徒による清掃奉仕活動が始まった。最初は 15 ～ 6 人の生徒が集まり、学校からほうきや鍬などを持参し墓地へ登った。

雑草が一面に茂った墓地は、1 時間半ほど作業が続けたが、この人数ではどうにもならなかった。そこで生徒会が全校生徒に呼びかけ、奉仕活動を本格的にやるようになり、そ

れ以後月 1 回の生徒会主催の清掃活動が始まった。

やがて、清掃活動を重ねていくうちに、参加人数も 200 名を超えるほどになり、墓地は雑草や落ち葉のない美しい墓地になった。

さらにこの清掃活動を続けていくなかで、市主催の墓地慰霊祭に、ソ連大使館の方々が参加することもあった。ソ連から親善舞踊団、音楽団員の訪問を受けるなど、国際交流の場が持たれるようにもなった。現在でも月に一度、勝山中学校生徒会による清掃奉仕活動は続けられている。

次の文章は、毎年 3 月に行われているロシア兵墓地慰霊祭で、2010（平成 22）年度、生徒会長の曾根夏生君が述べた言葉である。

『勝山中学校の生徒は、毎月第 2 土曜日にロシア兵墓地清掃奉仕活動を行っています。今年度も毎月 200 人近くの勝山中学の生徒がこの活動に参加しました。』

活動後の生徒は、心洗われるような、すがすがしい気持ち一杯で、それぞれの家に帰っていきます。

ロシア兵墓地には、日露戦争で捕虜になり、故郷へ帰るという願いを果たせず、この松山で亡くなった 98 名のロシア兵の方々が眠っています。当時の松山の人たちは、ロシア兵たちを親身になって世話したそうです。僕たち勝中生は、そのような松山市民の美しい心を受け継ぎながら、活動をしてきました。ロシア兵墓地清掃奉仕活動も、今年で 27 年目になります。

しかし、この活動は勝中生の力だけで、続けてきたわけではありません。ロシア兵墓地保存会の方々をはじめ、地域の方々の協力があって、今の活動が成り立っているのです。これからもそれぞれの方々への感謝の気持ちを忘れず、活動を続けていきたいと思います。

長年ロシア兵墓地清掃奉仕活動を行ってきたおかげで、発展していった活動があります。その一つがロシアの演奏家の方々との交流です。去年は清水公民館で、楽器の演奏を聴かせていただきました。また先日は、ポーランド大使の方が、勝山中学校を訪問してくださいました。大使は僕たち勝中生の活動に対して感謝の気持ちを述べられました。

『僕はこのような活動に、生徒会執行部として携われることを誇りに思います。そして活動を通して、ロシア兵墓地清掃奉仕活動の素晴らしさに気づきました。』

この活動は、国境を越えた友好の架け橋となっているのです。そして清掃という単純な活動が、日本とロシアの距離を近づけているということは間違いありません。

このような活動が世界中に広がり、勝山中学校から世界平和が広がっていったらいいなと、僕は思います。これからも、勝山中学校生の一員であるという誇りを胸に、ロシア兵墓地清掃奉仕活動を続けていきたいです。』

参考文献 「語り継ぎたいふるさと松山 百話」 松山市教育委員会（2011 年）

参考文献

「明治の空　－至誠の人　新田長次郎」　青山淳平（著）　燃焼社　（2009 年）

「山内與右衛門　松山騒動の虚と実」　藤田武明　伊予の民俗第 47 号　（1990 年）

「愛媛の先覚者 6」　愛媛県教育委員会／編集　愛媛県文化財保護協会　（1967 年）

「愛媛近代部落問題資料（上巻）」　高市光男（著）　近代史文庫　大阪研究会　（1974 年）

「藤村の「破戒」と正岡子規」　亀田順一（著）　兵庫部落問題研究所　（1993 年）

「子規博だより」　松山市子規記念博物館

「語り継ぎたいふるさと松山　百話」　松山市教育委員会　（2011 年）

「加藤拓川」　畠中淳（編著）　松山子規会　（1982 年）

月刊「部落解放」　解放出版社

「文学作品の差別表現」　解放出版社

「夜明けの証言・小林実回顧録」　小林実（著）　小林実回顧録刊行委員会編　（1985 年）

「労研饅頭と共に 60 年」　株式会社たけうち　（1991 年）

「労働科学研究　第 7 卷 1 号」　暉峻義等（著）　労働科学研究所　（1930 年）

「部落問題・人権事典」　（戦後の解放運動・愛媛県・松尾幸弘著）部落解放人権研究所　（2001 年）

「愛媛新聞労働組合 20 年史」　愛媛新聞労働組合　（1965 年）

「愛媛県百科大事典」　愛媛新聞編　（1985 年）

「つくられた部落その歴史と解放の歩み」

「みんなのしあわせをめざして・第一集・第二集」　松山市教育委員会　（1976 年）

「解放令考」

「四国近世被差別部落史研究」　明石書店　（1982 年）

「愛媛新聞」

「わたしたちの余土」　松山市立余土小学校

「愛媛子どものための伝記」　愛媛県教育会　（1987 年）

「道後の夜明け―伊佐庭翁ものがたり」　加藤恵一（著）　道後温泉旅館協同組合　（1988 年）

「石井村誌」　（1965 年）

「松山市誌」

「小説　石田波郷」　土方鐵（著）　解放出版社　（2001 年）

「郷土の俳人シリーズ　石田波郷」　愛媛新聞社

「日本地名大系第 3 卷　愛媛の地名」　株式会社平凡社　（1980 年）

「全国水平社を支えた人びと」　水平社博物館（編）　解放出版社　（2002 年）

「東雲の先人に学ぶ」　松山市立東雲小学校　（1991 年）

「再生への道標」　佐伯正夫（著）（株）愛媛ジャーナル　（2010 年）

編集委員

石丸 武正
森 和敏

玉井 常雄
村井 功

福岡 朋子
村上 保

松尾 幸弘
米田 學

「時代を切り拓いた先人たち」

発 行 松山市
松山市二番町四丁目 7-2
人権啓発課 948-6604

初 版……2013 (平成25) 年 3月 4,000部
第2版……2013 (平成25) 年 11月 2,500部

